

熊本県文化財調査報告第 295 集

# 神水遺跡 4

2014.3

熊本県教育委員会

# 神水遺跡 4



2014.3

熊本県教育委員会

## 序 文

本書は、県道戸島熊本線整備事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、熊本市中央区水前寺6丁目に所在する「神水遺跡」の発掘調査報告書です。本書では平成17年度・平成19年度・平成23年度に実施した神水遺跡の発掘調査の成果を整理・報告しています。

神水遺跡の所在する一帯は、以前から古代の肥後地方における政治的中心地として国府や国分寺、国分尼寺といった当時の重要機関の存在が指摘されてきました。しかし、戦後の急速な宅地化等で当時の様相をうかがい知ることが困難な状況が続いてきました。それでも昭和50年代から行政による発掘調査が本格化し、その調査成果から少しずつですが当時の様相が明らかになってきています。今回の調査もこうした調査の積み重ねの一つになることと思います。

今回の調査成果が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助としてご活用いただけると幸いです。

最後になりましたが、調査の円滑な実施に御理解と御協力を賜りました関係機関、地元の方々に対して、心より感謝申し上げます。

平成26年3月20日

熊本県教育長 田 崎 龍 一

## 例 言

- 1 本書は、県道戸島熊本線整備事業に伴い、記録保存を目的として実施した、熊本県熊本市水前寺 6 丁目に所在する神水遺跡の 9 次・10 次・12 次の発掘調査報告書である。
- 2 現地調査は、熊本土木事務所の依頼を受け、平成 17 年度から平成 23 年度までの期間に、熊本県教育庁文化課が行った。
- 3 整理・報告書作成は平成 25 年度 (2013) に行った。
- 4 国土座標軸による測量基準杭の設定は、9 次調査区は株式会社九州文化財研究所、10 次調査区・12 次調査区は株式会社ワールドコンサルタントに委託した。なお、9 次・10 次調査区の座標は日本測地系、12 次調査区は世界測地系を用いている。
- 5 本書の周辺遺跡地図で使用した地図は、国土地理院発行の熊本 1：25000 地形図である。
- 6 9 次調査区については、遺構実測は、株式会社九州文化財研究所に委託した。
- 7 遺物実測及び製図は、株式会社イビソク九州支店に委託した。一部は作田祐希、島川千秋、白木はる乃、佐々木舞、大坂亜矢子、土野雄貴が行った。
- 8 遺物写真撮影は、村田百合子、松本智子、蓮池千恵、島川、佐々木が行った。
- 9 本書の執筆は、第 1 章第 2 節を宮本大が、その他の文章を古城史雄が執筆した。
- 10 本書の編集は、古城を中心に行い、作田、島川、白木、佐々木が補助した。
- 11 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
- 2 報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。
- 3 須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。
- 4 土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」(財団法人日本色彩研究所：2004) に準拠した。
- 5 写真の縮尺は任意である。
- 6 遺構の性格を最終的に判断できなかったため、略号は S X (その他、不明遺構) と P (柱穴及び円形のくぼみ) を使用した。

# 本文目次

序文

例言・凡例

第I章 調査の契機と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	2

第II章 周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第III章 調査の成果

第1節 調査の方法	7
第2節 遺跡の概要と調査の経過	7
第3節 9次(2005年)調査の成果	12
第4節 10次(2007年)調査の成果	20
第5節 12次(2011年)調査の成果	44

第IV章 総括

第1節 遺構について	51
第2節 遺物について	53
第3節 まとめ	54

参考文献 56

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第 1 図	神水遺跡周辺遺跡地図 (S=1/25000)	4
第 2 図	調査区及び関連調査区位置図 (S=1/2500)	8
第 3 図	9 次・1 2 次遺構配置図 (S=1/1000)	9
第 4 図	1 0 次・1 2 次遺構配置図 (S=1/300)	10
第 5 図	9 次 1・2 区基本層序 (S=1/50)	12
第 6 図	9 次 1 区出土遺物実測図 (S=1/3)	12
第 7 図	9 次 1 区平面図及び柱穴断面図 (S=1/60)	13・14
第 8 図	9 次 2 区 S X 0 1 平面図及び土層断面図 (S=1/50)	15
第 9 図	9 次 2 区出土遺物実測図 (S=1/3)	15
第 10 図	9 次 3 区基本土層図 (S=1/50)	16
第 11 図	9 次 3 区柱穴平面図及び断面図 (S=1/50)	16
第 12 図	9 次 3 区出土遺物実測図 (S=1/3)	16
第 13 図	9 次 4 区遺構配置図及び断面図 (S=1/60)	17
第 14 図	9 次 4 区柱穴平面図及び断面図 (S=1/60)	18
第 15 図	9 次 4・5 区基本土層図 (S=1/50)	19
第 16 図	9 次 4 区出土遺物実測図 (S=1/3)	19
第 17 図	9 次 5 区柱穴及び S X 0 5 平面図及び断面図 (S=1/50)	19
第 18 図	1 0 次遺構配置図 (S=1/200)	21
第 19 図	1 0 次東壁土層断面図 (S=1/50)	22
第 20 図	1 0 次 S X 0 1 平面図 (S=1/50)	23・24
第 21 図	1 0 次 S X 0 1 土層断面図 (S=1/50)	25
第 22 図	1 0 次 S X 0 1 出土遺物実測図 (S=1/3)	26
第 23 図	1 0 次 S X 0 2 出土遺物実測図 (S=1/3)	26
第 24 図	1 0 次 S X 0 2・S X 0 3 平面図及び断面図 (S=1/50)	27・28
第 25 図	1 0 次西壁土層断面図 (S=1/50)	30
第 26 図	1 0 次 3・5 トレンチ北壁土層断面図、S X 0 4 平面図及び断面図 (S=1/50)	31
第 27 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図①(S=1/3)	32
第 28 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図②(S=1/3)	33
第 29 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図③(S=1/3)	34
第 30 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図④(S=1/3)	35
第 31 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑤(S=1/3)	36
第 32 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑥(S=1/3)	37
第 33 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑦(S=1/3)	38
第 34 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑧(S=1/3)	39
第 35 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑨(S=1/3)	40
第 36 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑩(S=1/3)	41
第 37 図	1 0 次 S X 0 3 出土遺物実測図⑪(S=1/3)	42
第 38 図	1 0 次 S X 0 5 出土遺物実測図 (S=1/3)	43

第 39 図	1 2 次 1 区遺構配置図 S X 0 1 ・ S X 0 2 ・ S X 0 3 平面図及び断面図 (S=1/50)	45
第 40 図	1 2 次 1 区出土遺物実測図 (S=1/3)	46
第 41 図	1 2 次 2 区遺構配置図 (S=1/50)	47
第 42 図	1 2 次 2 区土層断面図 (S=1/50)	48
第 43 図	1 2 次 2 区 S X 0 4 ・ S X 0 5 出土遺物実測図 (S=1/3)	49
第 44 図	1 2 次 3 区 S X 0 7 ・ S X 0 8 ・ S X 0 9 平面図及び断面図 (S=1/50)	50
第 45 図	1 2 次 3 区出土遺物実測図 (S=1/3)	50
第 46 図	関連調査区配置図 (S=1/2500)	52

## 表 目 次

表 1	周辺遺跡一覧表	5
表 2	遺物観察表	57

## 写 真 図 版 目 次

図版 1	9 次 1 区全景 9 次 2 区 S X 0 1 9 次 3 区調査状況	図版 8	1 0 次 S X 0 3 内ピット 3 完掘状況 1 0 次 S X 0 3 遺物出土状況① 1 0 次 S X 0 3 遺物出土状況②
図版 2	9 次 4 区 S X 0 3 ・ S X 0 4 完掘状況 9 次 5 区全景 1 0 次調査区全景	図版 9	1 0 次 S X 0 4 ・ S X 0 5 検出状況 1 0 次 S X 0 4 ・ S X 0 5 完掘状況 1 2 次 1 区調査区全景
図版 3	1 0 次調査区東壁基本土層 1 0 次 S X 0 1 検出状況 1 0 次 S X 0 1 完掘状況	図版 10	1 2 次 1 区 S X 0 2 土層 1 2 次 1 区 S X 0 2 遺物出土状況 1 2 次 1 区 S X 0 3 完掘状況
図版 4	1 0 次 S X 0 1 予備調査トレンチ (古井戸周辺) 遺物出土状況 1 0 次 S X 0 1 西壁土層① 1 0 次 S X 0 1 西壁土層②	図版 11	1 2 次 2 区 S X 0 4 ・ S X 0 5 完掘状況 1 2 次 2 区 S X 0 4 ・ S X 0 5 土層 1 2 次 3 区遺構検出状況
図版 5	1 0 次 S X 0 1 西壁土層③ 1 0 次 S X 0 1 (手前) 2 トレンチ北壁土層 (奥) 1 トレンチ北壁土層 1 0 次ピット 1 完掘状況	図版 12	1 2 次 3 区遺構完掘状況
図版 6	1 0 次 S X 0 2 遺物出土状況 1 0 次 S X 0 3 検出状況 1 0 次 S X 0 3 完掘状況	図版 13	出土遺物 (1 ~ 8)
図版 7	1 0 次 S X 0 3 西壁土層 1 0 次 S X 0 3 トレンチ北壁土層 1 0 次 S X 0 3 内ピット 2 完掘状況	図版 14	出土遺物 (9 ~ 17)
		図版 15	出土遺物 (18 ~ 24・26)
		図版 16	出土遺物 (25・27 ~ 31)
		図版 17	出土遺物 (32 ~ 37)
		図版 18	出土遺物 (38 ~ 42)
		図版 19	出土遺物 (43 ~ 47)
		図版 20	出土遺物 (48 ~ 53)
		図版 21	出土遺物 (54 ~ 59・61)
		図版 22	出土遺物 (60・62 ~ 65)
		図版 23	出土遺物 (66 ~ 73)

- 図版 24 出土遺物 (74 ~ 82)
- 図版 25 出土遺物 (83 ~ 92)
- 図版 26 出土遺物 (93 ~ 102)
- 図版 27 出土遺物 (103 ~ 111)
- 図版 28 出土遺物 (112 ~ 119・122)
- 図版 29 出土遺物 (120・121・123 ~ 128)
- 図版 30 出土遺物 (129 ~ 138)
- 図版 31 出土遺物 (139 ~ 148)
- 図版 32 出土遺物 (149 ~ 155)
- 図版 33 出土遺物 (156 ~ 162)
- 図版 34 出土遺物 (163 ~ 168・170)
- 図版 35 出土遺物 (169・写真のみの掲載)
- 図版 36 出土遺物 (写真のみの掲載)
- 図版 37 出土遺物 (写真のみの掲載)

# 第I章 調査の契機と経過

## 第1節 調査に至る経緯

県庁西側に位置する県道戸島熊本線において、歩行者の安全対策を目的として交差点改良及び歩道の幅を拡げる整備事業が行われることになった。この事業により神水遺跡の一部が滅失するため、確認調査を実施し、遺跡の残存が確認された箇所については発掘調査を実施して記録保存を行うこととなった。なお用地取得の関係で3カ年にわたり断続的に調査を実施している。各年次の調査の経緯は以下のとおりである。

### (1) 9次調査（平成17年度）

熊本県教育委員会は、熊本土木事務所長から平成15年10月16日付け熊土第2093号で戸島熊本線高齢者障害者にやさしいまちづくり事業に伴う「埋蔵文化財の予備調査について(依頼)」の提出を受け、平成15年10月21日、27日、12月3日に西住欣一郎文化財調査第二係長が確認調査を実施した。平成15年12月16日付け教文2652号で熊本県教育長から熊本土木事務所長あて発掘調査が必要になる旨及び文化財保護法第94条の1に基づく埋蔵文化財発掘の通知が必要になる旨を通知した。その後、平成17年5月9日付け熊土第105号で「埋蔵文化財発掘調査について(依頼)」が熊本土木事務所長から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受け、平成17年5月13日付け教文第353号で文化財保護法第99条第1項の規定により通知した。

### (2) 10次調査（平成19年度）

熊本県教育委員会は、熊本土木事務所長から平成17年11月17日付け熊土第801号で戸島熊本線緊急地方道路整備事業に伴う「埋蔵文化財の確認調査について(依頼)」の提出を受け、平成18年2月24日に廣田静学参事が確認調査を実施した。平成18年3月22日付け教文2380号で熊本県教育長から熊本土木事務所長あて発掘調査が必要になる旨及び文化財保護法第94条の1に基づく埋蔵文化財発掘の通知が必要になる旨を通知した。その後、平成19年5月31日付け熊土第244号で「埋蔵文化財発掘調査について(依頼)」が熊本土木事務所長から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受け、平成19年6月13日付け教文第676号で文化財保護法第99条第1項の規定により通知し、平成19年8月2日より調査を開始した。

### (3) 12次調査（平成22年度）

熊本県教育委員会は、熊本土木事務所長から平成22年10月25日付け熊土第864号で戸島熊本線活力創造基盤交付金事業に伴う「埋蔵文化財の確認調査について(依頼)」の提出を受け、平成23年2月15日に廣田参事が確認調査を実施した。平成23年4月11日付け教文82号で熊本県教育長から熊本土木事務所長あて発掘調査が必要になる旨及び文化財保護法第94条の1に基づく埋蔵文化財発掘の通知が必要になる旨を通知した。その後、平成23年5月9日付け熊土第139号で「埋蔵文化財発掘調査について(依頼)」が熊本土木事務所長から発掘調査の依頼と承諾書の提出を受け、平成23年5月11日付け教文第382号で文化財保護法第99条第1項の規定により通知し、平成23年5月25日より調査を開始した。

## 第2節 調査の組織

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となって実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。(役職は当時)

### (1) 本調査

#### 【平成17年度】

調査主体 熊本県教育委員会  
調査責任者 梶野英二(文化課長)  
調査総括 倉岡博(課長補佐)、西住欣一郎(文化財調査第2係長)  
調査事務局 吉田恵(課長補佐)、四元正明(主幹兼総務係長) 塚原健一(参事)、  
小谷仁志(主任主事)  
調査担当 松村洋史(文化財保護主事)、戸田英佑、河原京子(以上非常勤職員)

#### 【平成19年度】

調査主体 熊本県教育委員会  
調査責任者 梶野英二(文化課長)  
調査総括 江本直(課長補佐)、西住欣一郎(主幹兼文化財調査第2係長)  
調査事務局 宗村士郎(教育審議員兼課長補佐)、高宮優美(主幹兼総務係長)  
塚原健一(参事)、高松克行(主任主事)  
調査担当 中村幸弘(主任学芸員)、福田匡朗(非常勤職員)

#### 【平成23年度】

調査主体 熊本県教育委員会  
調査責任者 小田信也(文化課長)  
調査総括 西住欣一郎(主幹兼文化財調査第2係長)  
調査事務局 川上勝美(課長補佐)、水元敬浩(高校教育課主幹兼総務係長)  
調査担当 宮本大(文化財保護主事)、土野雄貴(非常勤職員)

### (2) 整理作業

#### 【平成25年度】

整理主体 熊本県教育委員会  
整理責任者 小田信也(文化課長)  
整理総括 西住欣一郎(課長補佐)、岡本真也(主幹兼文化財調査第2係長)  
後藤克博(文化財資料室長)  
整理事務局 馬場一也(課長補佐)、廣石啓哉(主幹兼総務・文化係長)、松尾康延(参事)  
有馬綾子(参事)、天草英子(主任主事)  
整理担当 古城史雄(主幹)、宮本大(文化財保護主事) 作田祐希(非常勤職員)  
島川千秋、白木はる乃、佐々木舞  
福島典子、石田敦子、古森信哉、土持友子、中尾規子(臨時職員)

調査指導及び協力者(順不同・敬称略)

坂上康俊(九州大学大学院人文科学研究員教授)、柴田博子(宮崎産業経営大学法学部教授)

永山修一(ラ・サール学園教諭)

網田龍生、金田一精、林田和人、松村真紀子、三好栄太郎(以上熊本市観光文化交流局文化振興課)

## 第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

神水遺跡の所在する熊本市は、熊本県の中央よりやや北寄りに位置する。東側は阿蘇外輪山、西側は島原湾（有明海）に面し、北側は台地、南側は平野とその様相は多岐に渡る。市を横断するように阿蘇山を源流とする白川が流れており、当該地域の地形、気候に限らず歴史や文化にも大きな影響を及ぼしている。西側に開けた感のある熊本市だが、実際には市北西部に位置する金峰山（標高 665m）系山麓によって海からの風は大きく遮られている。さらに対岸には島原半島があるため、熊本県最大の面積を誇る熊本平野を有しながら気候的には内陸性気候の特徴を示している。

神水遺跡は、阿蘇外輪山山麓から熊本平野に向かって西になだらかに傾斜する肥後台地の一つ、託麻原台地の南端に位置している。台地の北方には白川、南方には加勢川が走り、さらに台地縁辺部に点在する湧水地の一つ、江津湖に面している。このように水利に恵まれているものの、未固結堆積物より形成されている土壌は、表層に黒色のローム質の火山灰土、下層には砂礫層や阿蘇火山噴出物が堆積し、保水力が弱い。そのため台地上では畑地が、縁辺部では水田が多く営まれている。

### 第2節 歴史的環境（第1図・表1）

神水遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。台地の南端に位置する本遺跡を取り巻く歴史的環境について概略を述べていく。

旧石器時代については、当時の様相を窺い知ることのできる遺跡は確認されていない。新南部遺跡群、健軍神社周辺遺跡群等で石器が数点出土しているのみである。

縄文時代になると徐々に遺跡数が増えていく。縄文時代中期までは断片的な資料が散在しているだけだが縄文時代後期から晩期にかけて遺跡数が台地上で増加している。北久根山遺跡、新南部遺跡A地点（現新南部遺跡群）、乾原遺跡（現乾原・迎八反田遺跡）、渡鹿貝塚（現渡鹿遺跡群）、鳥井原遺跡、健軍上ノ原遺跡（現健軍神社周辺遺跡群）といった著名な遺跡が並ぶ。

弥生時代になると、台地上から次第に低地にも遺跡が多く出現するようになる。稲作の普及と海退による低地の陸化が関係していると言われている。黒髪町遺跡（現黒髪町遺跡群）は弥生土器の標識遺跡として有名である。

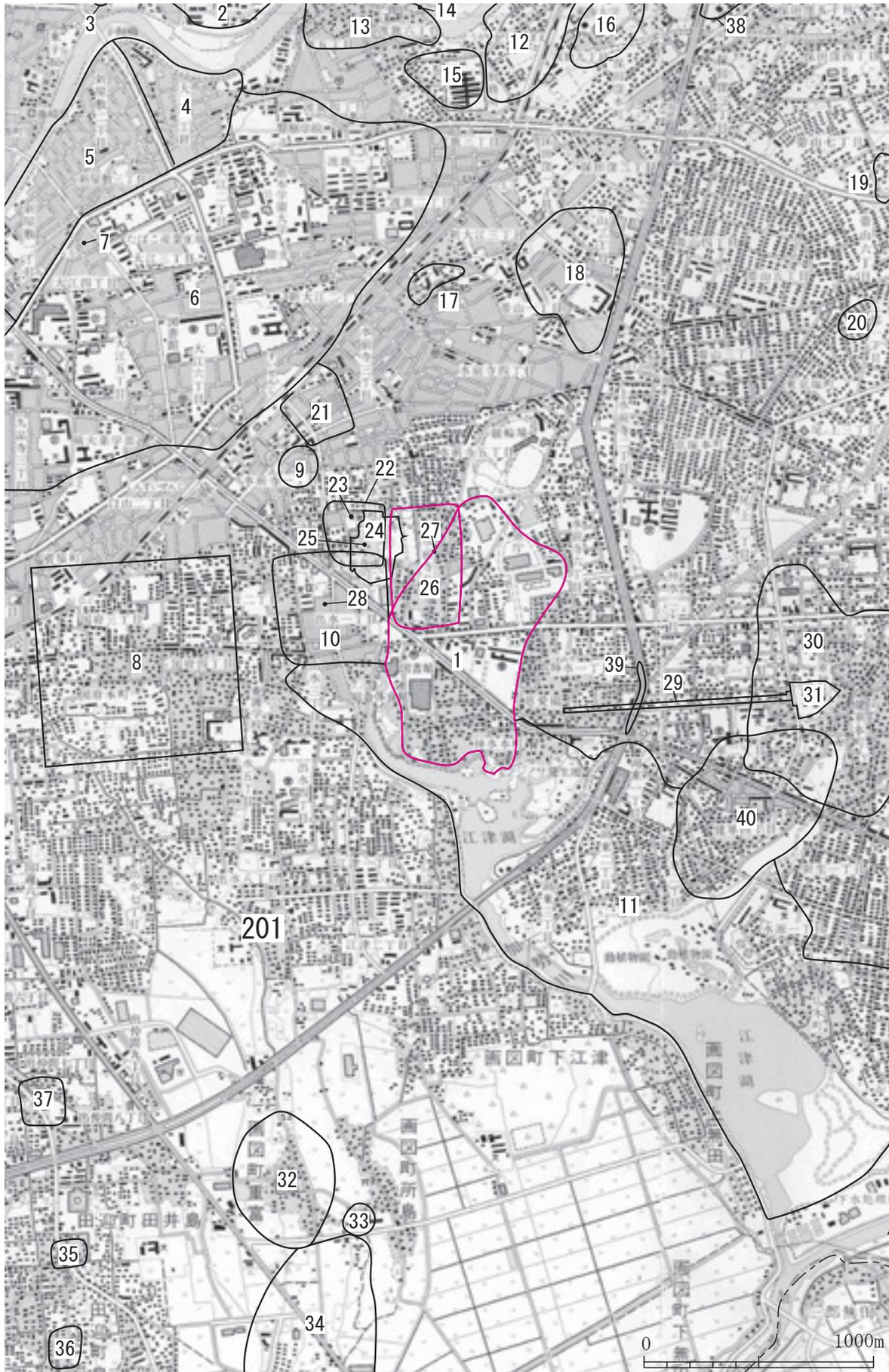
古墳時代では、高塚古墳は確認されていないが江津湖周辺では水源地遺跡、広木遺跡（現江津湖遺跡群）で方形周溝墓が検出されている。他に陳内石棺（現江津湖遺跡群）も本来は、方形周溝墓の可能性が高い遺跡と言われている。

古代に入ると出水国府跡、国分寺跡、陳山廃寺（国分尼寺）等が出現する。大江遺跡群では駅路（西街道）跡も検出されており、当時の政治的中心地として栄えたと推測される。

中世には国衙の移転等がかつての隆盛は影を潜める。健軍陳内城跡（現江津湖遺跡群）は阿蘇氏家臣の光永氏の居城と言われている。また南北朝時代の合戦として有名な託麻原合戦（1378年）の記念碑は水前寺陸上競技場内にある。

近世になると本遺跡周辺は、主に本庄手永今村及び田迎手永神水村に属していた。寛永13年（1636年）に回遊式庭園である水前寺成趣園が造られ、江津湖畔の風景と相まって風光明媚な景観を形成していた。

近代以降は、幾度かの町村合併を経て昭和初期までには熊本市となる。大正2年（1913年）に蚕糸試験場九州支場、昭和13年（1938年）に水前寺野球場が建設されるが、それでも戦前までは昔ながらの田園地帯が広がっていた。しかし戦後の熊本市域の拡張や熊本県庁の移転、国道57号線（通称東バイパス）の開



第1図 神水遺跡周辺遺跡地図(S=1/25000)

通等によってここ数十年で急速に宅地化、都市化が進んでいる。

最後に神水遺跡の調査履歴についても少し触れておく。本遺跡では、大正5年（1916年）に出水往還のアルコール会社前で甕棺1基が発見されたのが最も古い発見例である（大正5年1月11日付け九州日日新聞に掲載）。昭和に入ってから工事等による不時発見が相次ぎ、そのたびに文化財関係者による出土品の採集や記録保存が行われてきた。そしてこうした状況は、行政による発掘調査が本格化する昭和50年代まで続いた。それ以降に実施された発掘調査は、平成24年度の時点で本格的な発掘調査だけでも熊本県教育

表1 周辺遺跡一覧表

県NO		遺跡名	所在地(熊本市)	時代	種別	備考
278	2	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地	一帯に甕棺墓群
279	3	子飼遺跡	子飼町	縄文	包蔵地	
281	4	大江白川遺跡	大江1丁目	縄文～弥生	包蔵地	甕棺
282	5	新屋敷遺跡	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地	弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
283	6	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～近代	包蔵地	
284	7	大江義塾跡 (旧徳富邸)	大江4丁目	近代	建造物	大江義塾：県指定史跡、徳富旧邸：市指定史跡
290	8	出水国府跡	九品寺、国府、 国府本町	弥生～中世	包蔵地	
291	9	西水前寺町遺跡	水前寺1丁目	縄文～中世	包蔵地	
292	10	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世	包蔵地	県・市による多数の調査あり
293	11	江津湖遺跡群	神水町、画図町 他	縄文～中世	包蔵地	
332	12	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～古代	包蔵地	県北バイパス調査、市マンション調査などあり
335	13	渡鹿遺跡群	渡鹿5丁目	縄文・弥生	包蔵地	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺、板碑 釈迦像天文16年銘
336	14	渡鹿菅原神社境内	渡鹿6丁目	近世	寺社	市指定史跡
337	15	辻遺跡	渡鹿7丁目	縄文～古代	包蔵地	縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
338	16	新南部西原遺跡	新南部町	縄文～古代	包蔵地	
339	17	南平上遺跡	新大江3丁目	古代	包蔵地	
340	18	帯山遺跡群	帯山1丁目	縄文～古代	包蔵地	布日瓦、曾畑、阿高、竹崎
341	19	保田窪東一本松遺跡	保田窪本町	縄文～古代	包蔵地	
342	20	三郎塚遺跡	健軍町	縄文～古代	包蔵地	
347	21	北水前寺遺跡	水前寺3丁目	古代	包蔵地	
348	22	水前寺廃寺	水前寺公園	古代	包蔵地	
349	23	水前寺廃寺跡	水前寺公園	古代	寺社	塔(基壇・心礎・礎石群)部分について市指定史跡
350	24	水前寺成趣園	水前寺公園	近世	庭園	国指定史跡及び名勝、細川忠利、山水式
351	25	古今伝授の間	水前寺公園	近世	建造物	県指定重要文化財、細川藤孝古今集伝授、かやぶき茶室
352	26	陳山廃寺	水前寺公園	古代	寺社	国分尼寺推定地
353	27	洋学校教師館	水前寺公園	近代	建造物	県指定重要文化財
354	28	肥後出水国分寺塔心礎並礎石	出水1丁目	古代	寺社	塔心礎並びに礎石が市指定
355	1	神水遺跡	神水本町 出水	縄文～中世	包蔵地	県・市調査、報告書あり
356	29	健軍神社杉馬場	健軍2丁目 神水1丁目	近世	参道	市指定史跡
357	30	健軍神社周辺遺跡群	健軍2丁目	旧石器～中世	包蔵地	上の原縄文後期炭化米出土、市報告書あり
358	31	健軍神社境内	健軍本町	中世	寺社	市指定史跡
386	32	重富遺跡	画図町	古墳・古代	包蔵地	
387	33	所島大工免遺跡	画図町	弥生～古代	包蔵地	
388	34	山王遺跡	画図町	弥生～中世	包蔵地	
392	35	下乙地頭遺跡	田迎町	中世	包蔵地	土塁残存
393	36	四才町陳屋敷遺跡	田迎町	中世	包蔵地	土塁残存
494	37	田迎下乙遺跡	田迎町田井の島	古代・中世	包蔵地	六地藏、一字一石
512	38	西原遺跡	新南部	縄文	包蔵地	押型文
552	39	健軍京塚下遺跡	神水1丁目	縄文・古墳・ 古代	包蔵地	
*2	40	健軍遺跡群	健軍	新生1丁目 健軍4丁目	包蔵地	

委員会と熊本市教育委員会合わせて50件を超える。

## 第三章 調査の成果

### 第1節 調査の方法

今回の調査は、県道戸島熊本線の改良工事によるもので、交差点改良と歩道幅拡幅を主としたものである。用地取得の関係もあり、3カ年にわたり断続的、部分的に調査をおこなっている。既存道路に沿って小規模な調査区が9カ所設定されている。特に12次調査の1区・2区は10次調査区に隣接し、3区は、9次調査区の北側に位置する。調査1区・2区とは400m近く離れている（第2図）。

#### 9次調査区

調査区は、既存道路に沿って北から南へ1区から5区まで設定している。主に歩道幅の調査のため、調査区の幅は1.5mから3m程度である。全体を通じて5m四方のグリッドを設定しているが、調査区が狭いため基準杭がうまく調査区内に収まらない調査区が多く、補助杭で対応している。このため各グリッドに名称はつけておらず、遺構以外からの出土遺物は調査区名で取り上げている。

#### 10次調査区

調査区は交差点部分にあたり、他の調査区と比べると広い。5m四方のグリッドを設定し、北から南へA～H、東から西へ1～5と設定した。出土遺物は、グリッド単位で取り上げている。

#### 12次調査区

9次調査区同様、全体を通じて5m四方のグリッドを設定しているが、調査区が狭いため基準杭がうまく調査区内に収まらない調査区が多く、補助杭で対応している。このため各グリッドには名称はつけておらず、遺構以外からの出土遺物は調査区名で取り上げている。

### 第2節 遺跡の概要と調査の経過

#### 1 遺跡の概要

調査区は、神水遺跡の範囲内でもやや北に偏った地点で、弥生時代の遺構が集中する部分からは離れている。また陳山廃寺（国分尼寺跡）の範囲に接しており、松本雅明氏が想定した陳山廃寺推定伽藍配置は、10次、12次1・2調査区の北西約60mの地点に位置する。出土遺物は、ほとんどは古代に属するものである。10次調査区のSX03遺構以外からの出土遺物は少ない。9次調査区については、道路状遺構以外明確な遺構は確認されていないが、10次調査区では、掘込地業と推定される遺構や溝遺構などが検出されている。12次調査区では、10次調査区の掘込地業の延長と思われる遺構や溝が検出されている。

#### 2 調査の経過

##### 9次調査(2005年)

9次については、調査日誌の所在がわからず、詳細は不明であるが2005年の6月から7月にかけて調査が行われている。

##### 10次調査(2007年)

8月2日 重機による表土剥ぎを開始する。

8月6日 南東側から北側にかけて硬化面の広がりを確認する。須恵器・土師皿片が出土する。

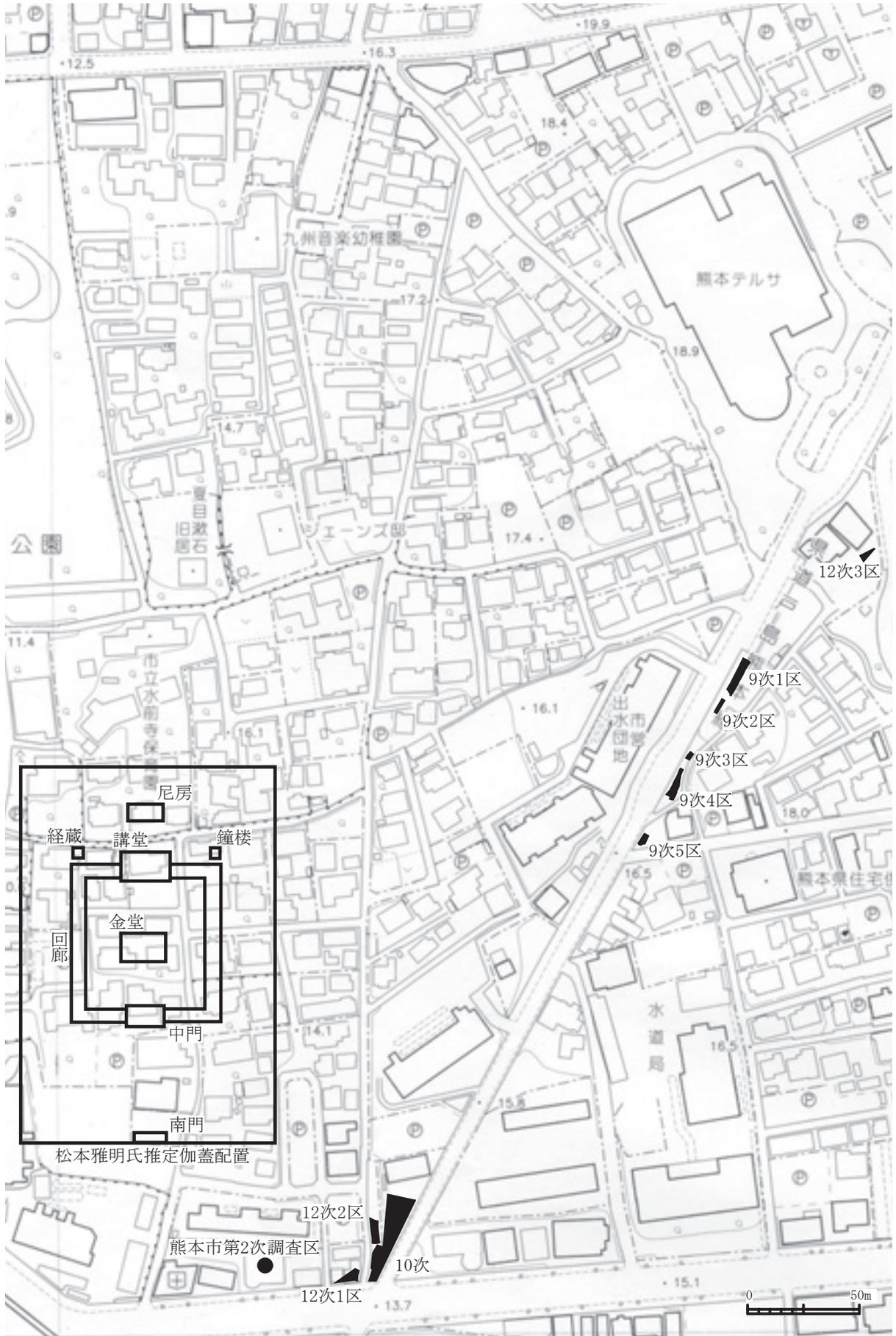
8月17日 予備調査時の布目瓦の集積はI層直下の可能性が高いことがわかった。

8月22日 確認調査時のトレンチを完掘した際、瓦片が出土する。

9月3日 III層上面で掘込地業の掘込ラインを検出する。

9月5日 版築状遺構又は地業とこれまで呼称していたものを「S001」(現SX01)と命名。

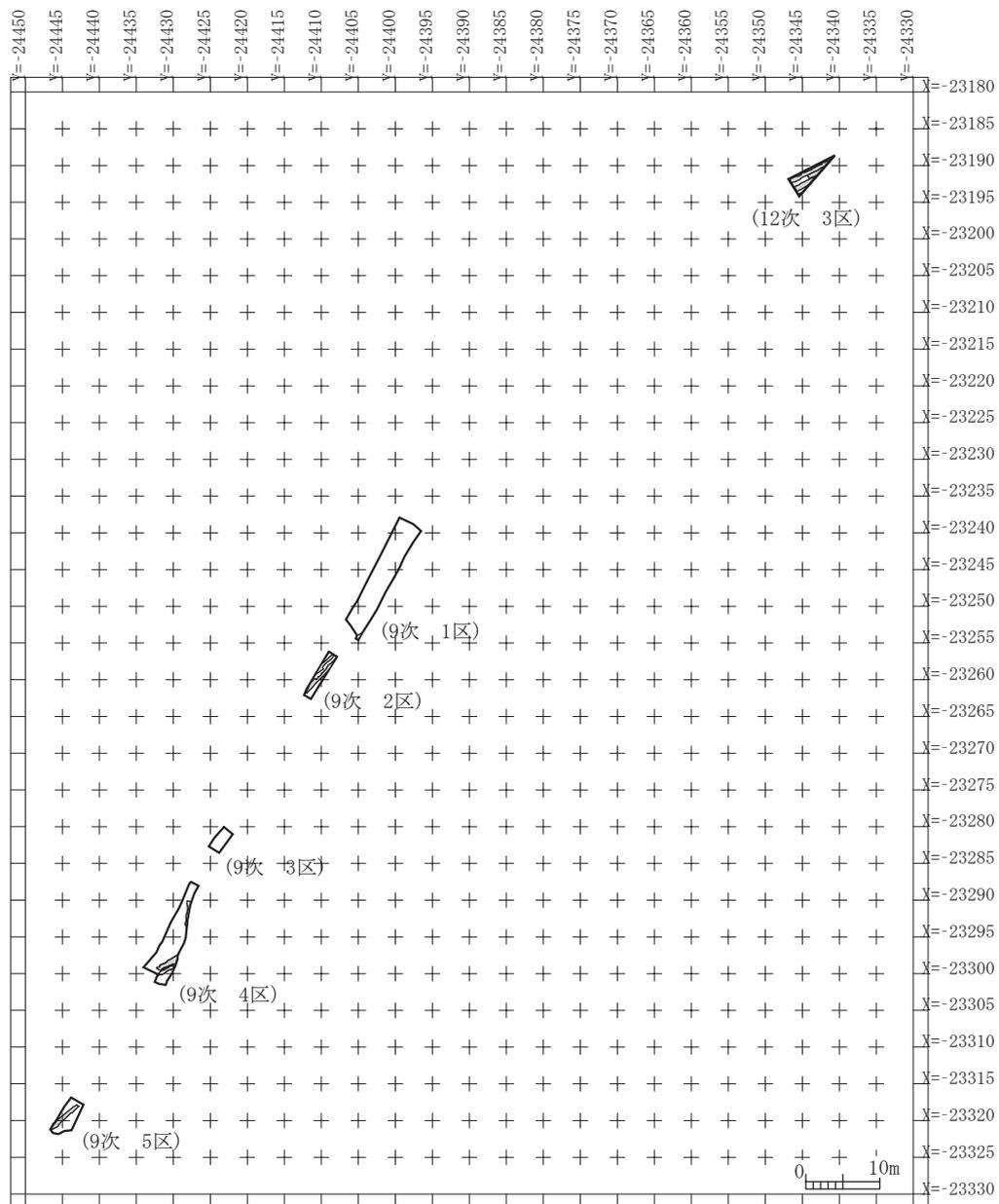
9月6日 S001内にトレンチ及びベルト設定。北からT1・T2と呼称する。



第2図 調査区及び関連調査区位置図(S=1/2500)

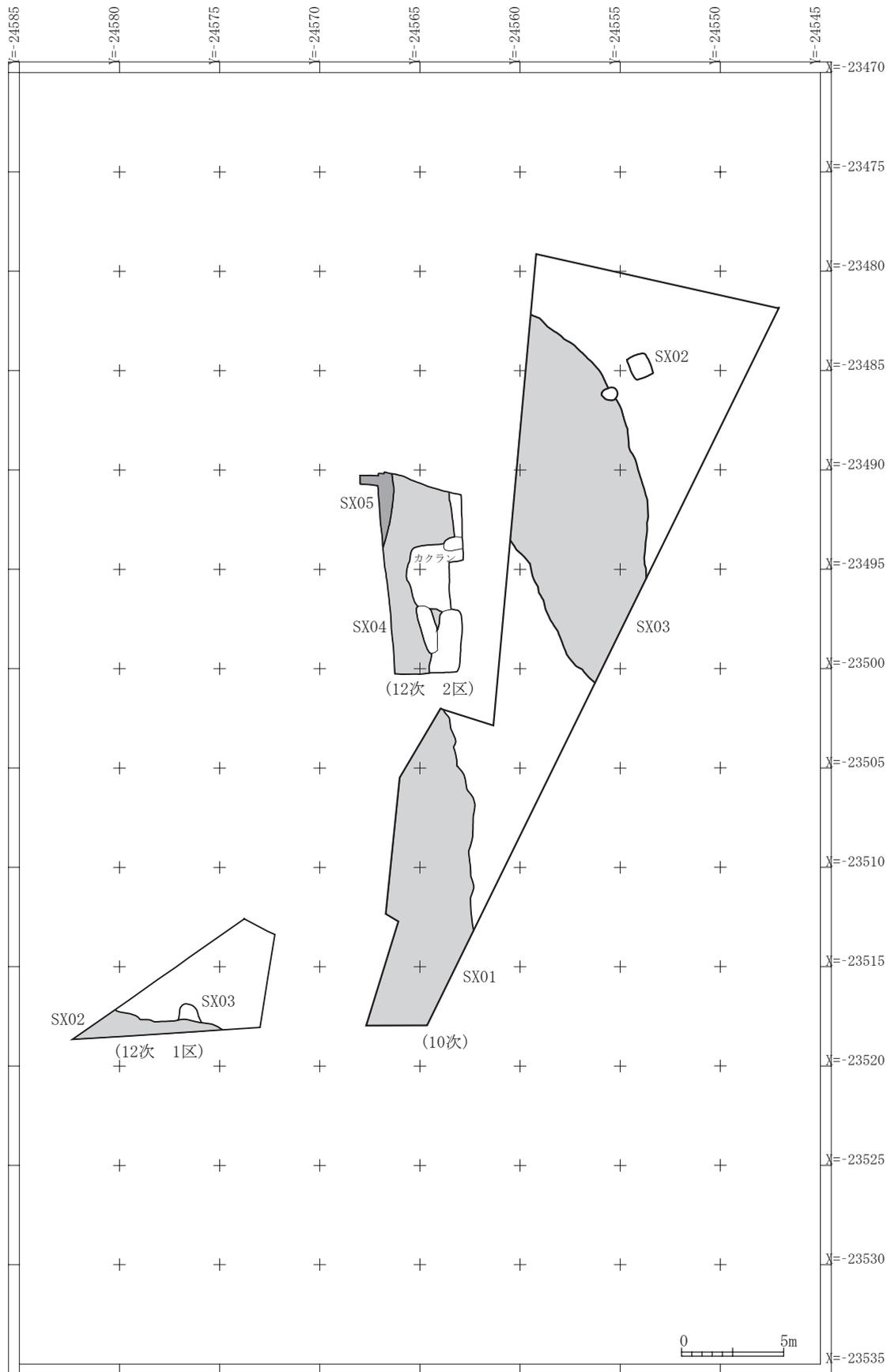
- 9月7日 土坑を「S002」(現SX02)とする。土師器、坏出土。Ⅱ層を掘り下げていく。S002の実測と写真撮影を行う。
- 9月11日 前日検出した不整形の落ち込みを「S003」(現SX03)と命名。検出状況の写真。土師器、坏(完形)が1点出土する。
- 9月20日 S003の遺物(土器・瓦)を取りあげる。この遺物は地業に伴う遺構と判断する。
- 9月26日 S003に切られる別遺構と思われる埋土を検出〔S004か?〕(現SX04)。熊本市教育委員会網田龍生氏、来跡。網田氏から「S001は熊本市が調査した陳山廃寺の掘込地業に類似する。版築が粗い、瓦を含むなど再建時の地業ではないか。」との助言を受ける。
- 9月28日 S001は、南北方向にのびる掘込地業ということが明らかになる。西壁には、版築を切るように大きな掘り込み(溝か土坑の断面)が検出された。

(世界測地系)



第3図 9次・12次遺構配置図(S=1/1000)

(世界測地系)



第4図 10次・12次遺構配置図(S=1/300)

10月11日 S003を完掘する。清掃。

10月19日 調査終了。

### 1 2次調査(2011年)

5月25日 1区の表土剥ぎを開始する。アスファルト下のバラスを撤去するとローム層となる。遺物包含層は、削平されているようである。

5月27日 溝状の落ち込みを検出。「S001」(現SX01)「S002」(現SX02)「S003」(現SX03)と命名。

6月3日 S002より黒色土器が出土する。

6月6日 1区の調査完了。2区の表土剥ぎを開始。

6月13日 2区で掘込地業と硬化面を検出する。それぞれ「S004」(現SX04)「S005」(現SX05)と命名。

6月28日 3区においてアスファルトをカットする。

7月29日 2区の調査完了。3区の表土剥ぎを開始する。

7月1日 3区は、表土直下で道路状遺構を検出する。

7月14日 3区の調査を終了。現場撤収。

### 3 整理作業の経過

平成24年に、熊本市が政令市になり、県道戸島熊本線の整備事業は熊本市が行うことになった。その関係で過去に県が調査した整理・報告書作成についての予算は熊本市で負担してもらうこととなり、受託契約を結び実施した。図面や写真の整理は、4月上旬より行った。9次、10次、12次と調査担当者が異なり、遺構番号の付け方が異なっていたため遺構番号を変更している。9次調査においては、遺構とされているが通称ニガ土の硬化を住居床面等と誤認していると判断したものは抹消している(3区SX7、4区SB6、SX3)。9次調査の変更は次のとおりである。2区SX1→SX01、4区SX2→SX02、SX4→SX03、SX5→SX04、5区SD8→SX05。なお、SB6等の表現は、他にSB1からSB5が存在するように思われるが、実際は存在せず、調査区全体を通して遺構に1から8というふうに番号を付け、数字の頭にSB、SXを付けているだけである。10・12次調査区では、遺構番号は、数字の先頭にSを付け通し番号をつけてあったが、最終的に遺構の性格を決定出来なかったため、すべてSをSXに置き換えている。また10次調査区のトレンチについても名称を次のように変更している。S003の2トレンチをSX03の3トレンチに、同じく3トレンチを4トレンチに、4トレンチを5トレンチとしている。その他土層は、基本層序には、ローマ数字を付した。遺構の埋土については、算用数字を用いている。基本的には調査時のままであるが、複数の遺構の切り合いがあるものは区別するために、アルファベットやカタカナ(イロハ)に変更している。特に10次SX01のような版築状の遺構については、交互に同じ層が堆積することが多いため、層の位置関係を考慮したうえで、色調が同じで、粘性・しまりの状態が同一なものについては、同一層とし、同じ表記にした。但し同じ暗褐色でも標準土色帖の表記や粘性・しまりの表現が若干違うもの(しまる、ややしまる等の表現)については、' (ダッシュ) を付けて区分した。

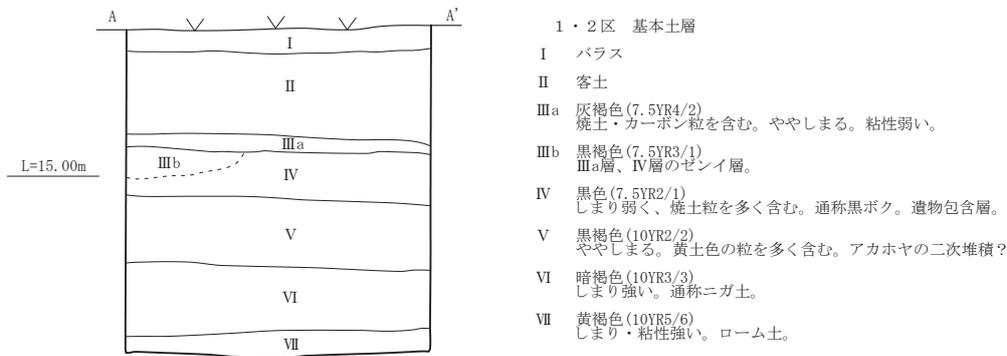
遺物の整理は、既に調査現場で遺物の洗浄は終了していたので、5月中旬より遺物の注記を行った。その後6月初旬より土器の接合、遺物の選別をはじめ、6月中旬から遺物の写真撮影を行った。遺物の取捨選択は、遺構出土の遺物を優先した。また出土遺物の少ない調査区は、小片でも最低1点は図化するよう努めた。9次5区は、図化できる遺物がなかった。その他墨書土器については可能な限り取り上げた。但し小片は写真だけの掲載もある。

### 第3節 9次(2005年)調査の成果

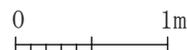
北から南へ順に1区から5区まで調査区を設定している。各調査区の面積は非常に狭い。

#### 1 1区の調査(第7図)

基本土層(第5図)は、7層に分層され、III層はa、bに細分される。各調査区で同一番号の層の色調は微妙に異なるものの、同一層と判断してもさしつかえない。特に通称「ニガ土」と呼ばれるVI層、ローム土であるVII層はこの地域共通の土層である。



第5図 9次1・2区基本層序(1区北壁土層)(S=1/50)



9次調査では最大の調査区である。すべてが柱穴かどうか不明だがV層上面で15個のピットが検出されている。調査区が狭いため、掘立柱建物を構成するものか判断できない。また調査区の南端で、遺構SX01が検出されている。図面では、硬化面の表記がなされ、V層上面での検出となっている。後述するが、2区のSX01は、IV層中より検出されている。

出土遺物(第6図)は、13号ビニール袋換算で18袋程度であり、土師器片が大半を占める。その多くが細片で図化に耐えるものは少数で、今回3点を図化した。1は、坏または碗の口縁部である。体部は直線的に立ち上がり、端部がわずかに外に開く。ピット9から出土している。2は、高台付き碗の底部である。高台は底部端につく。底部はヘラ切りの後ナデを施すが、調整は雑である。3は、坏である。ピット8からの出土である。底部はやや丸みを帯びた平底で、体部が直線的に立ち上がる。底部と体部の境は明瞭である。底部の調整は2と同様である。

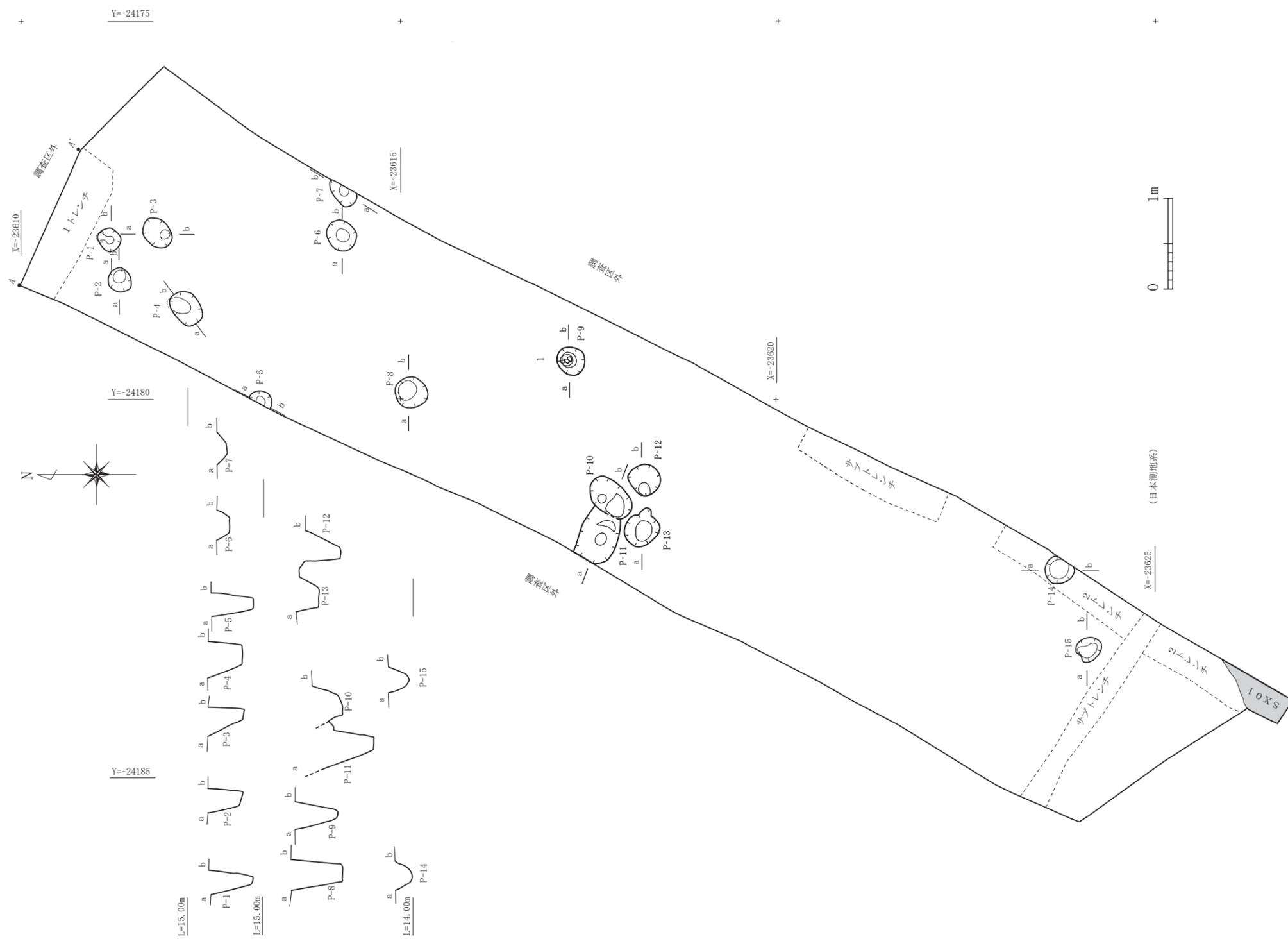
#### 2 2区の調査(第8図)

幅1.1~1.3m、長さ6.8m程度の長方形の調査区である。IV層中に硬化面を検出し、その一部は硬くしまるもので、SX01と命名した。IV層中に検出とされているが、本来は遺構検出面を挟んで上層、下層に分層できるものと思われる。遺構は、北東-南西方向に延びる。幅は北壁で0.8m程度であるが、南西に向かって若干広がるようである。長さは現状で6.3m程度である。検出レベルは、標高14.4m程度である。1区のSX01について断面図はないものの、近くに存在するP-15の検出レベルも標高14.4m程度なので、S



第6図 9次1区出土遺物実測図(S=1/3)

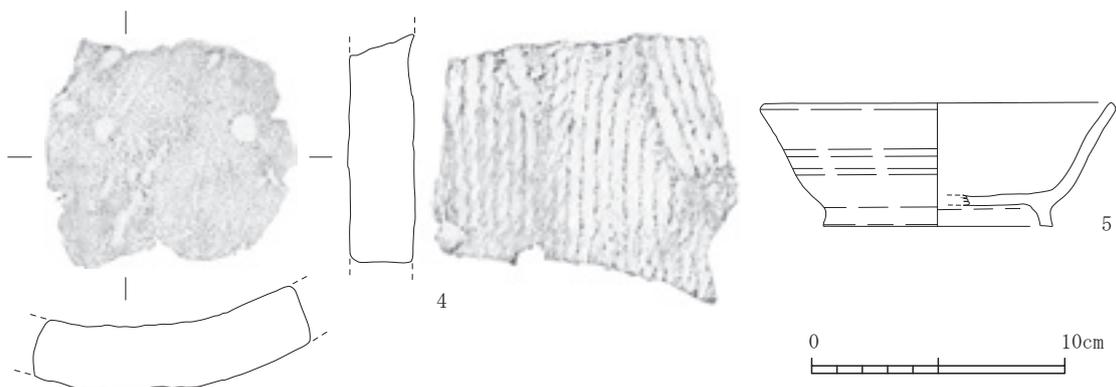
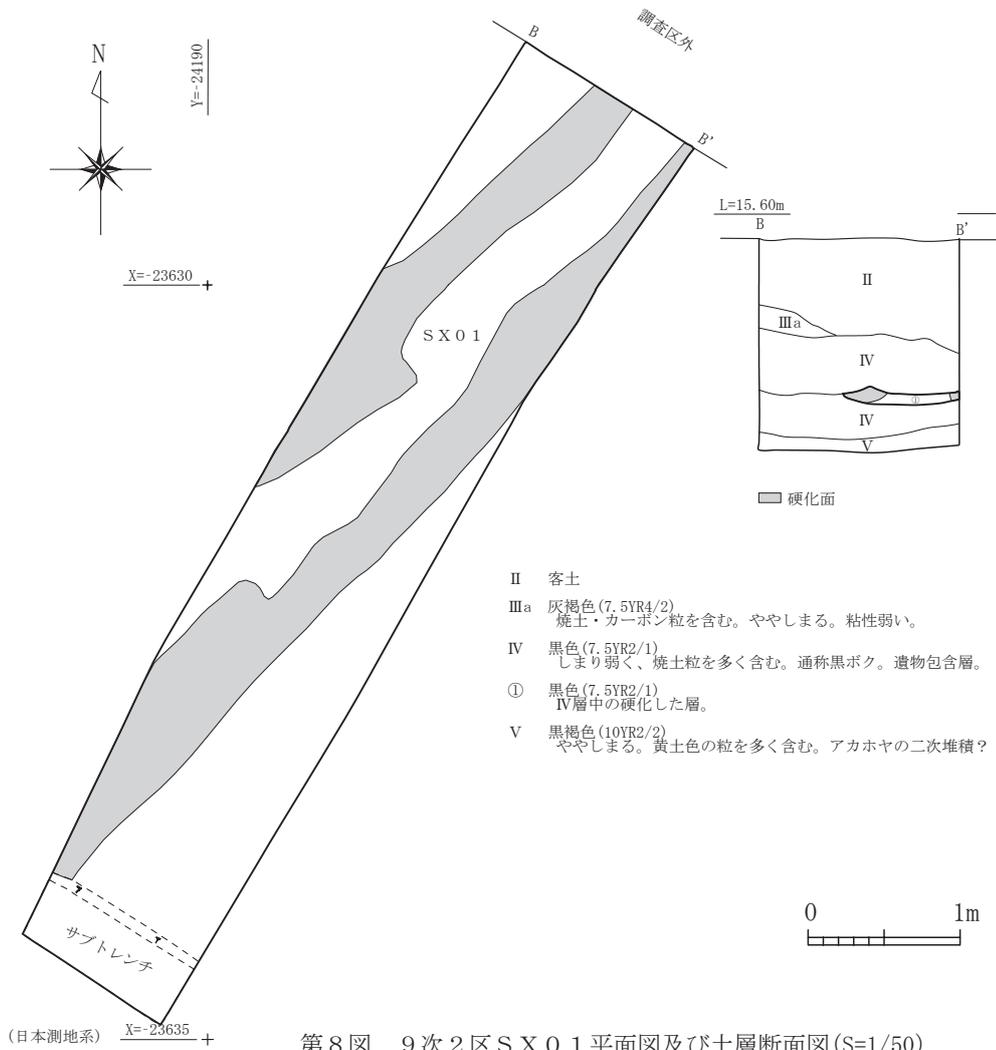


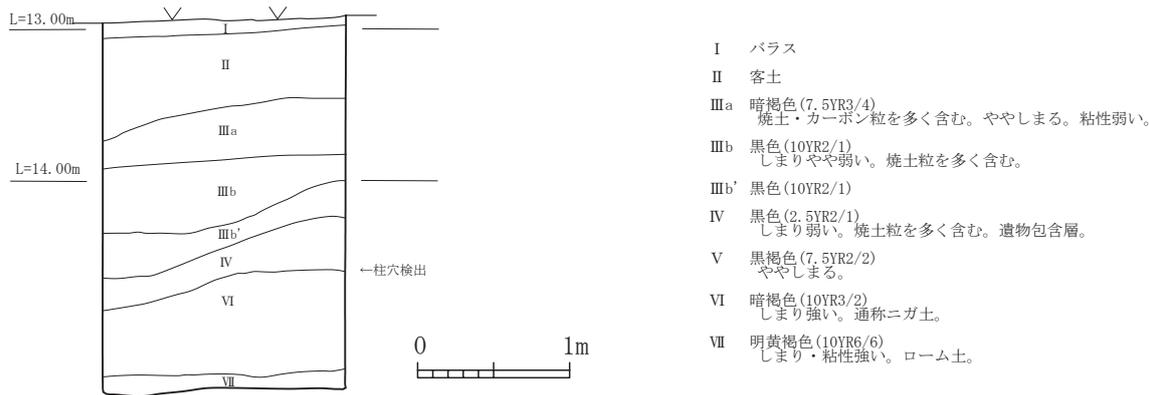


第7図 9次1区平面図及び柱穴断面図(S=1/60)

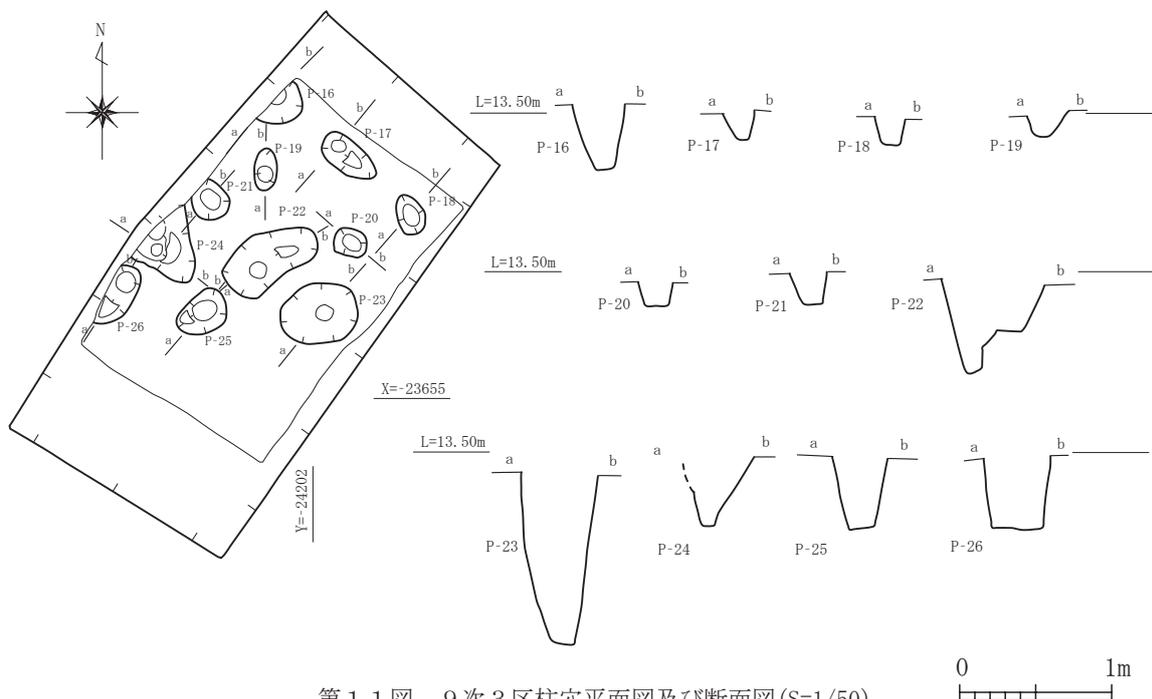
X01も同じレベルであろう。つまり1・2区のSX01は、ほぼ同じレベルであり、検出された層は違うものの、位置関係から1区のSX01に繋がる遺構と思われる。

出土遺物(第9図)は、13号ビニール袋換算で4袋に過ぎない。土師器が主体で、一部瓦片や須恵器片がある。4は、平瓦片である。凹面は布目圧痕が、凸面には、縄目タタキの痕跡が認められる。5は、高台付きの椀で、底部端にやや縦長の高台がつき、口縁部はまっすぐに伸びる。底部はヘラ切り後比較的丁寧にナゲ調整が施されている。





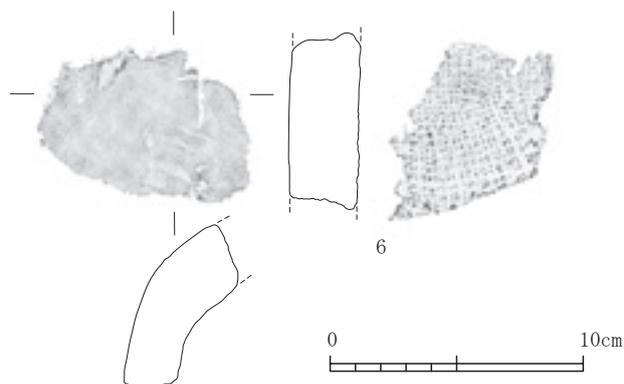
第10図 9次3区基本土層図(S=1/50)



第11図 9次3区柱穴平面図及び断面図(S=1/50)

### 3 3区の調査(第10・11図)

9次調査の中でも一番狭い調査区である。幅1.5m程度、長さは2.5mにも満たない。前述したように基本土層(第10図)は、1・2区と同様と思われるが、この調査区では、V層が存在せず、IIIb'層が加わる。VI層上面でピットが11個検出されている。

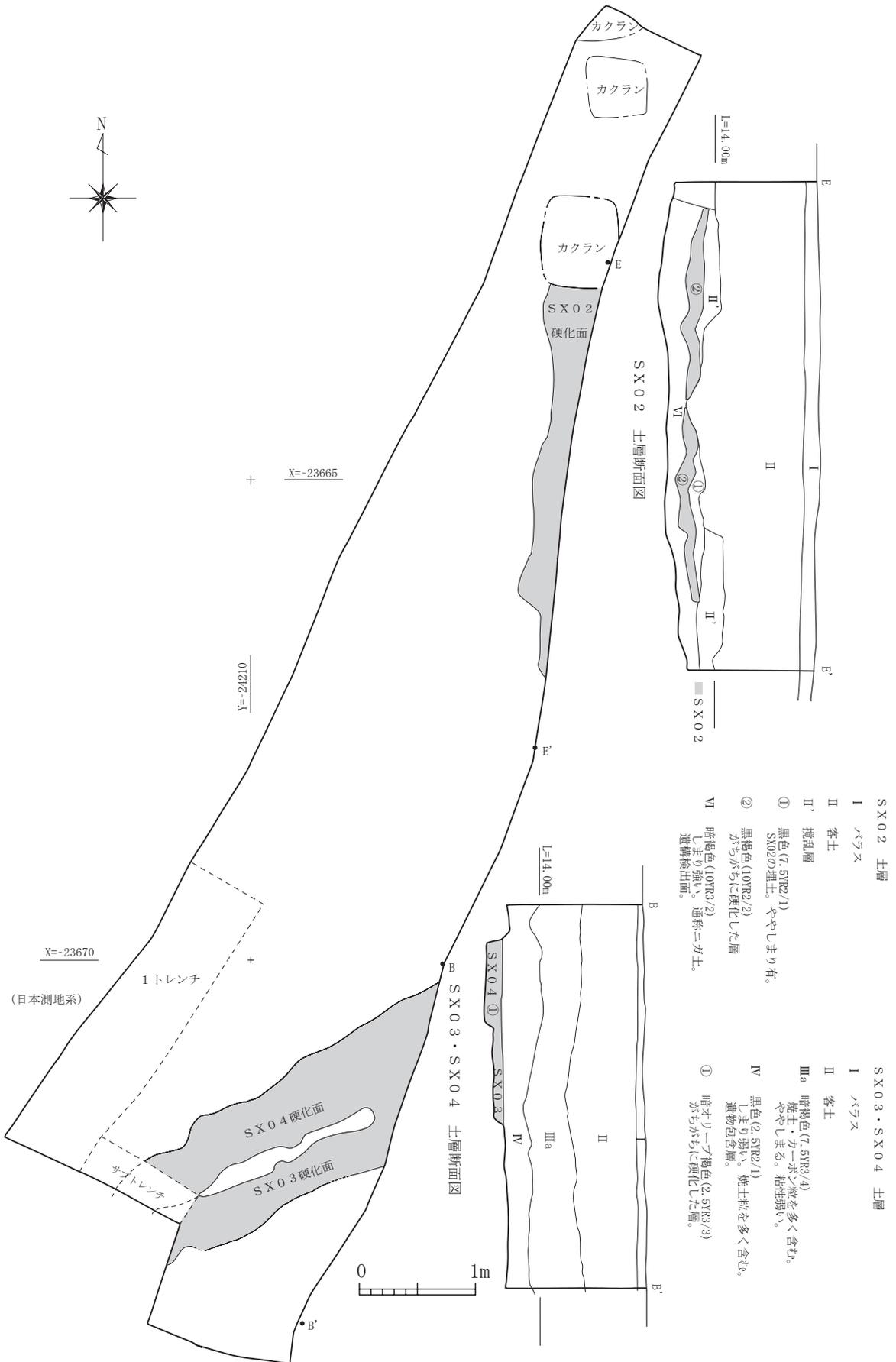


第12図 9次3区出土遺物実測図(S=1/3)

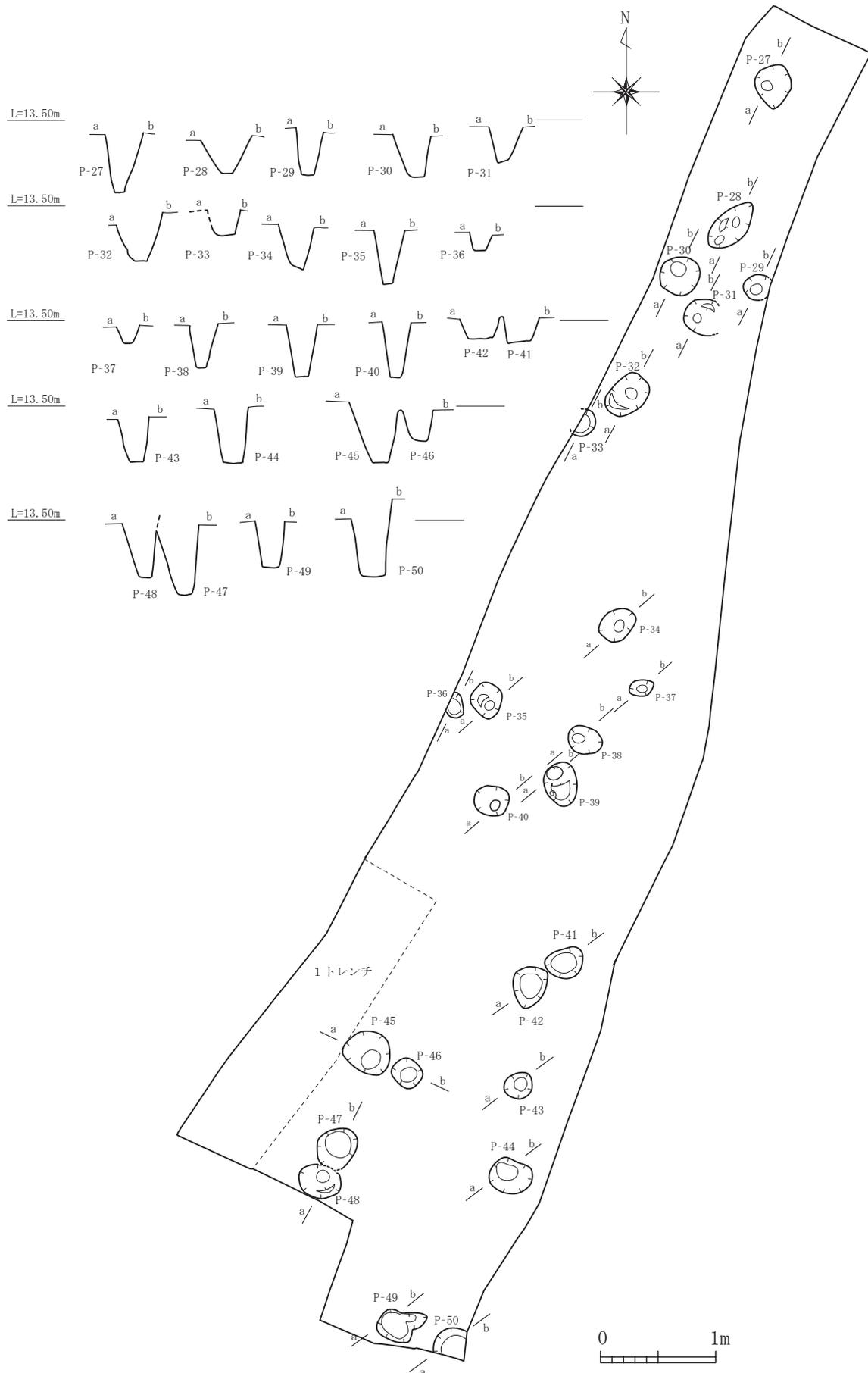
出土遺物(第12図)は、13号袋2袋に過ぎない。6は、丸瓦片である。凸面はナデが施されている。凹面は、布目圧痕が残る。

### 4 4区の調査(第13・14図)

三角形に近い不定形の調査区である。基本土層(第15図)は、標準土色帖の表記と若干違うものの1区とほぼ同様である。V層も部分的に確認されている。なお5区も同様の土層である。II層を剥がすとSX02の硬化面が検出される。調査区の北東側に部分的に検出されている。更に



第13図 9次4区遺構配置図及び断面図(S=1/60)

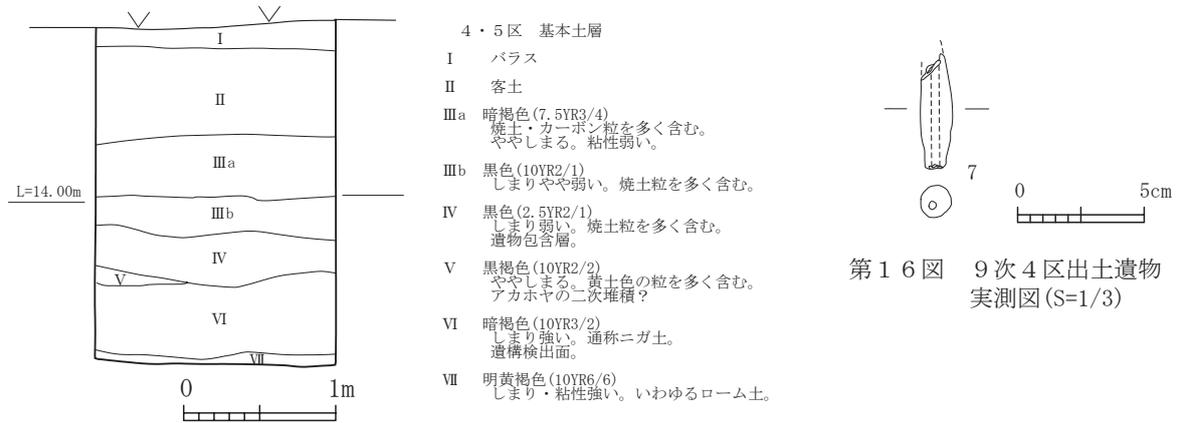


第14図 9次4区柱穴平面図及び断面図(S=1/60)

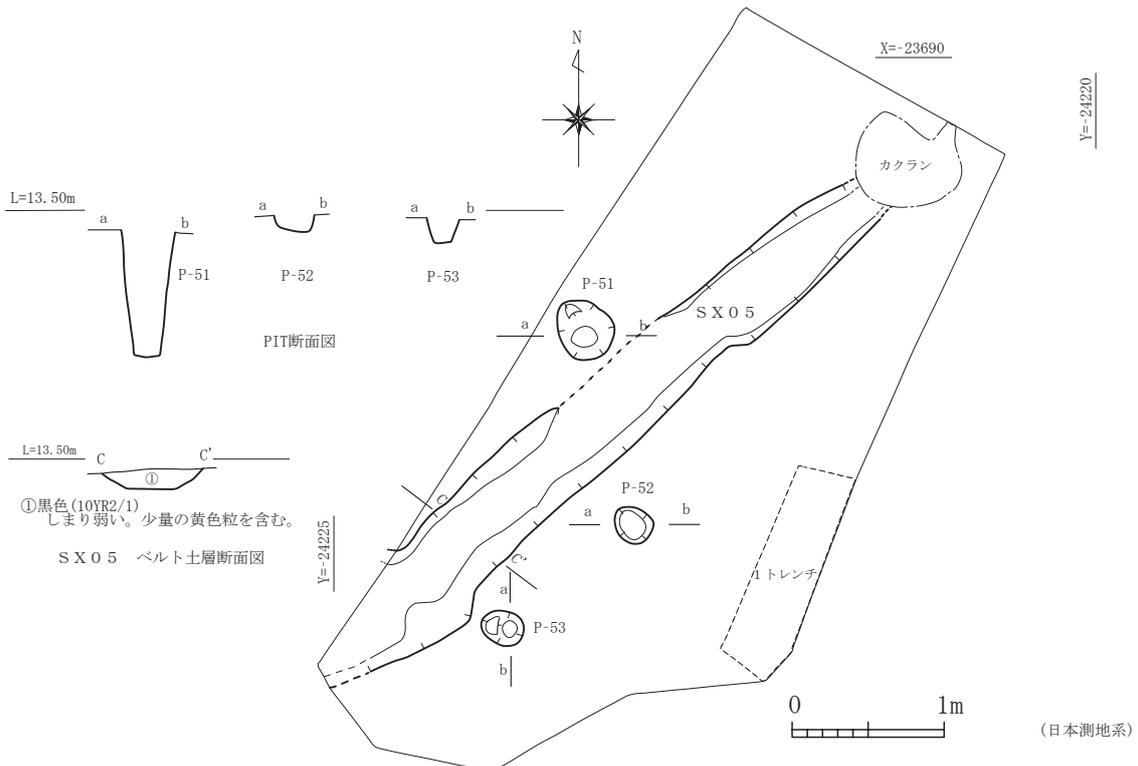
20 cm程掘り下げると、南側でSX03とSX04が検出される。SX03とSX04は、一つの遺構としてとらえるべきであろう。また24個のピットがVI層上面で検出されている(第14図)。調査区が狭いため、掘立柱建物を構成するものか判断できない。出土遺物(第16図)は、13号袋換算で8袋程度である。出土遺物は、瓦小片が多いが、図化に耐えるものはない。7は、土錘である。遺構に伴うものではない。細長い管状のもので、重量は6.1g、孔の内径3mmである。

5 5区の調査(第17図)

幅2~2.5m、長さ5m前後の不定形の調査区である。遺構はいずれもVI層上面で検出されている。SX05としたものは、幅30~60cm深さ12cm程度の溝状遺構である。北東から南西に延びる。またその周囲に柱穴痕跡が存在するが、溝状遺構との関係は不明である。出土遺物は、13号袋で1袋に過ぎず、図化に耐えるものはない。



第15図 9次4・5区基本土層図(S=1/50)



## 第4節 10次(2007年)調査の成果

9次・10次・12次調査の中で、最大の調査区である。基本土層は、第19図のとおり5層に分層できる。IV層(通称ニガ土)、V層(ローム土)はこの地域に共通に認められる層であり、9次基本土層のVI層、VII層に対比できる。遺構検出面はIII層上面で、SX01からSX05まで5つの遺構及びピットが確認されている。

### 1 SX01 (第20・21図)

調査区の南西部(F2・G2・H1・H2グリッド)で検出されている。ほぼ南北に縦断する溝状の遺構で、後述する12次2区のSX04とした溝状遺構につながると思われる。遺構検出面はIII層上面である。東側の立ち上がりは確認されているものの、それ以外の立ち上がりは確認されていない。東側の立ち上りを1トレンチ、2トレンチで観察すると底面より比較的急角度で立ち上がり、上部付近になると緩やかになる。1トレンチでは2段掘り、2トレンチでは3段掘りに近い形状を呈す。現状で東西幅は、G2グリッド内で3.9m程度、深さは1.1m程度である。

平面図や断面図をみると、SX01の中で切り合いがあり、便宜的に土坑1、土坑2、溝1としている。土坑2は、土坑1や溝1により、一部を破壊されている。また土坑1の東側にも、土坑2より古い土坑が存在するように見える。事実実測図には、現在の土坑1を「掘込地業2」として記載されており、調査日誌にも当初は「掘込地業1・掘込地業2」の記載がみられる。但し調査の終盤になると、すべてをまとめてS001と命名されており、最終的には一つの遺構として認識されていることが窺える。

#### 溝1

F2グリッド西側で検出した。第21図の西壁土層断面図①を見ると溝1の上にa層の堆積が認められ、b層を掘り込んでいる。深さは75cm程である。第20図は標高11.3m付近での溝1の平面図で、本来の掘り込みラインは断面図でしか知ることできない為、平面図に推定ラインを破線で示しているが、全くの推定である。

#### 土坑1

H1・2グリッドで検出されている。また西壁土層断面図③を見ると、土坑1の上にa層の堆積が認められる。またカクランのため明確ではないが、b層を掘り込んでいるようである。南側、西側の立ち上がりは確認されていない。現状では東西2m、南北4m程度である。深さは1.1m程度を測る。北側は比較的まっすぐに立ち上がる。埋土は厚さ10～20cmである。土坑1としているが、堆積状況を見ると13～19層部分と1～12層部分は切り合い関係が認められ、本来は2つの遺構から構成されている可能性が高い。また土層の所見をみると、その多くが「しまり無」となっている。

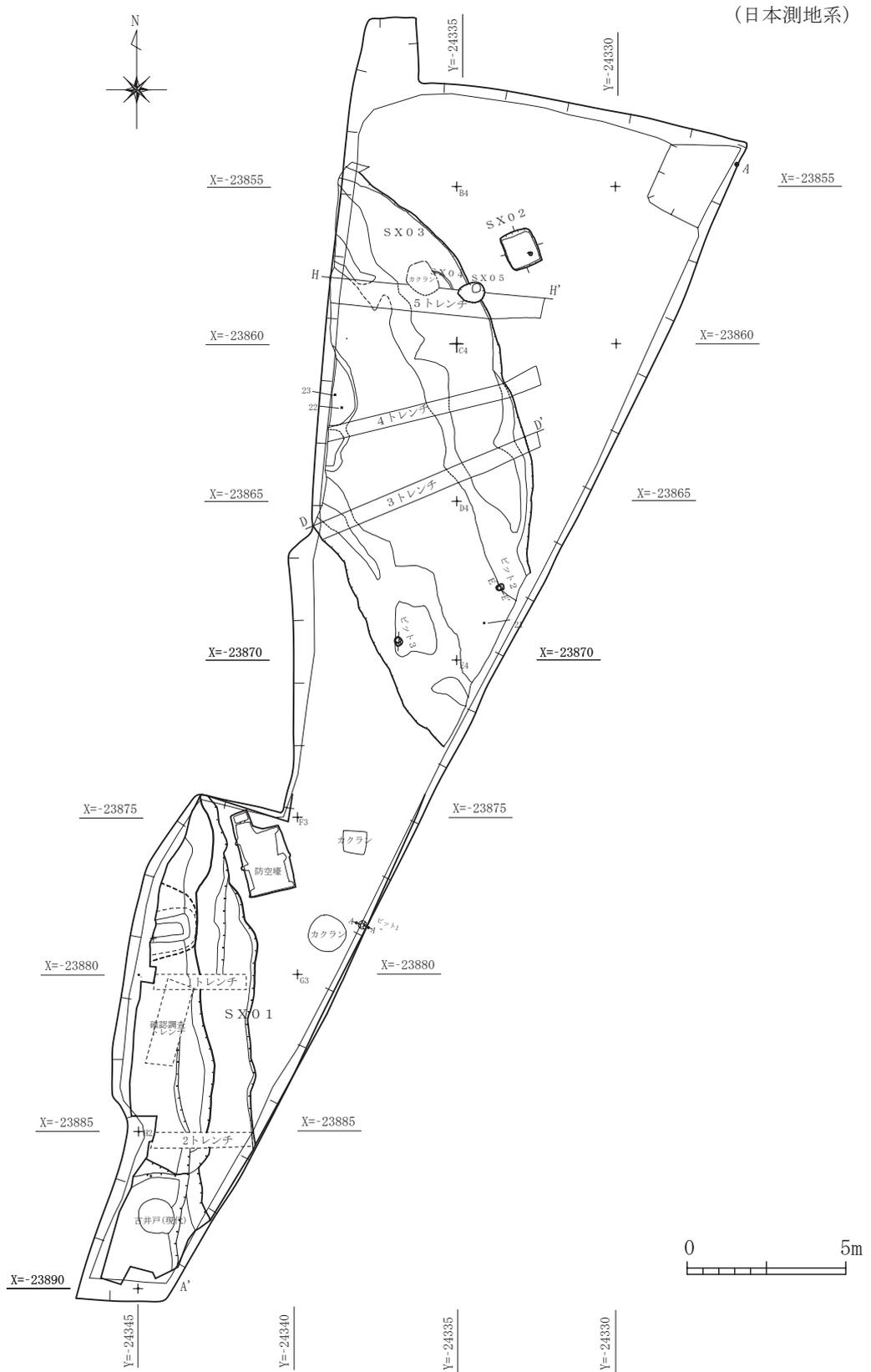
#### 土坑2

SX01内で、溝1と土坑1を除いたものを便宜的に土坑2としているが、幅3.7m以上、長さ12m以上で、更に12次調査2区のSX04に繋がる可能性もあり、溝状遺構とした方が良かったのかもしれない。

土坑2の埋土が観察できる2トレンチでは、厚さ10cm程の黄褐色系土層と黒褐色系土層が比較的交互に堆積している。a層の帰属の判断が微妙であるが、a層を土坑2の埋土とすると、土坑1と溝1は、土坑2が完全に埋まってしまいう前に掘り込まれたことになる。なお、土層所見では、半分ほどは「しまりが無い」となっており、他も「ややしまりがある」程度で、「硬くしまる」との表現はm層以外には見られない。

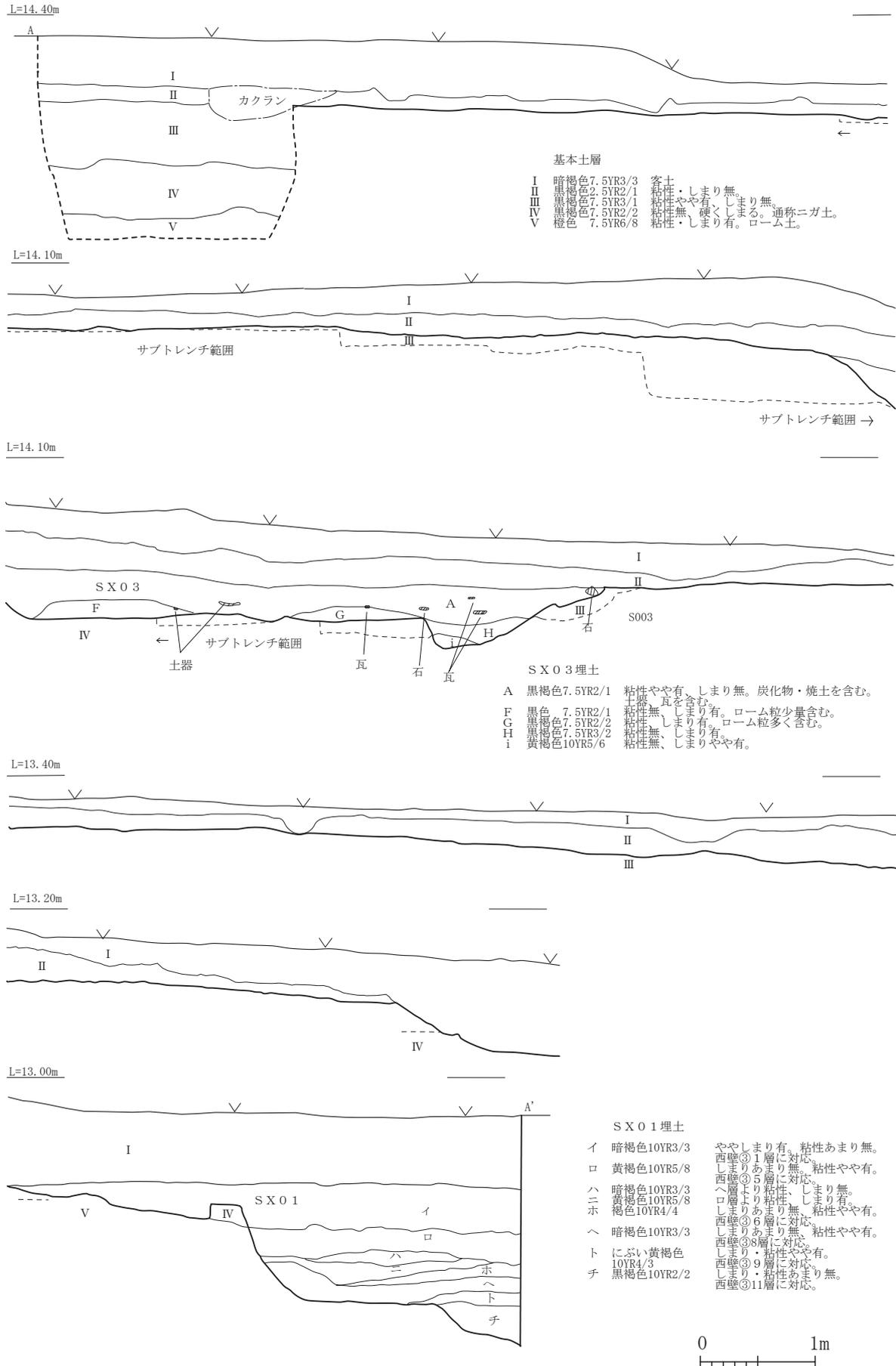
#### 遺構の性格

土坑1・2及び溝1を一つの遺構SX01として捉える根拠は、地盤改良等の意図をもって、掘り込んだ大きな土坑を、入念に埋め戻したその最上層がa層にあたり、a層以下の層は、その埋土であるとするからである。つまり溝1、土坑1、土坑2も同じ一つの遺構であり、溝1、土坑1の掘り込みは埋め戻しの工程

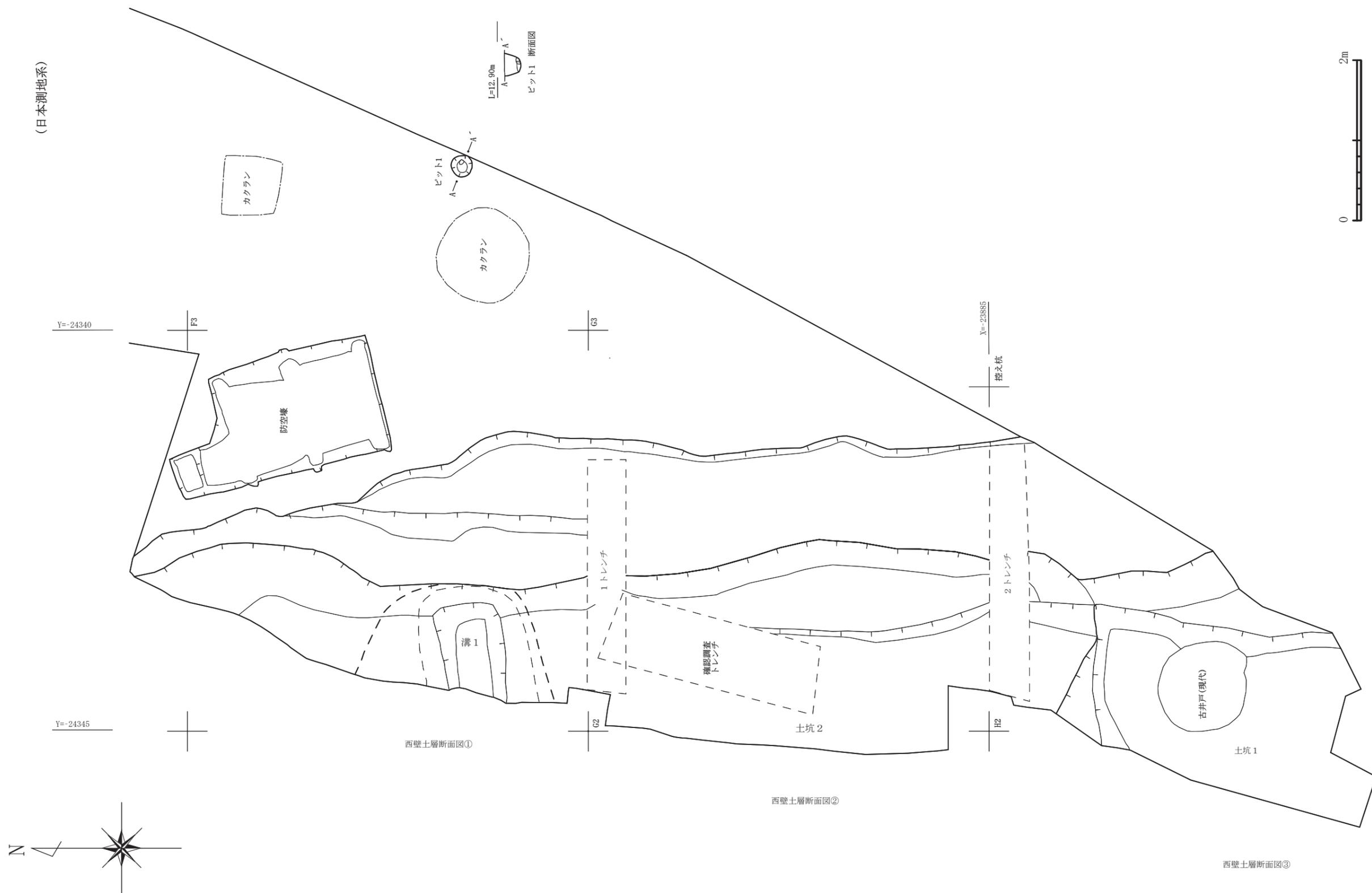


第18図 10次遺構配置図(S=1/200)

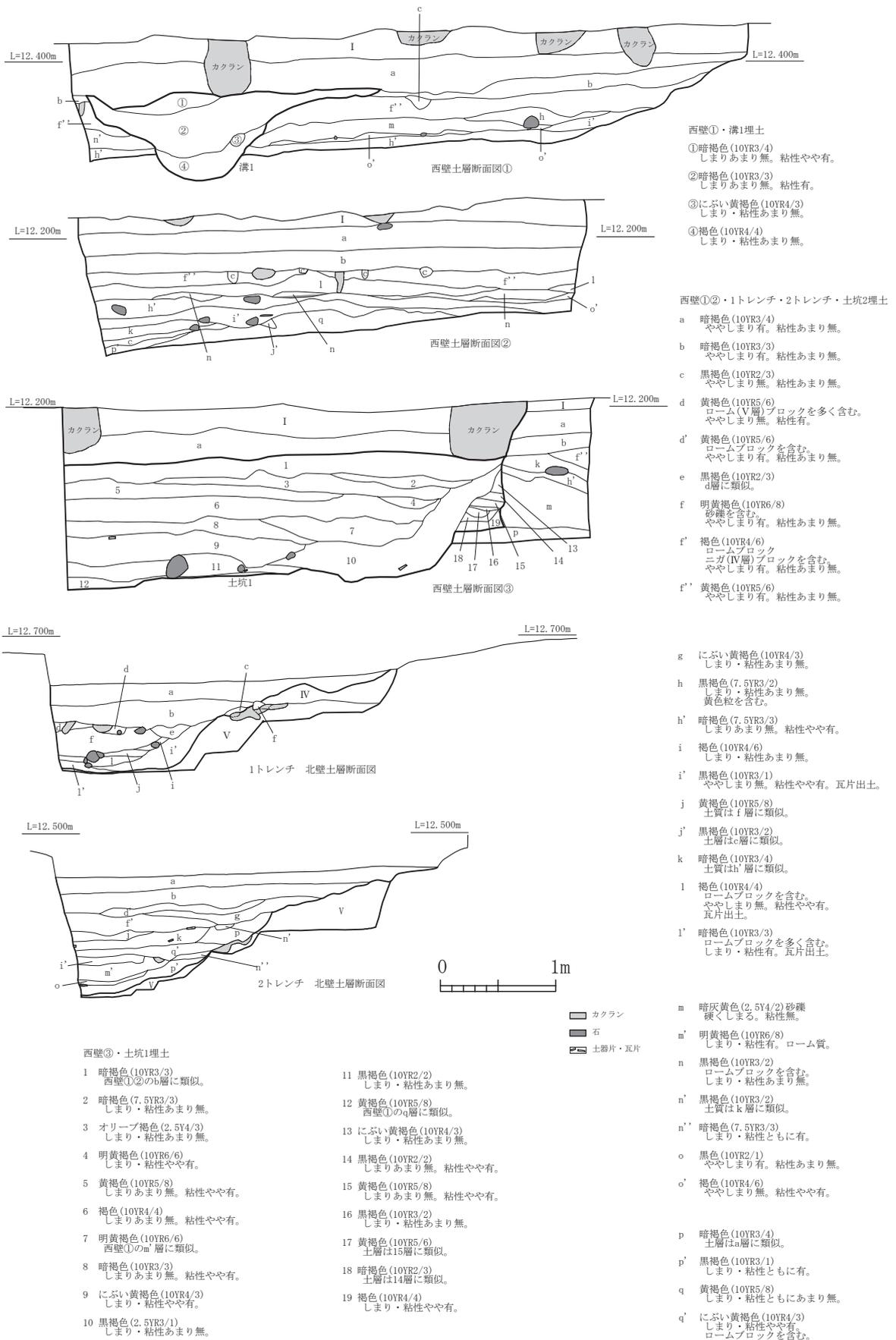
第三章 調査の成果



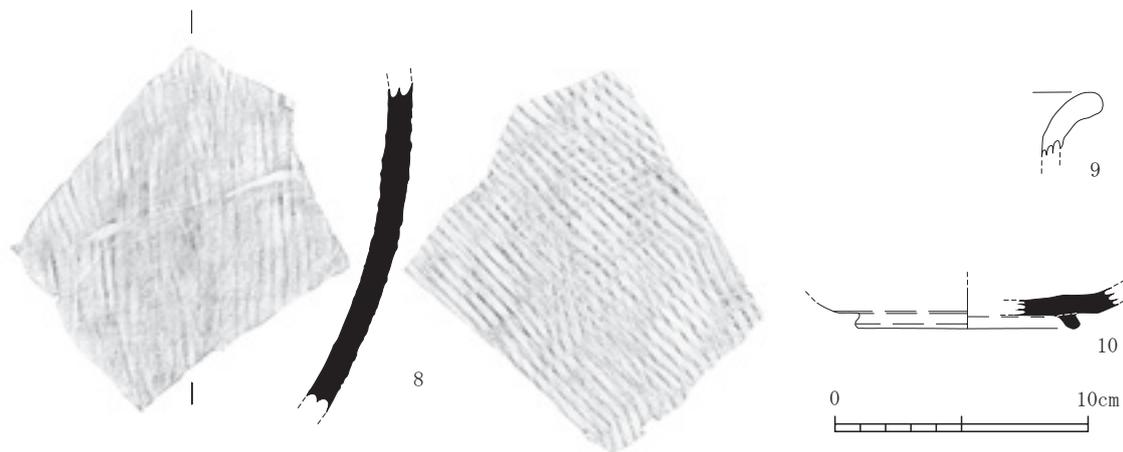
第19図 10次東壁土層断面図(S=1/50)



第20図 10次SX01平面図(S=1/50)



第21図 10次SX01土層断面図(S=1/50)



第22図 10次SX01出土遺物実測図(S=1/3)

段階を示していると判断するからである。

一方で次のような疑問点から、それぞれ別の遺構であるとの解釈もある。疑問の1点目は溝1、土坑1の工程に、どのような地盤改良の効果があるのか不明であること。2点目として、土坑2の底面レベルより、溝1、土坑1の底面は深くなっていること。3点目としてa層、b層の堆積状況である。既にb層ではほぼ水平になっており、a層は他の層に比べ厚みがあり、一旦b層で埋め戻し作業が中断しているようにも見えるし、土坑2の埋土としてa層を除外できるのではないかと言う疑問である。つまり以上からは、広大な土坑2も、細かく分層出来ることから、何らかの意図をもって埋め戻しが行われているが、その工程が完了(或いは中断)した後に、溝1、土坑1が掘り込まれたと解釈する。よって溝1、土坑1・2はそれぞれ別の遺構として捉える考えである。

人為的な土層の堆積状況から「掘込地業」の可能性も否定できないが、一つの遺構としてとらえた場合、かなり規模が大きいことや、土層所見では半分ほどの層は「しまりが無い」となっており、他も「ややしまりがある」程度であること。また土坑1・2、溝1の関係も断定できるものではないことから、遺構の性格は不明と言わざるを得ない。

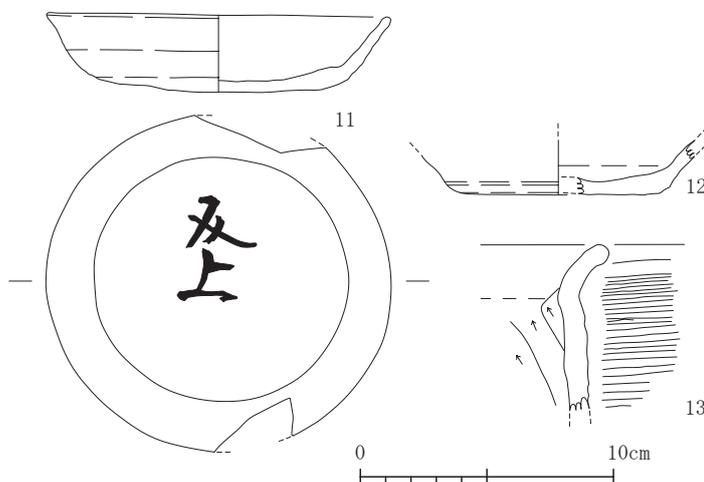
**SX01出土の遺物(第22図)**

遺物の出土状況は、下位層から土師器・須恵器・瓦片が出土している。その他、扁平な石片なども出土している。ほとんどが細片で、図化に耐えるものは少ない。

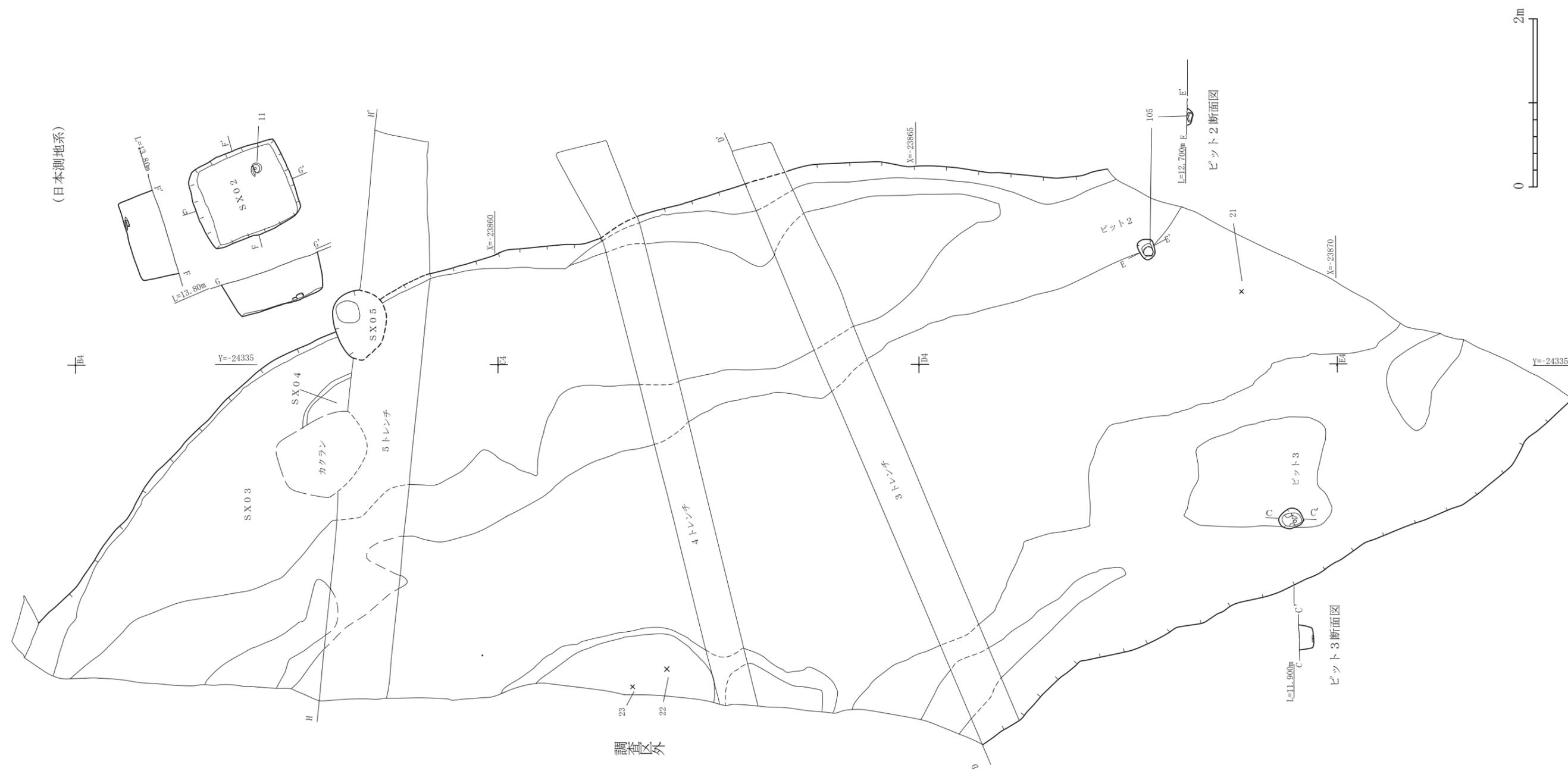
8は須恵器の甕で、胴部下半部と思われる。外面に平行タタキ、内面は、タタキの後ナデを施している。9は、土師器甕の口縁部である。10は、須恵器高台付き椀の底部である。高台は、底部端よりやや内側に入った箇所につけられる。底部はナデ調整。

**ピット1(第20図)**

調査区の東端、F3グリッド内で検出されている。直径28cm程で、深さ約20cmのピットである。底に石が置かれていた。掘立柱建物の可能性もあるが、調査区の東端となり不明である。



第23図 10次SX02出土遺物実測図(S=1/3)



## 2 SX02 (第24図)

調査区北側B4グリッドで検出された土坑である。規模は1.06m(F-F')×1.2m(G-G')の方形を呈す。深さ49cm程である。埋土は単層である。床面近くから土師器の坏が出土している。

### SX02出土の遺物 (第23図)

11はほぼ完形の土師器の坏で、床面近くからの出土である。平底の底部から体部が直線的に立ち上がる。底部外面に「反(坂の略字?)上」と墨書されている。ヘラ切り後念入りにナデ調整を施す。12は坏である。口縁部を欠損する。13は土師器甕の口縁部である。外器面は、横ハケ調整、内器面はヘラ削りが認められる。

## 3 SX03 (第24～26図)

調査区の北側、B3・4～E3・4グリッド内で検出した遺構である。Ⅲ層上面で検出している。東側の掘り込みラインを見ると、ゆるく弧を描いているように見える。北西から南東に延びている。3トレンチ北側で幅7.2m、深さ0.8m程を測る。断面は2段掘りで、西側に比べ東側はなだらかに立ち上がる。土層の堆積状況を観察すると、2～6層に分層できるが、A層が主体を占め、SX01に比べると1つの層の厚さが厚い。またSX03内にピット2、ピット3の遺構がある。いずれもSX03の底面に掘り込まれている。ピット2については、深さ6cm程度で土師器が出土している。ピット3は、直径20～30cm、深さ18cm程のもので、底部中央に河原石が配置されている。調査者は、建物を形成するとは考えにくい、何らかの目印として柱を立てたのではないかと推測している。

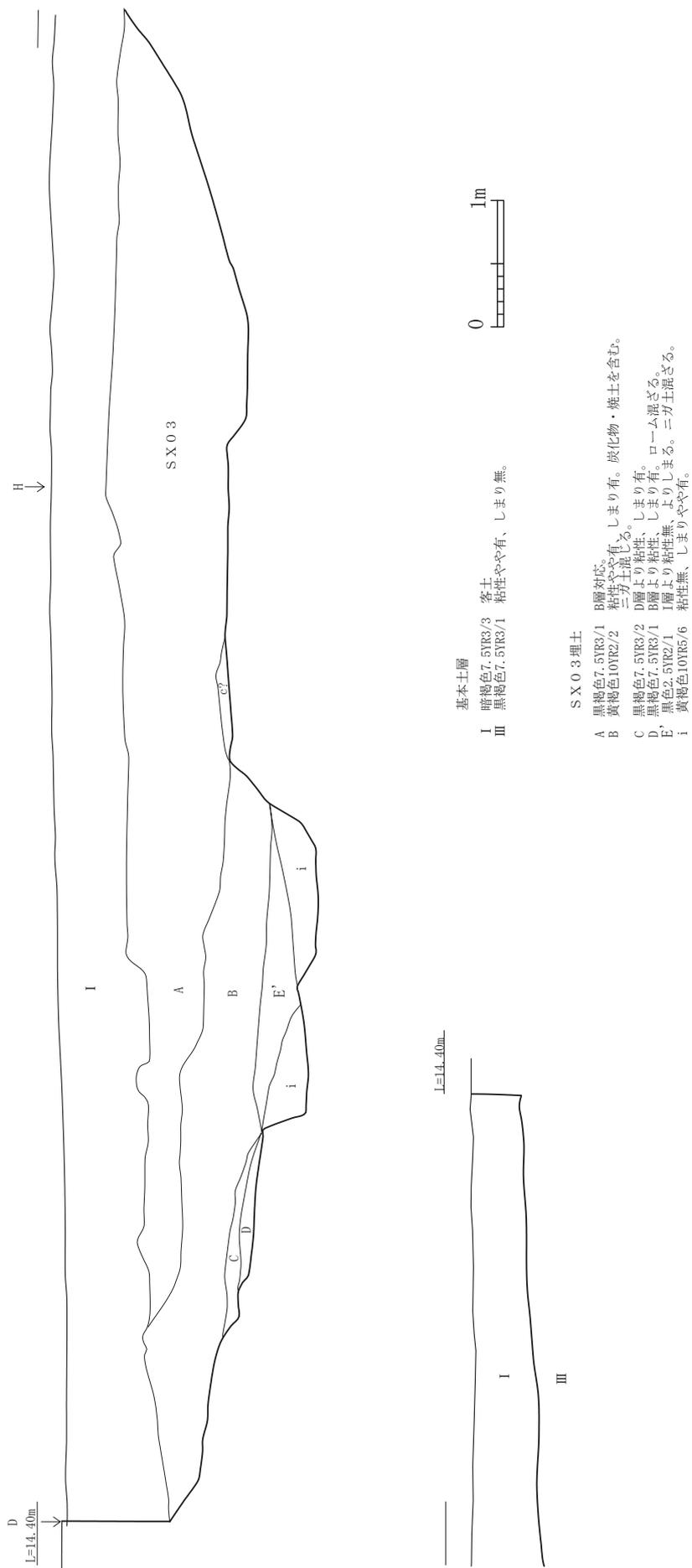
### 遺物の出土状況

SX03からの出土遺物は、全調査区の80%以上を占める。第19図東壁土層断面図では、A層に土器や瓦片の出土が認められる。しかし遺物は特定の層から集中的に出土するという状況ではないようである。第24図の平面図に示した21は、D4グリッド内南寄り底面直上で出土している。また22、23は、C3グリッド内の一段深くなった地点で出土している(22・23の土師器は第25図の西壁土層断面図のi層からの出土になる)。また105の土師器は、浅い円形状の掘り込み(ピット2)の中におさまられていた。調査者は、地鎮等の祭祀の可能性を考えているようだ。

### SX03の出土遺物 (第27～37図)

墨書土器の割合がかなり高く、判読した文字については、観察表の備考欄に示している。

14～16は、土師器の坏蓋である。いずれも赤彩が施される。14は、頂部に扁平なつまみをもつ。口縁端部内側には稜線が認められる。また外器面に墨書があるが、判読不能である。15も14と同様の形態だが、頂部がやや盛り上がったつまみをもつ。16も同様の形態と思われるが、歪みが大きい。つまみの形状は、頂部が山形のつまみをもつ。17～55は、土師器坏である。口径13cm以下のもの(17・20・21)、口径13～14cm前後のもの(18・19・22～47・51・55)、15cmを超えるもの(48～50・52～54)がある。ほぼ8割は13～14cm前後に集中する。53～55の坏は、他に比べ器高が高い。形状は、平底で体部との境も明瞭で、体部が直線的に伸びていくものが主流を占める(17・18・21・22・26・27・29・30・33・34・35・40・41・43・44・46・47～55)。一方で底部もやや丸みをもち、体部との境があまり明確でないもの(23・24・28・32・38・39・45)や、その中間的な形状のものが存在する(25・31・36・37・42・46)。そのうち51・52は回転ヘラミガキが施されている。ほとんどに赤彩が施されている。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整を施されているが、やや粗雑なものが多い。墨書されているものが多い。特に「宅代乙公」、「乙公宅代」「宅代」「乙公」の組み合わせは特徴的である。56は土師器鉢である。体部外面に墨書が認められるが判読不能である。57～59も土師器の坏であるが、小型のもので、口径に対して器高が高い。57・59は回転ヘラミガキが施される。いずれも底部に墨書がある。60は土師器片である。61～68は、土師器坏の底部である。平坦な底部のもの(61・62・65・66)、上げ底気味のもの(63・64)、丸みを帯びるもの(67・68)がある。61を除き墨書



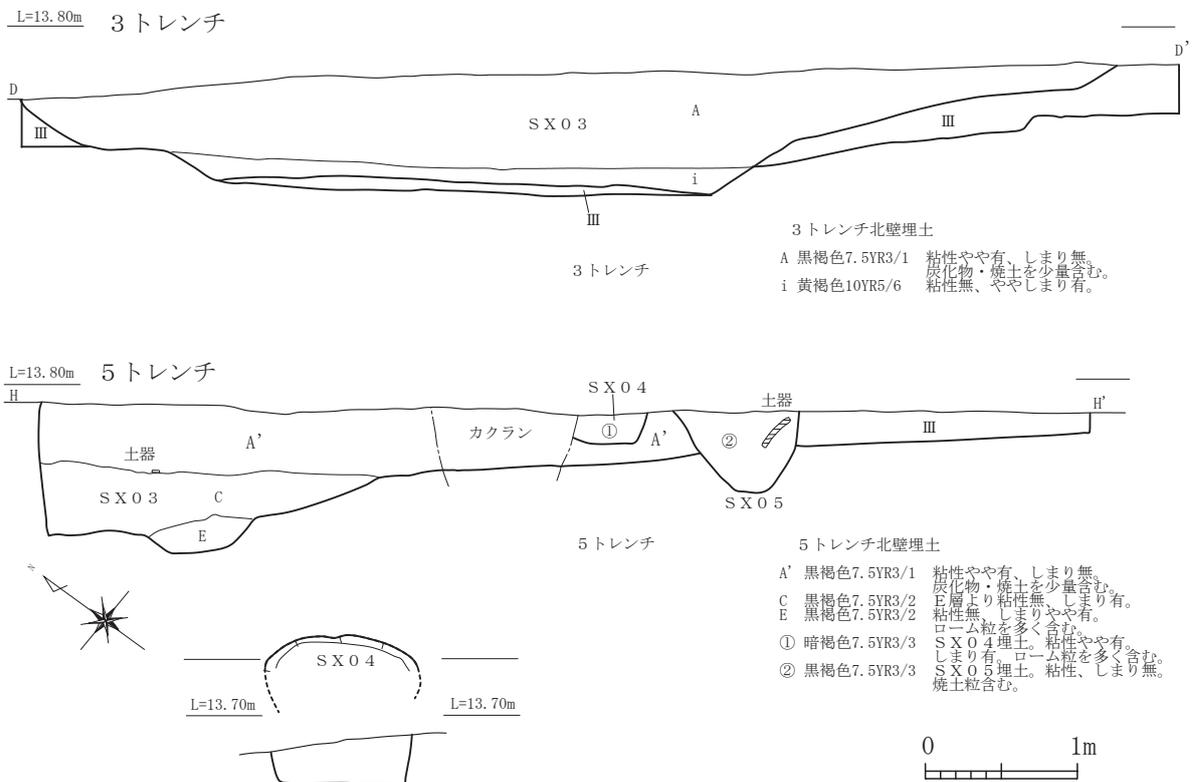
第25図 10次西壁土層断面図(S=1/50)

がある。

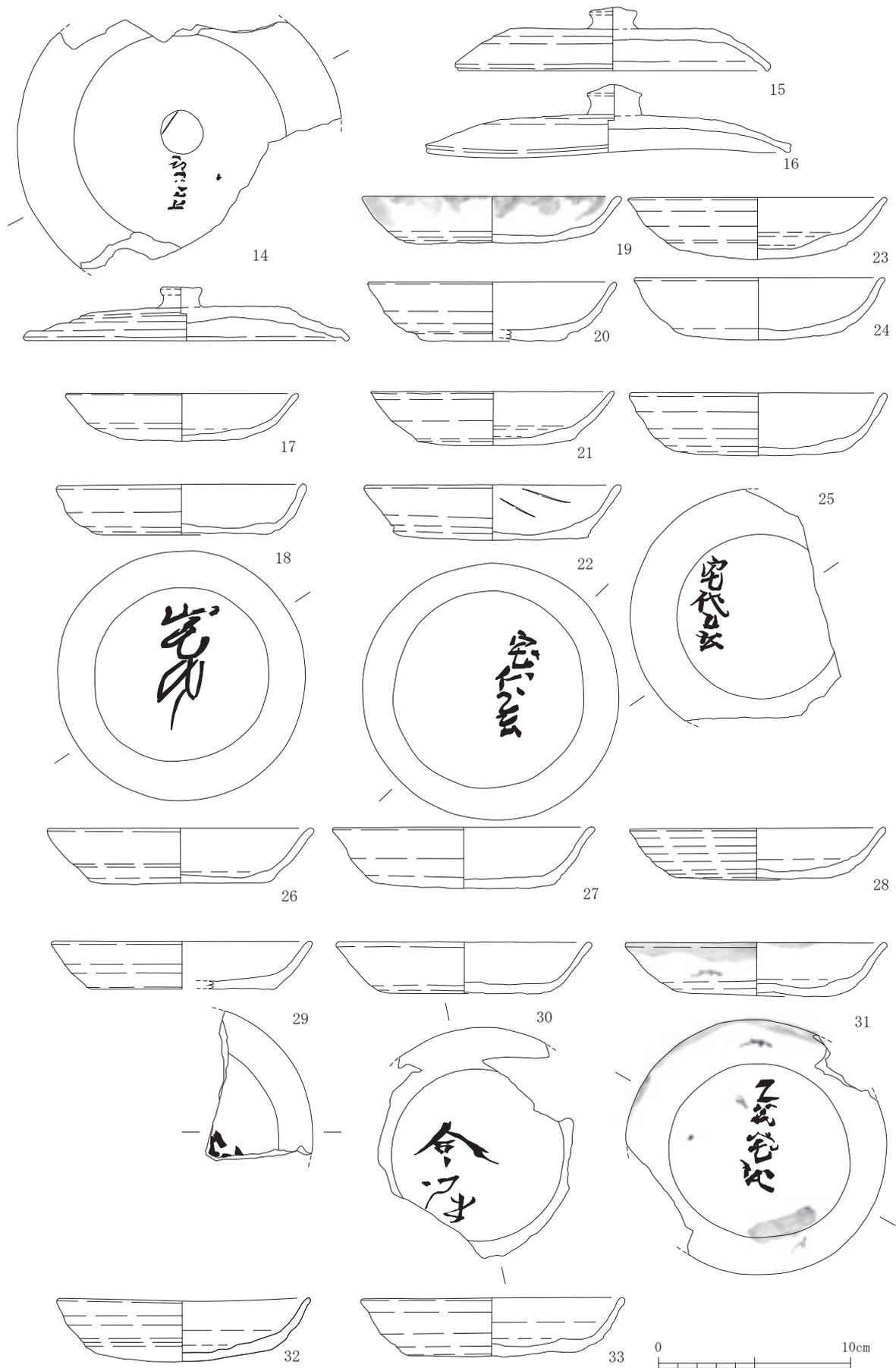
69～82は、土師器の高台付き椀である。口径12～14cm、器高5cm前後のもの(69～72)と口径16～18cmで、器高7～8cmのもの(73～78)がある。口縁部が直線的に伸びるもの(71・72・73・74・76・77)とやや外反気味に伸びるもの(69・70・75・78)がある。また高台はいずれも底部端部に付き、断面が四角形のもの(69・73・75～80・82)と三角形のもの(70・71・72・74)がある。なお、69・70は、内面黒色の黒色土器である。その他79は、器高4cmと低く、底部端部に、断面四角形の低い高台が付く。80は、底部片で、外面に「主乙公」と読むことの出来る墨書がある。81は、細長い高台が付く。82の底部の墨書は「宅口」と読むことができる。

83～89は、土師器の甕である。最大径が胴部にある、或いは推定されるもの(85・87)は、胴部上半で一旦内湾し、その後口縁部が外反する。一方最大径が口縁部にあるもの、或いは推定されるもの(84・86・88・89)は、胴部の膨らみが少なく、胴部上半でわずかに内湾し、その後口縁部が外反する(84・88)か、胴部上半はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部が外反する(86・89)。口径14cm以下のもの(84・85)、口径23cm前後のもの(86)、口径26cm前後のもの(87・88)、30cmを超えるもの(89)など、法量はバラエティに富む。90～92は、移動式竈片と思われる。3点とも同一の胎土で、同一個体の可能性がある。90は底の部分、91は把手である。92は竈の底部で、一方の側面が面取りされていることから、焚口部分と考えている。但し煤等火を受けたような痕跡は、把手の付け根にわずかに認められるくらいである。

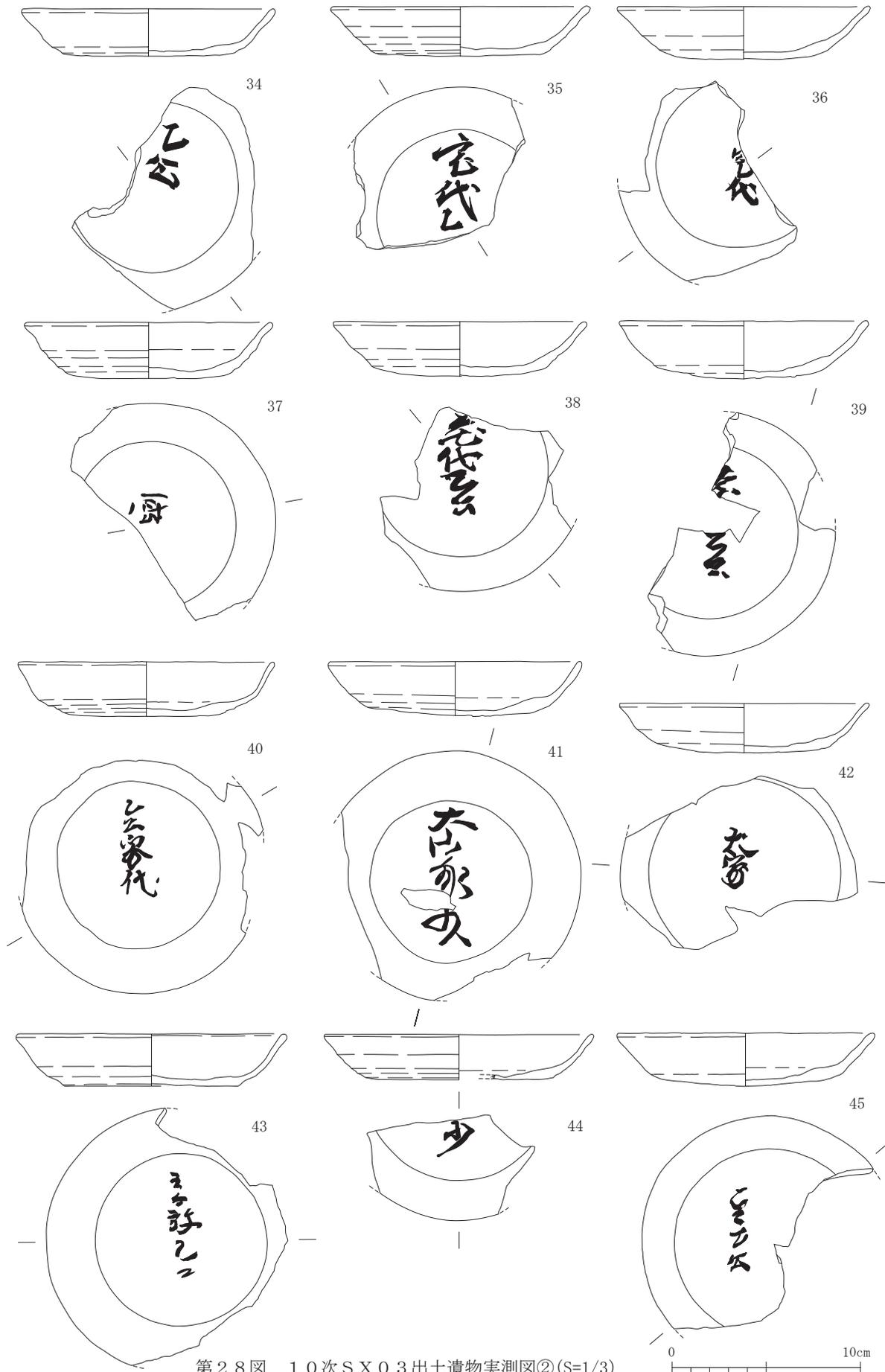
93～104は、須恵器の坏蓋である。口径は12cmに満たないもの(94)や14cmの小型のもの(103)、15～18cmのもの(95～99)、20cm前後のもの(93・101)がある。つまみを持たないもの(93)とつまみを持つもの(94～104)がある。ほとんどは、平坦なつまみだが、つまみの頂部がわずかに突出するもの(96・99・100・101)、頂部が山形に突出するもの(94・103)、高くドーム形に突出するもの(104)がある。口縁端部を折り曲げるものが多く、これらには内面に明確な稜線が認められる(94～99)。また102の外面には「宅代乙公」



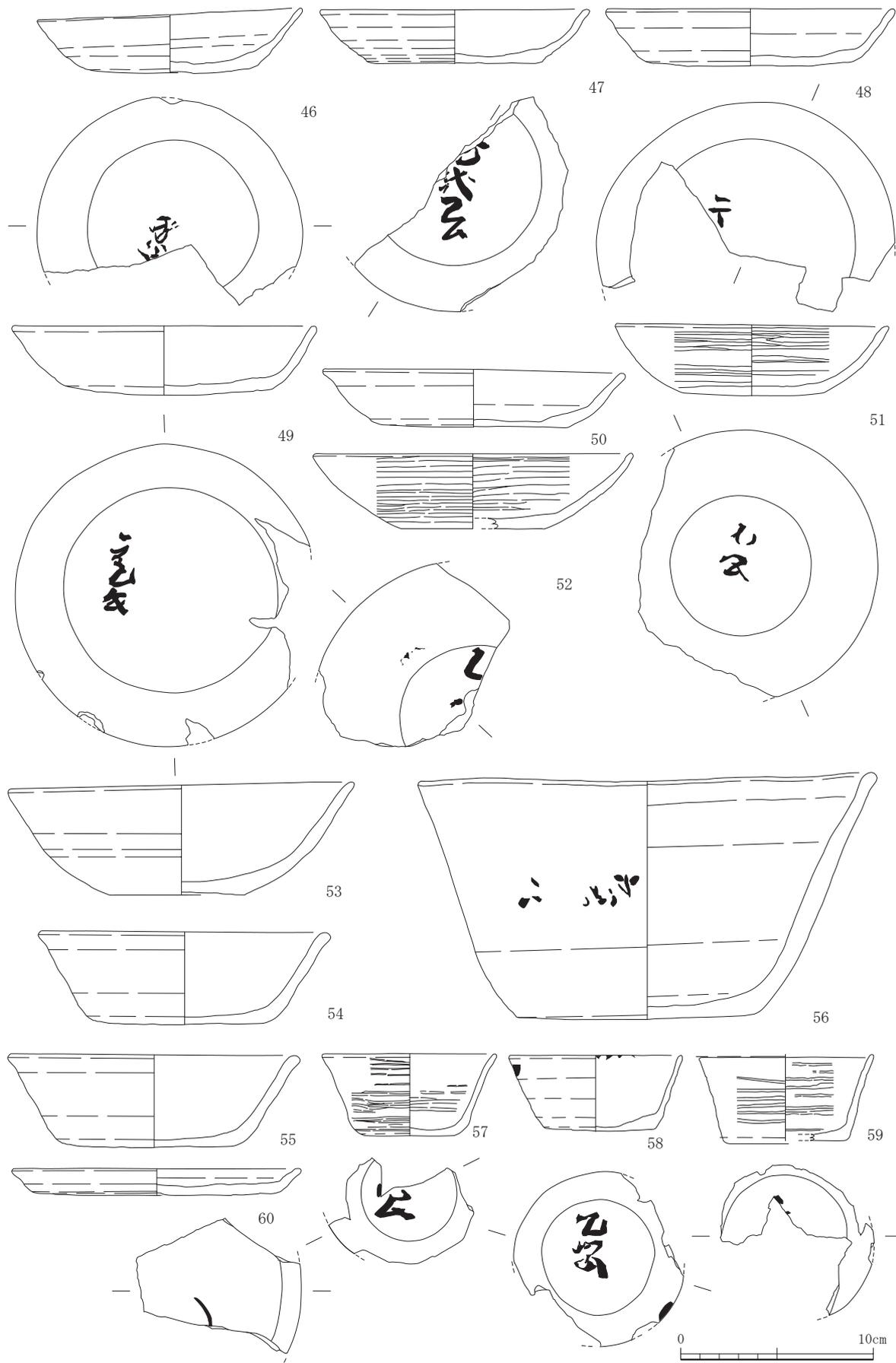
第26図 10次3・5トレンチ北壁土層断面図、SX04平面図及び断面図(S=1/50)



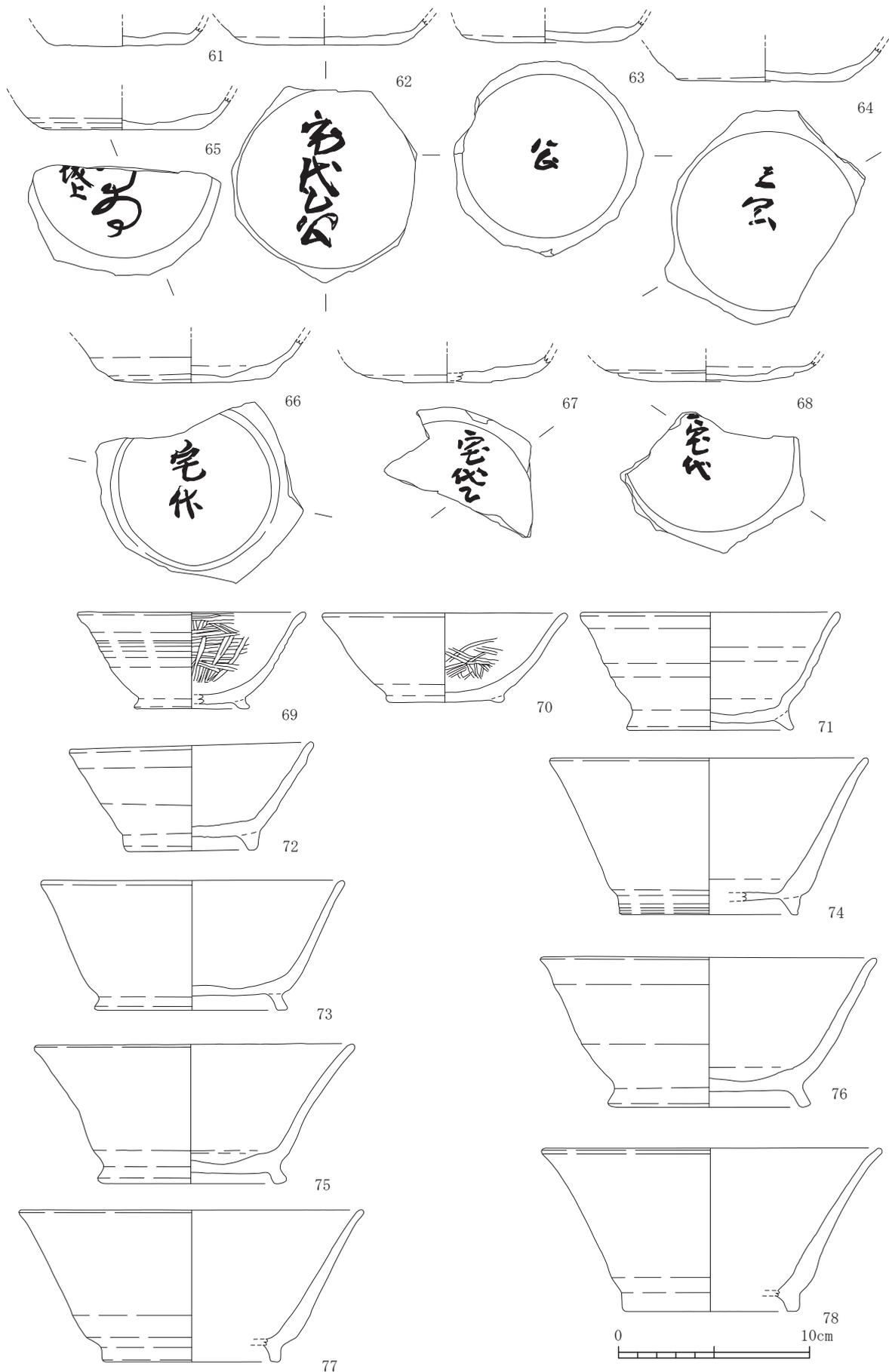
第27図 10次SX03出土遺物実測図①(S=1/3)



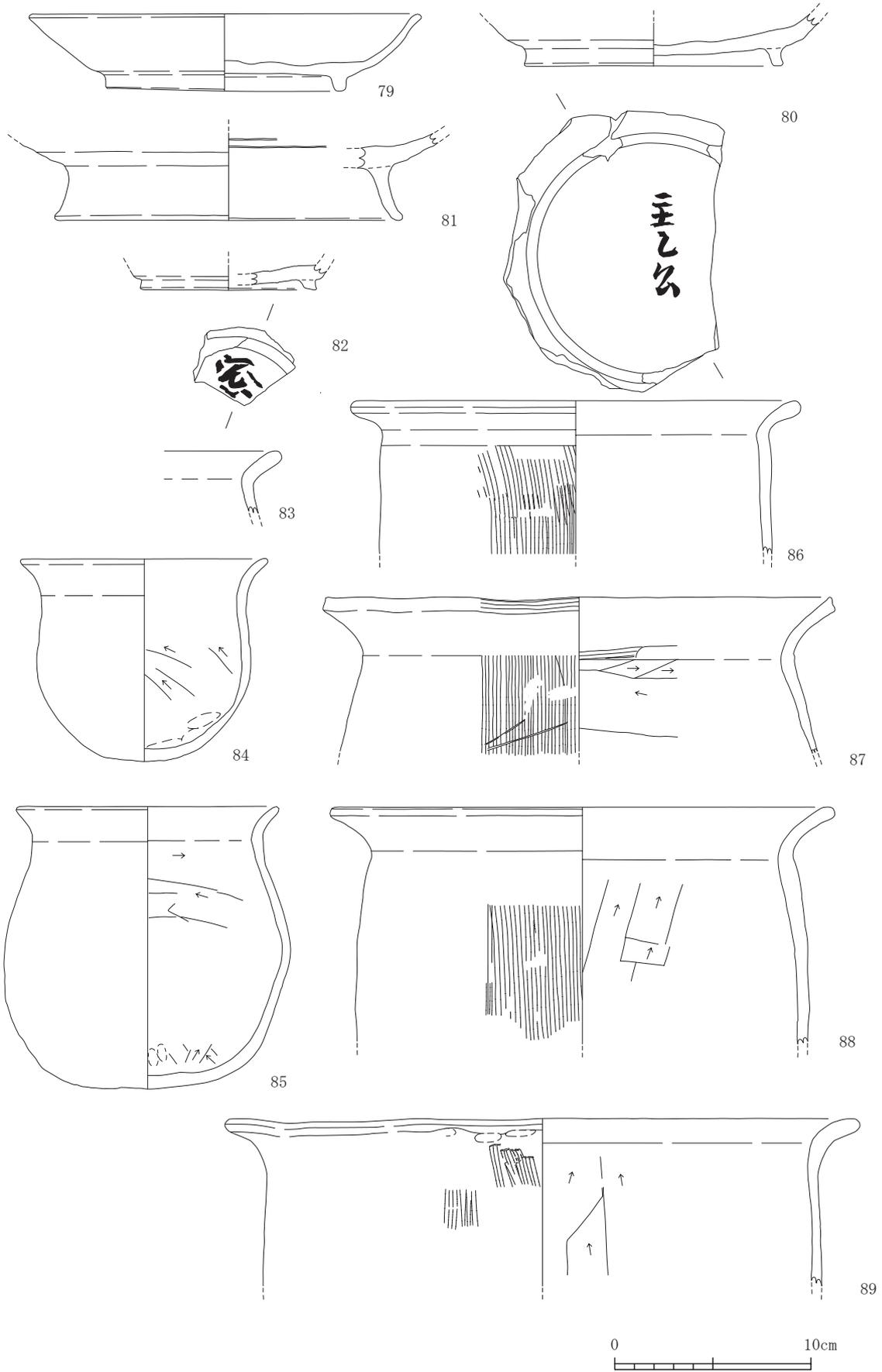
第28図 10次SX03出土遺物実測図②(S=1/3)



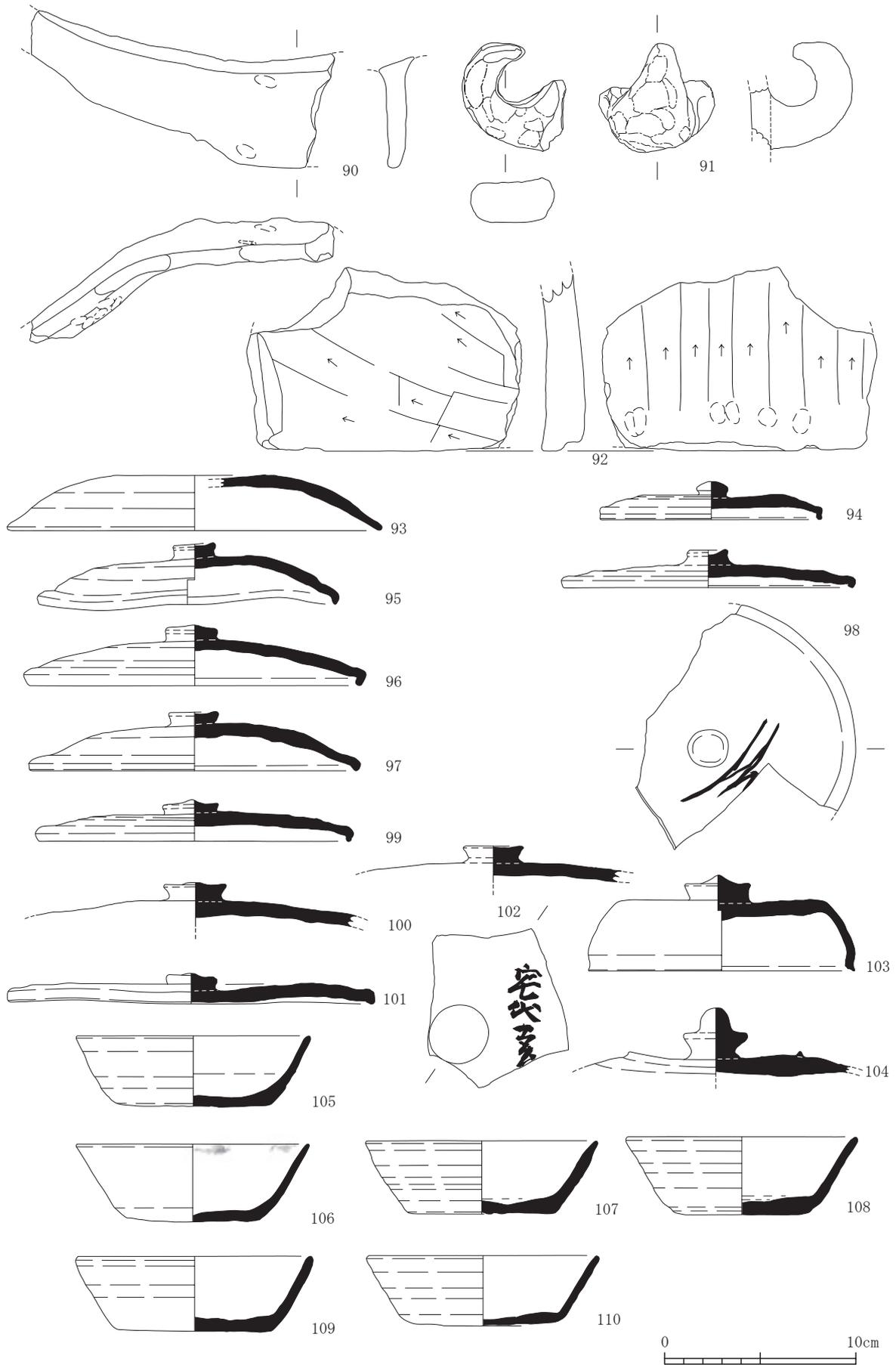
第29図 10次SX03出土遺物実測図③(S=1/3, 53は黒色土器)



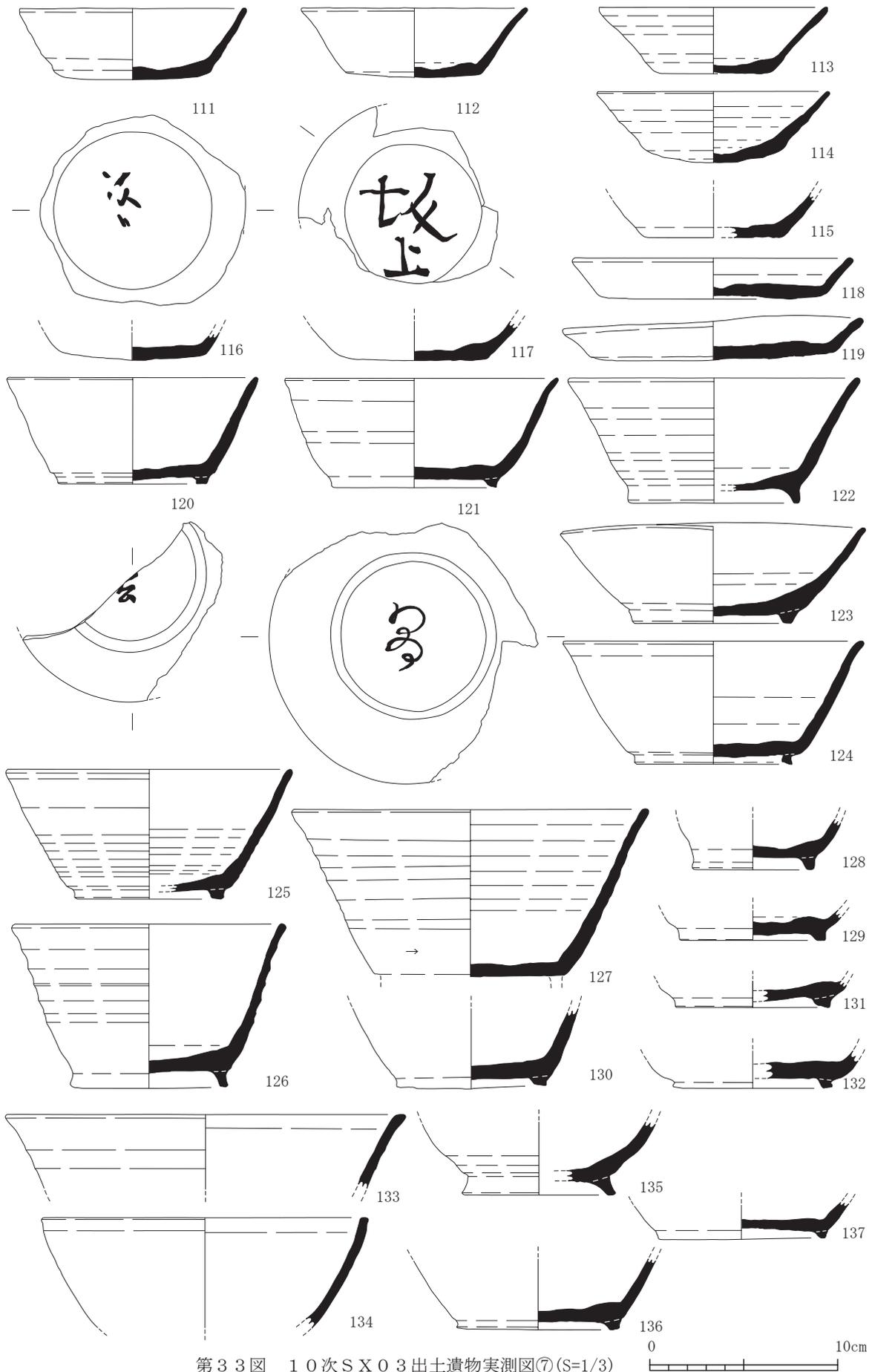
第30図 10次SX03出土遺物実測図④(S=1/3, 69、70は黒色土器)



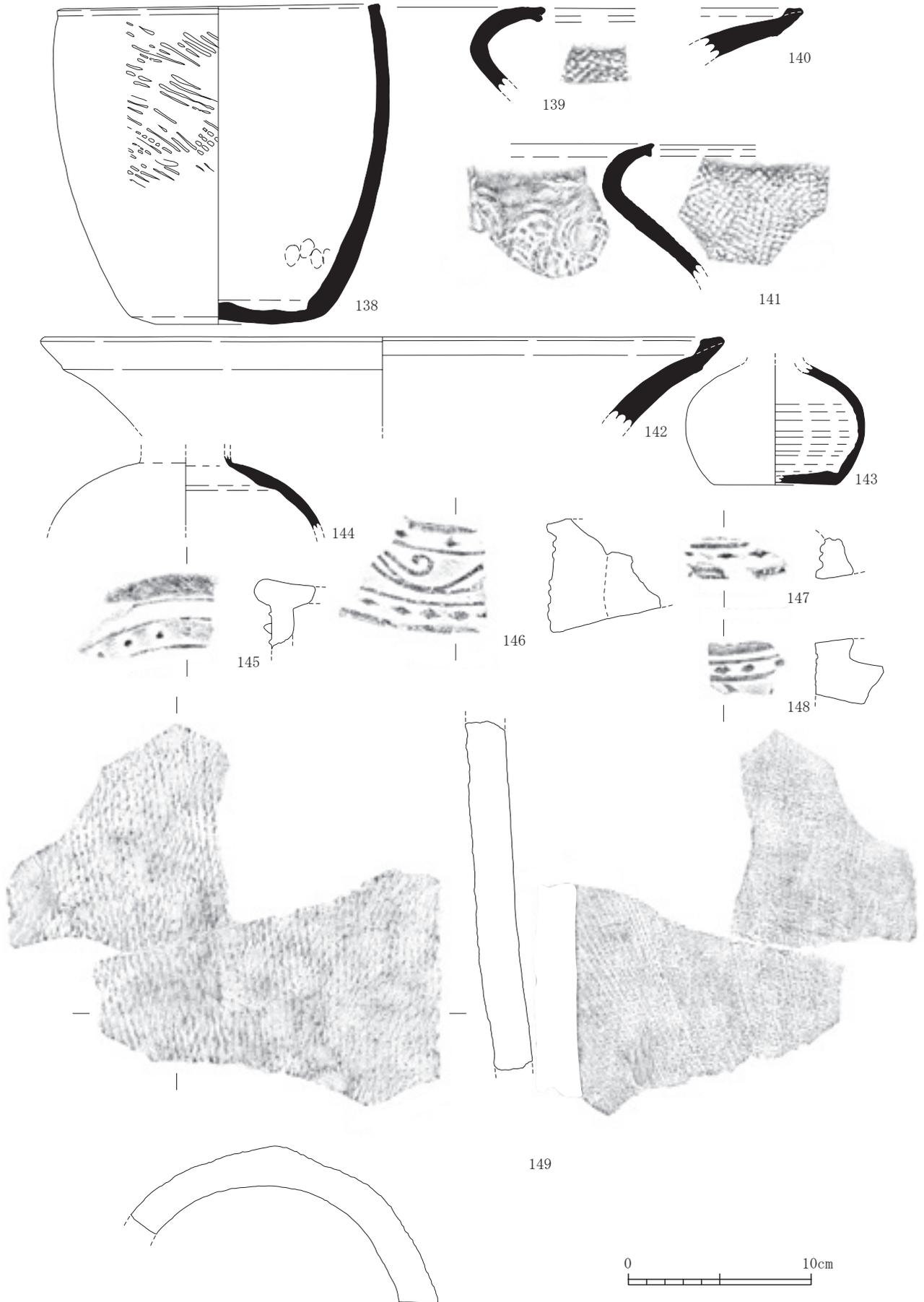
第31図 10次SX03出土遺物実測図⑤(S=1/3)



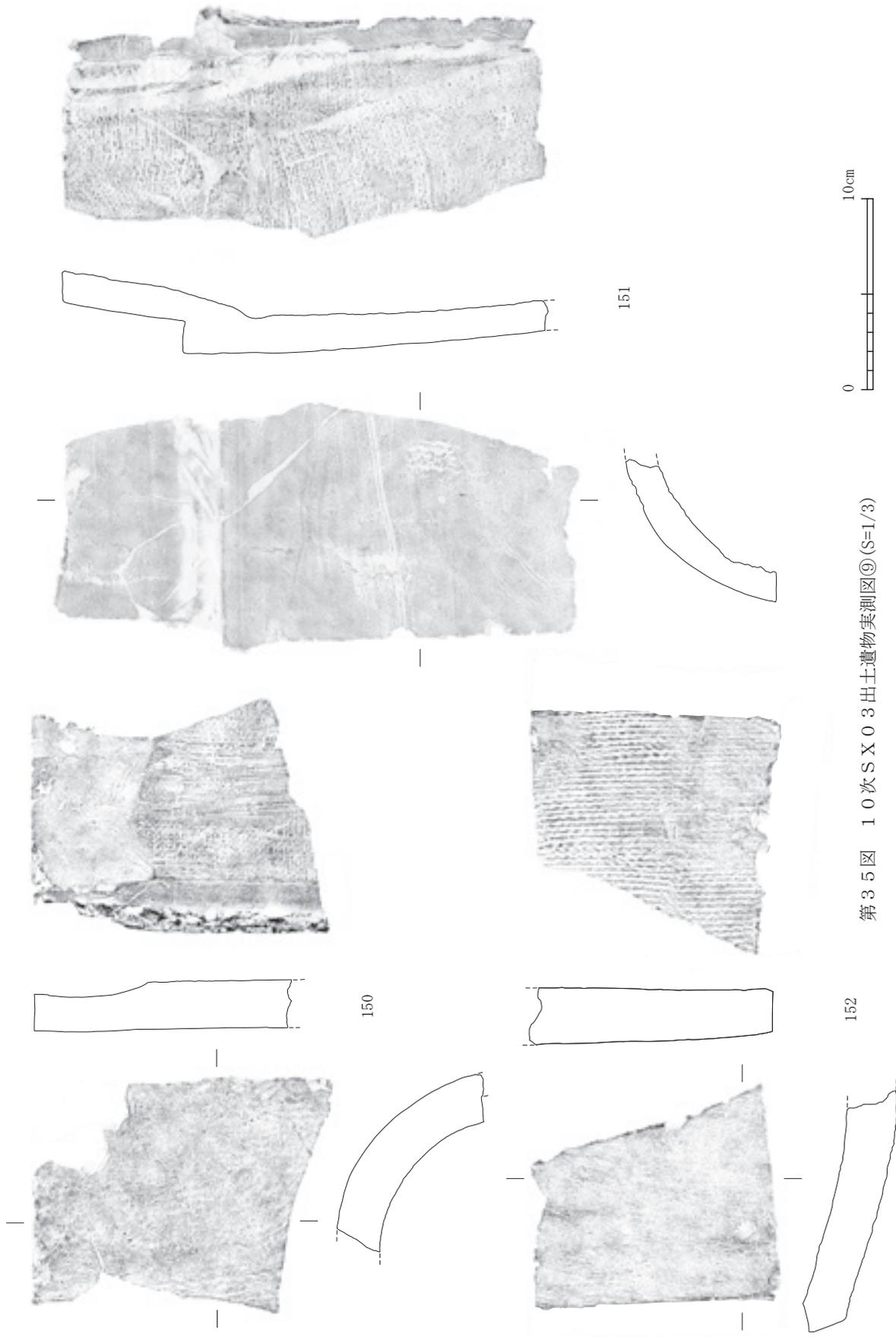
第32図 10次SX03出土遺物実測図⑥(S=1/3)



第33図 10次SX03出土遺物実測図⑦(S=1/3)



第34図 10次SX03出土遺物実測図⑧(S=1/3)



第35図 10次SX03出土遺物実測図⑨(S=1/3)

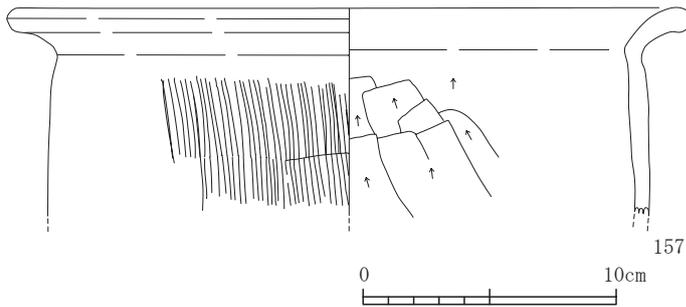


153

第36図 10次SX03出土遺物美測区⑩(S=1/3)



第37図 10次SX03出土遺物実測図①(S=1/3)



第38図 10次SX05出土遺物実測図(S=1/3)

の墨書がある。105～117は、須恵器の坏である。口径は多くが12～13 cmにおさまり、器高も4 cm前後である。形状は、平底で体部との境も明瞭で、体部が直線的に伸びていくものが主流を占める(105～109・113・115・117)。一方で底部もやや丸みを持ち、体部との境があまり明確でないもの(114)や、その中間的な形状のもの(110～112・116)が存在する

る。なお105は、SX03内のピット2からの出土である。118・119は、須恵器の皿である。120～137は、須恵器高台付きの椀である。口径が15～17 cmくらいのもが多く(122～126・134)、13 cm程のもの(120)、20 cm前後のもの(127・133)も存在する。形状は、平底で体部との境も明瞭で、体部が直線的に伸びていくものが主流を占める。一方で底部もやや丸みを持ち、体部との境があまり明確でないもの(122・123・125)も存在する。高台の形状は断面四角形のもが主流を占める。138は、須恵器の鉢である。平底の底部で最大径は胴部上位にある。139～142は、須恵器の甕、又は壺である。139と141は、口縁部が大きく外反し「く」の字状を呈す。140、142は、口縁部が大きく外に開く。143・144は、須恵器の壺である。

145は、軒丸瓦片である。外縁の断面形は丸みを帯び、外区に珠文を持つ。146～148は、軒平瓦片である。外区にはひし形の珠文を持ち、内区に唐草文を持つ。149～151は、丸瓦片である。いずれも凹面には布目痕跡が認められる。149の凸面には縄目タタキが認められ、側面は面取りが施されている。150・151はナデ調整が施されている。152～156は、平瓦片である。凹面は、ナデ調整が施されているが、布目痕跡が残る。凸面は、152～154は、縄目タタキが施される。155・156は格子タタキ目の痕跡が認められる。いずれも側面は面取りされている。坏・椀の底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整、赤彩が施されており、遺物の多くは、9世紀前葉におさまる。その中で69・70の黒色土器は、やや時期が新しく中葉以降になる。また81も高台が高くなっており、若干時期が新しくなるかも知れない。

#### その他写真のみ掲載遺物(図版35～37)

墨書土器を主に掲載している。写2・22は判読不能である。写3は「乙公」、写5は「主乙」、写6は「宅?」写7は「乙乙?」写8は「宅代」、写9は「乙?公」、写10は「乙公?」、写11は「戸米」、写12は両面に「厨」、写13は「宅」、写14は「口公」、写15は「乙公」写16は「宅」と読める。

#### 4 SX04(第24・26図)

SX03内の5トレンチで検出された土坑状遺構である。SX03のA'層を掘り込んでいる。近現代のカクラン及び5トレンチにより壊されており、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。現状の長径1 m、深さ20 cm程である。遺物は出土していない。

#### 5 SX05(第24・26・38図)

同じく5トレンチ内で検出された遺構である。SX03のA'層を掘り込んでいる。80×60 cmの円形を呈す。埋土中より、土師器片が出土している。第38図の157は、土師器の甕である。胴部はあまり膨らみをもたず、最大径は口縁部にある。

## 第5節 12次(2011年)調査の成果

調査1、2区は、10次調査区の西に隣接する。3区だけが、直線距離で北東に400m程離れた地点に位置する。

### 1 1区の調査成果(第39図)

直角三角形に近い形状の調査区で、調査面積は100㎡程度で、遺物出土量は、13号ビニール袋換算で4袋である。

アスファルト・バラスを除去すると、すぐに遺構検出面となるため基本土層は存在しない。本来は、隣接する10次調査区と同様と思われる。なお、調査2区も同様である。

SX01は、埋土に現代の遺物を含む新しいものである。後述するSX02、SX03の一部を破壊している。SX02、SX03の土層埋土と区分するため便宜的にSX01と呼称している。

### SX02

調査区の南に、ほぼ東西に延びる落ち込みの一部を検出した。南側の立ち上がりは、調査区の範囲外になり、確認できていない。断面は2段掘りに近い形状で、2段目の掘り方はほぼ垂直に落ち込むようである。深さは現状で約2mであるが、安全上の問題もあり完掘できておらず、更に深くなると思われる。土層を観察すると、全体的に黒色から暗褐色の色調の土で、しまりは弱いようである。粘性のある層が多い。以上から自然に堆積した可能性が高いと判断した。なお、当初B-B'地点でSX02の土層断面図を作成する予定であったが、想定より深く調査区外になってしまったため、急きょA-A'地点に変更した。A-A'地点は既に掘り下げを行っていたため、標高約10.3m以下からの土層図となっている。SX02の上層については、B-B'を参照されたい。

熊本市教育委員会が第2次調査として1990年に調査した際に検出した溝、及び2011年の第47次調査で検出された溝に繋がるものと考えている。熊本市第2次調査の溝の埋土は、砂状質のもので、下位面はほとんどが砂礫で占められている。一方第47次調査では、断面形はY字形を呈し、幅は最大で5.6m、深さは4m程度であり、下層にいくと砂質層となる。SX02と断面形の形状が類似している。

### SX03

SX01、SX02により遺構の一部を破壊されているが、楕円形の土坑である。短辺で、幅1.1m程を測る。断面形は、すり鉢状を呈し、深さは現状で40cm程である。遺物は出土していない。

### SX02の出土遺物(第40図)

158は、坏の口縁部である。口縁部は外に向かいまっすぐに延びる。復元口径12.2cmを測る。159は、黒色土器A類の碗の底部である。底部外寄りに断面三角形の短い高台が付く。また内面には、手持ちヘラミガキが施されている。160は平瓦片である。凸面には縄目のタタキが見られる。凹面には、布目痕跡が残る。161・162は、丸瓦である。162の凸面には縄目タタキが見られる。161・162共に凹面には布目痕跡があり、161では布の皺の痕跡も認められる。

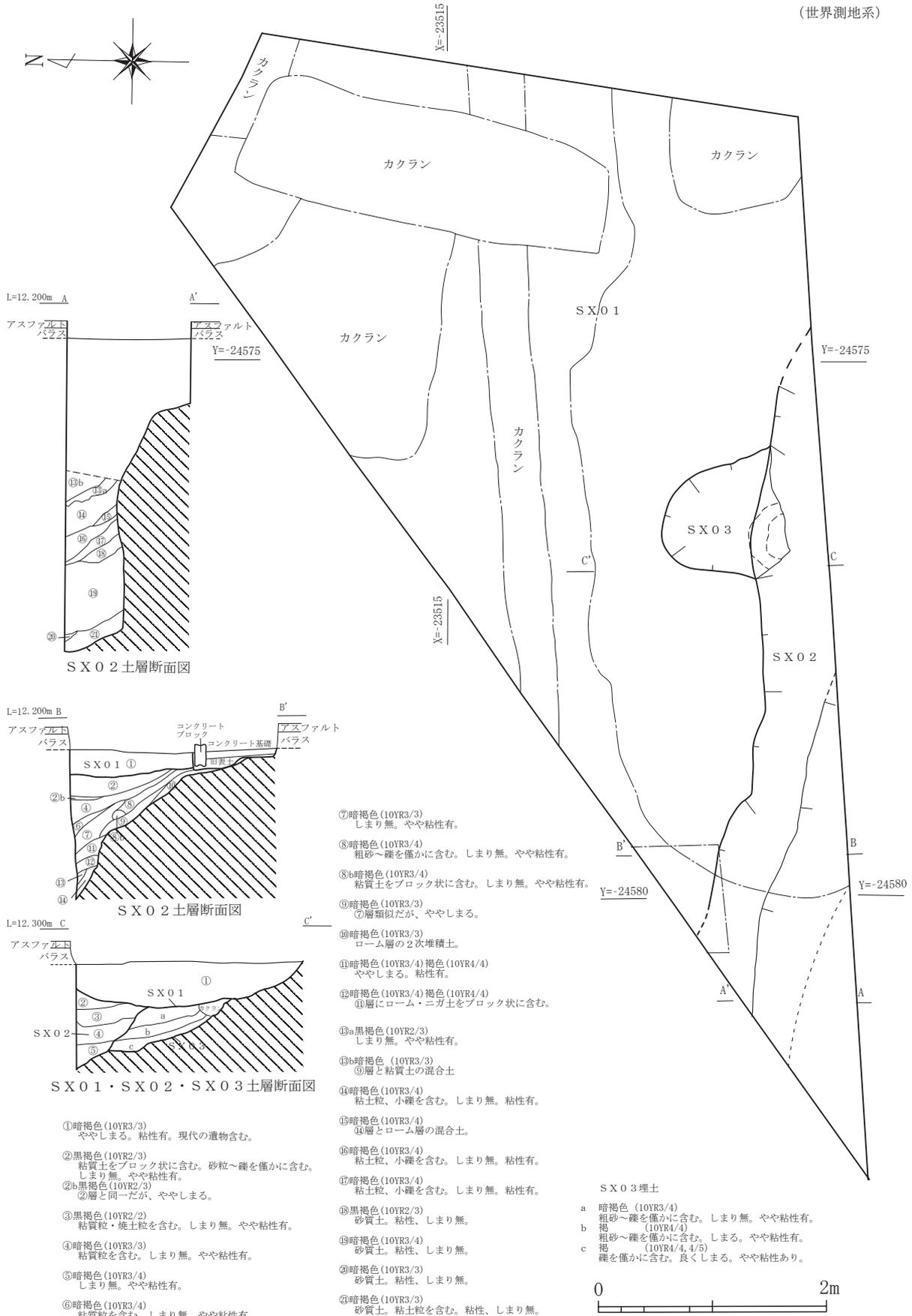
### 2 2区の調査成果(第41図)

不整形な長方形で、南北10m、北側で4m、南側で3m程度で調査面積は140㎡程度である。ほぼ南北に延びる2本の溝または道路状の遺構が検出されている。出土遺物量は、13号ビニール袋換算で11袋程度である。

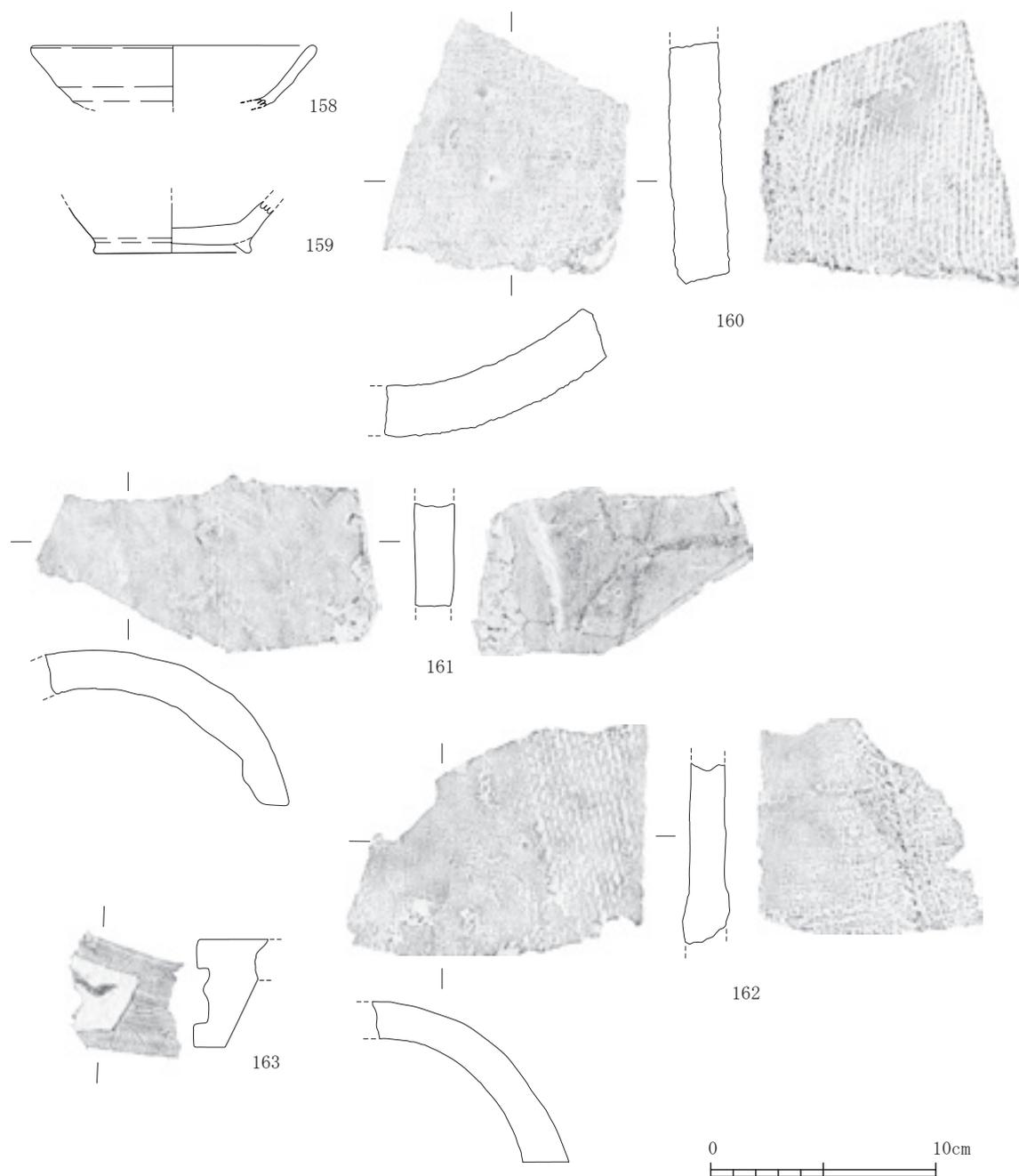
### SX04

表土直下で検出された。調査区のほぼ全域が該当し、ほぼ南北に延びる。東側の掘り込みラインのみが検出されている。西側は、SX05と重複しており立ち上がりは不明である。3m以上の幅がある。埋土の状況は、全体的にみると厚さ10cm前後の土が水平に堆積しており、また2種類以上の土をブレンドした層

(世界測地系)



第39図 12次1区遺構配置図SX01・SX02・SX03平面図及び断面図(S=1/50)



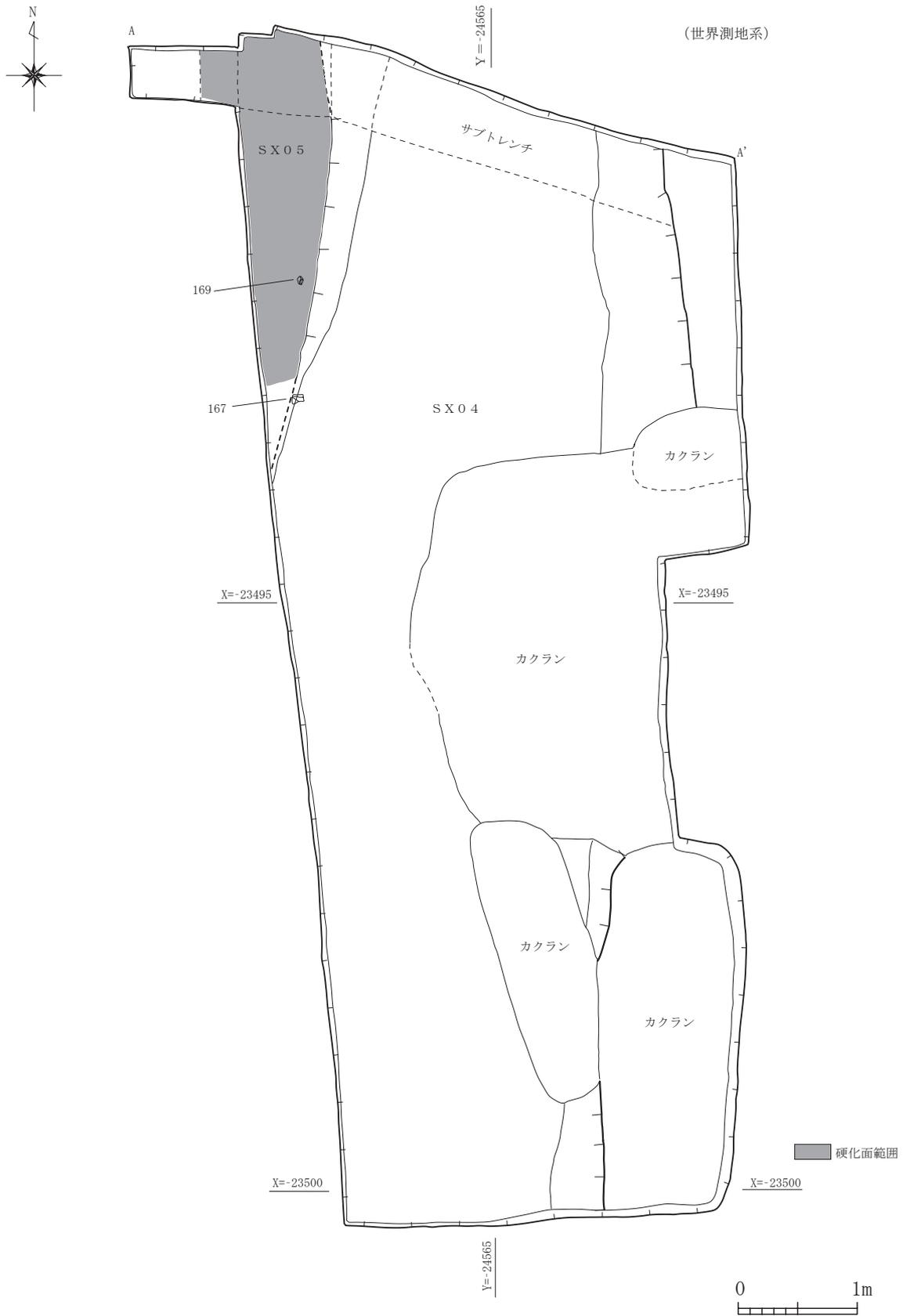
第40図 12次1区出土遺物実測図(S=1/3, 159は黒色土器)

(h, i, j, p, u 層等)があるので、人為的に整地した可能性が高い。その他攪乱で詳細が分からないが、不自然な斜めの堆積層(西壁斜線 f, h, l 層)や一部掘り込んだ箇所が認められる(西壁斜線 i, j, k)。一旦標高 12.4m 付近(i 層上面)で整地作業が中断したようにも見える。この標高 12.4m 付近は北壁では、SX04の最上層にあたる。土層の所見は、「しまる」「ややしまる」という表現が多い。

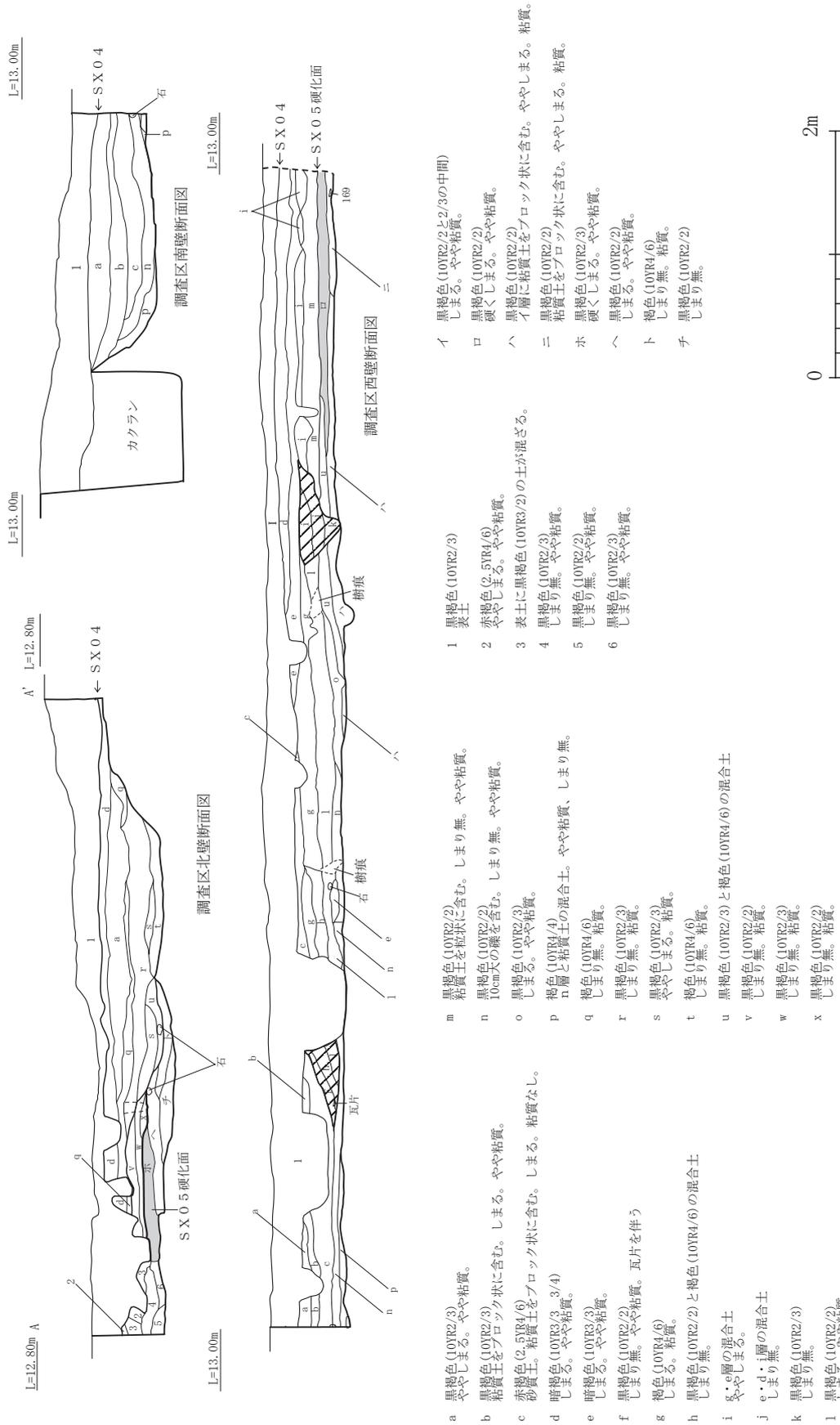
出土遺物は、土師器、須恵器、瓦片で、出土量はそれほど多くはない。その中で瓦片の多さが注目される。

#### SX05

調査区北西隅で検出された遺構である。硬くしまった面が、SX04同様ほぼ南北に延びることが予想される。硬化面の厚さは10cm弱で、標高12.0mから12.1mである。規模は、幅1m以上、長さ3m以上である。北壁の土層を観察すると、SX05の硬化面はSX04により破壊されているように見える。一方北壁の左(西)側は、攪乱土のような堆積状況(2~6層)により、SX05の硬化面が途切れる。また西壁で観察する



第41図 12次2区遺構配置図(S=1/50)



第4図 1 2次2区土層断面図(S=1/50)

- a 黒褐色(10YR2/3) ややしまる。やや粘質。
- b 黒褐色(10YR2/3) 粘質土をブロック状に含む。しまる。やや粘質。
- c 赤褐色(2.5YR4/6) 砂質土。粘質土をブロック状に含む。しまる。粘質なし。
- d 暗褐色(10YR3/3, 3/4) しまる。やや粘質。
- e 暗褐色(10YR3/3) しまる。やや粘質。
- f 黒褐色(10YR2/2) しまり無。やや粘質。瓦片を伴う
- g 褐色(10YR4/6) しまる。粘質。
- h 黒褐色(10YR2/2)と褐色(10YR4/6)の混合土 しまり無。
- i g・e層の混合土 ややしまる。
- j e・d・土層の混合土 しまり無。
- k 黒褐色(10YR2/3) しまり無。
- l 黒褐色(10YR2/2) しまる。やや粘質。
- m 黒褐色(10YR2/2) 粘質土を粒状に含む。しまり無。やや粘質。
- n 黒褐色(10YR2/2) 10cm穴の縁を含む。しまり無。やや粘質。
- o 黒褐色(10YR2/3) しまる。やや粘質。
- p n層と粘質土の混合土。やや粘質、しまり無。
- q 褐色(10YR4/6) しまり無。粘質。
- r 黒褐色(10YR2/2) しまり無。粘質。
- s 黒褐色(10YR2/3) ややしまる。粘質。
- t 褐色(10YR4/6) しまり無。粘質。
- u 黒褐色(10YR2/3)と褐色(10YR4/6)の混合土
- v 黒褐色(10YR2/2) しまり無。粘質。
- w 黒褐色(10YR2/3) しまり無。粘質。
- x 黒褐色(10YR2/2) しまり無。粘質。
- 1 黒褐色(10YR2/3) 表土
- 2 赤褐色(2.5YR4/6) ややしまる。やや粘質。
- 3 表土に黒褐色(10YR3/2)の土が混ざる。
- 4 黒褐色(10YR2/3) しまり無。やや粘質。
- 5 黒褐色(10YR2/2) しまり無。やや粘質。
- 6 黒褐色(10YR2/3) しまり無。やや粘質。
- イ 黒褐色(10YR2/2)と2/3の中間 しまる。やや粘質。
- ロ 黒褐色(10YR2/2) 硬くしまる。やや粘質。
- ハ 黒褐色(10YR2/2) イ層に粘質土をブロック状に含む。ややしまる。粘質。
- ニ 黒褐色(10YR2/2) 粘質土をブロック状に含む。ややしまる。粘質。
- ホ 黒褐色(10YR2/3) 硬くしまる。やや粘質。
- ヘ 黒褐色(10YR2/2) しまる。やや粘質。
- ト 褐色(10YR4/6) しまり無。粘質。
- チ 黒褐色(10YR2/2) しまり無。

と標高 12.2m に硬化面が観察されるが、南に向かうに従い途切れる。調査担当者は、道路状遺構と考えているようである。土師器片や須恵器片が出土している。

**SX04とSX05の関係**

前述したように、北壁土層図からは、一部SX04により破壊されているように見える箇所があるので、SX05が先行する可能性はある。但し西壁で見られるよう、SX05硬化面上にSX04の埋土が堆積しており、SX04は、SX05の硬化面を部分的に再利用しているようでもあり、明確な切り合い関係は認められない。或いは同一遺構の可能性もあり得る。両遺構とも、その性格は不明である。

**SX04出土遺物（第43図）**

164は、土師器甕の口縁部である。165は、須恵器碗の底部である。外端に高台が付く。166は平瓦片である。凹面には、布目痕。凸面には縄目タタキが観察できる。

**SX05出土遺物（第43図）**

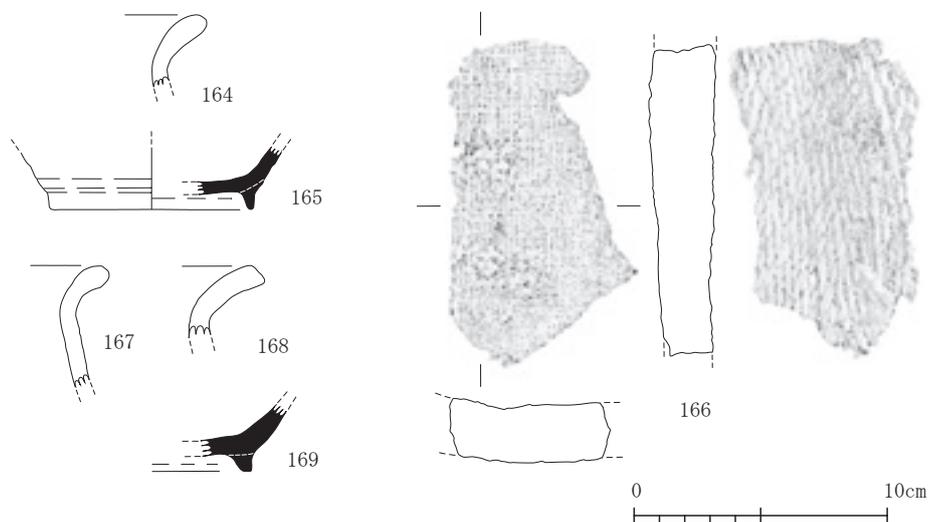
167・168は、土師器甕の口縁部である。169は須恵器碗の底部である。

**3 3区の調査成果（第44図）**

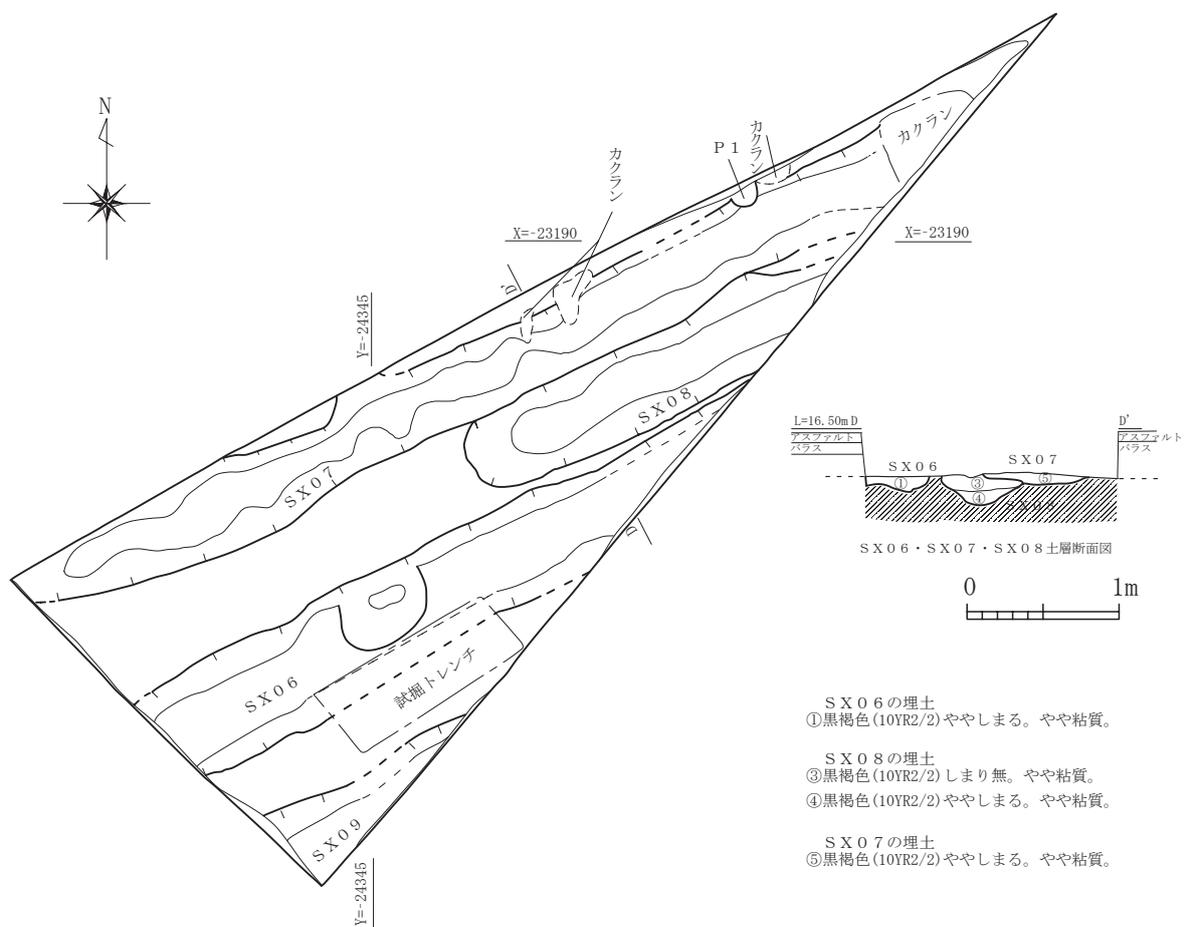
二等辺三角形に近い形状の調査区であり、調査面積は210㎡程度である。表土直下に、北東から南西に延びる4本の溝状遺構が検出されている。いずれも幅50cm、深さ10cm程度である。図面の注記によるといづれも、標高16.1～16.2m付近に硬化面の記載があるので、埋土を除去した面が硬化面となるようである。SX09は、幅は不明であるが他の3本は50cm程度の幅で、同じ方向であることから、個別の遺構と言うより、合わせて一つの遺構と考えた方がいいようであり、道路の可能性が高いと考えている。出土遺物は、SX07で出土した瓦片を除いては図化に耐えるものはないが、SX06より平瓦の小片2点及び土師器細片1点、SX07より須恵器小片1点出土。SX08からも土師器の細片が出土している。

**3区の出土遺物（第45図）**

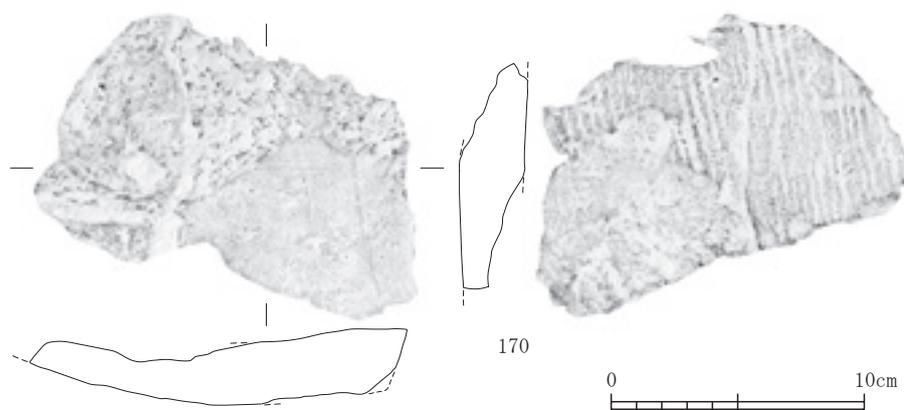
出土遺物は、13号ビニール袋2袋にも満たない。170は、平瓦片である。SX07からの出土である。凹面には、布目の他、布の皺の痕跡、凸面には、縄目タタキが認められる。



第43図 12次2区SX04・SX05出土遺物実測図(S=1/3)



第44図 12次3区SX07・SX08・SX09平面図及び断面図(S=1/50)



第45図 12次3区出土遺物実測図(S=1/3)

## 第IV章 総括

### 第1節 遺構について

残念ながら検出された遺構のほとんどはその性格が不明である。調査年度を無視すれば、調査箇所は大きく2箇所に分けることができる。9次及び12次3区は北東側に、10次及び12次1・2区は、南西側に位置する。

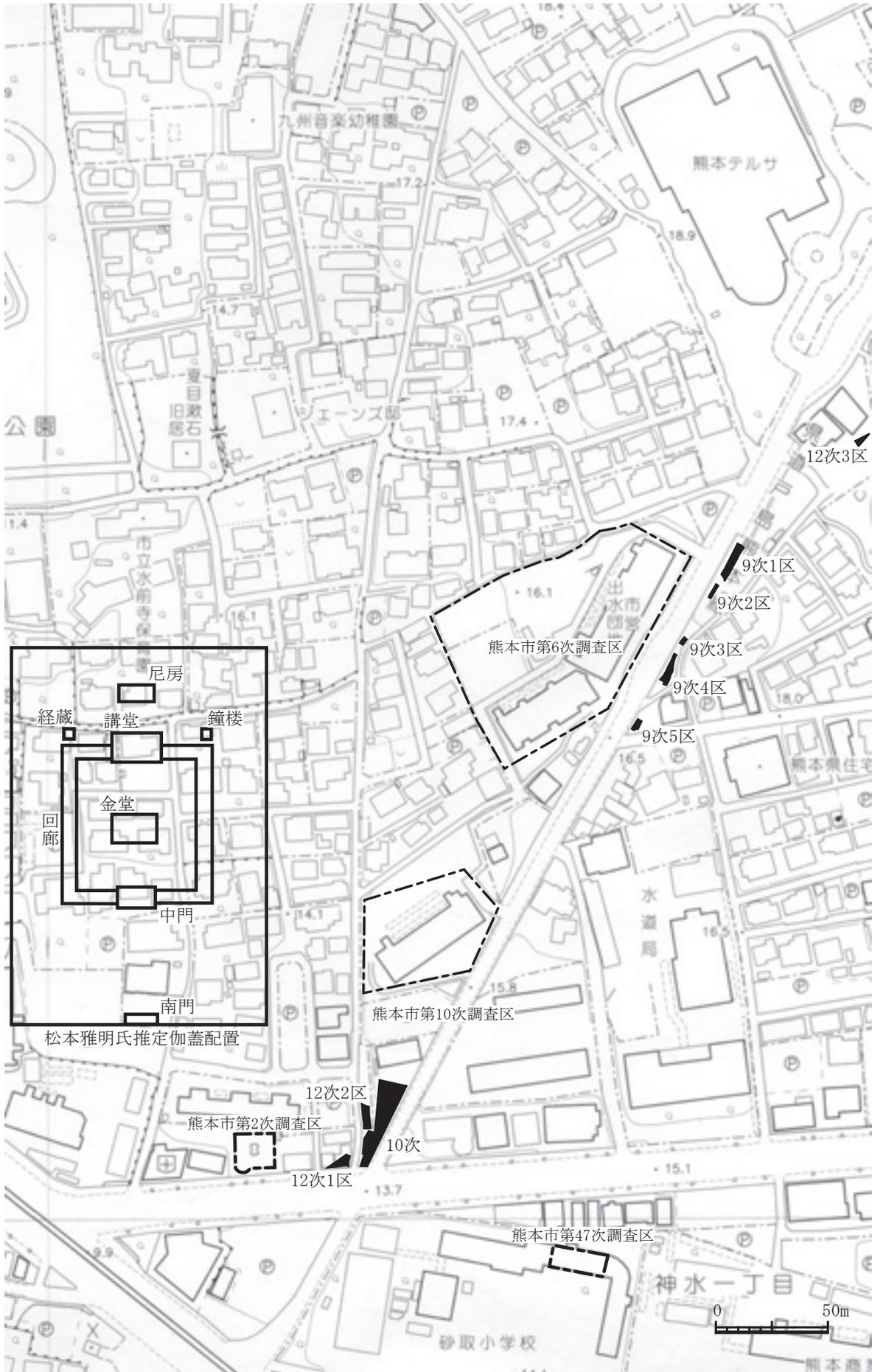
まず北東側に位置する9次・12次3区は、遺構密度はうすく、遺物の出土量もわずかである。しかし布目瓦片等の遺物も少量ながら出土しているし、道路の可能性のある遺構や多数のピットも検出されている。

9次調査区と道路を挟んだ地点に、熊本市教育委員会が1993年度に行った6次調査区がある。竪穴建物のほか、多数の柱穴が検出されている。柱穴の分布が特徴的で南北・東西方向にそれぞれ帯状に集中し、その中心には、ほとんど柱穴がない部分があり、調査者は、そこに道路があった可能性を指摘している。9次調査区は調査面積が狭いため、ピットの分布状況もつかみにくいが、第13図の硬化面と第14図のピットの状況を重ね合わせると、ほぼSX03・04の両際にピットが点在するように見える。また5区のSX05とピットの関係も同様であり、熊本市の6次調査区の状況に近いのかも知れない。また12次3区も、道路状遺構が検出されている。特段の施設もなく、単に人の往来で硬くなった道路も存在するのだろうが、硬化面が若干続くだけで安易に道路としていいものか疑念がある。特に今回の調査区は狭く、9次4区のSX02・03・04などの硬化面は、すぐに調査区外になってしまう。今回はそれもあって、SX（不明遺構）としている。ただし、9次SX01・SX05、12次3区の遺構は、道路の可能性が高いと考えている。

一方南西側の調査区では、次のような遺構が検出されている。10次調査区では、掘込地業ではないかと言われているSX01や土坑であるSX02、土師器、須恵器が多量に出土した、溝状遺構であるSX03が主な遺構である。12次1区では、溝状遺構であるSX02、2区では、10次のSX01につながるSX04・SX05が主要な遺構である。

10次SX01や12次SX04は、掘込地業の可能性を指摘されているもので、第三章でその性格は不明としたが、改めて検討してみたい。一般に「掘込地業」と言われているものは、建物或いは基壇の地下部分を掘り下げ、突き固めながら埋め戻し、地盤改良を行うものである。筆者の認識としては、(1) 質の異なる土を交互に突き固めており、細かく分層でき、固くしまっている。(2) 規模は、最大で建物位置全体を掘り込む(総地業)が、各礎石下程度のもの(壺地業)もある。(3) 断面形は四角形に近い形状で、立ち上がりは比較的まっすぐである。(4) 総地業、壺地業、布地業などを組み合わせるものもある。以上を10次SX01、12次SX04にあてはめると、細かく分層でき、色調の異なる土が比較的交互に堆積している。再建時の場合、あまりしまりのない地業もあるとは聞いているが、所見ではあまりしまりが無いとの表現が多い。また規模であるが、10次のSX01を一つの遺構として捉えるか否かにもよるが、一つの遺構として捉えた場合15m程の長さがある。更に12次のSX04に繋がるならば、28m以上の長さになる。陳山麿寺の近接地ではあるが、40m程離れており、その場所にそれほどの規模の建物を想定することは難しい。また断面形も、SX01の東側の立ち上がりは比較的なだらかに立ち上がる。

以上からすると、建物の基礎としての掘込地業と認定するのは難しい。それでは他にどのような性格の遺構であるかと問われれば明確に答えることはできない。可能性として、築地塀の基礎地業として掘込地業を伴っている場合もあるので、その可能性はあるのかもしれない。あるいは、当初溝としての機能を持っていた遺構が、ある時期に別の用途に用いるため意図的に埋め戻された可能性もある。それが土坑2であり、その埋め戻しが完了した段階(或いは最終段階直前)に、土坑1や溝1としたものが掘り込まれた。溝1につい



第46図 関連調査区配置図(S=1/2500)

ではその用途は検討がつかないが、土坑1については、埋土は、しまりはあまり無いものの、断面を見ると比較的まっすぐに立ち上がる点や、規模も現状で4m程の長さである点から、建物の基礎としての掘込地業の可能性はあるかも知れない。しかし土坑1の全体的形状も不明であることから、あくまで可能性があるだけで、現状ではその性格は不明である。

溝状遺構としたものに、10次のSX03、12次1区 SX02がある。10次SX03は、幅7.2m、深さ0.8m程度である。SX03の土層堆積状況は、一つの層の堆積が厚く、あまり分層されていないので、SX01のように地盤改良等を目的として埋め戻されたものではないと考えている。また10次SX03の遺物の多くは、9世紀前葉のもので、墨書土器が多数を占める。その墨書は、「宅代乙公」など同じ文字が多数見受けられることから、短期間に遺物が廃棄されたことが窺える。なお溝状遺構は、10次調査区の北にある熊本市の第10次調査区では確認されていない。また平面図でみると北西に弧を描いているように見えるので、そこで西に曲がっている可能性は高い。またSX03の底で土器が出土している。その中にはピット2のように埋納されたような状態で出土している土器もある。ピット2の土器と廃棄された多量の土器と時期差は無いようなので、この溝を廃棄する際に地鎮のために埋納した可能性が高い。また土層の所見にも砂質の層は認められないので、水が流れているような状況も想定できない。

一方12次SX02であるが、これとよく似た形状の溝が、熊本市第47次調査区で検出されている。調査者は、12次SX02や熊本市第2次調査区で検出された溝に繋がることを想定している。熊本市第47次調査区は、Y字形の断面形で、幅は最大5.6m、深さ4mを測る。出土遺物は9世紀後半である。また12次SX02からの出土遺物は少ないが、低い断面三角形の高台をもつ椀（黒色土器・159）が出土しており、時期的にもほぼ同じであると思われる。今回の調査では底まで掘ることが出来ていないが、熊本市第2次及び第47次調査区では、下層は砂礫層となっており、底には水が存在したことが想定できる。

このように10次SX03と12次SX02は、深さに大きな違いがある。この違いは溝の用途の違いが考えられるのではないだろうか。溝の用途として、導水施設(取水・排水)、防御用・侵入遮断用、貯水溝、運河、区画・地割用などが考えられるが、10次SX03については、道路の可能性も否定できないが、確実な用途は不明である。しかし12次SX02のように深く掘る溝の機能としては、防御用・侵入遮断用の機能、あるいは導水施設で水が流れていた状況が考えられる。

## 第2節 遺物について

その約8割は10次SX03からの出土である。瓦片もあるが、その多くは土師器、須恵器の坏と椀である。遺物の特徴を列記すると、(1) 須恵器に比べ土師器の割合が高い。(2) 土師器、須恵器の坏・椀はすべて回転台成形である。(3) 土師器の多くに赤彩が認められるが、回転ヘラミガキを施したものは、ごく僅かである。(4) 平底の底部で、体部は直線的なものが多く、土師器と須恵器に形態の差があまりない。(5) 底部の調整は回転ヘラ切り後、ナデ調整を施すものがほとんどである。ただし完全にヘラ切りの痕跡を消しているものは少ない。(6) 黒色土器A類も認められるが僅かである。(7) 土師器甕は、形態は同じものが多いが、法量は様々である。

網田龍生氏の研究によれば、8世紀後半以降、土師器生産に回転台が使用され生産量が急増し、土師器の比率が須恵器を凌ぐようになるという。また回転ヘラミガキ土師器の出現もこの頃であるが、8世紀末頃になると次第に少なくなる。同じく8世紀末から9世紀初頭になると土師器・須恵器坏については、底部切り離し後の調整が粗雑か、未調整になるものが多くなる。一方黒色土器は、9世紀後半頃に黒色土器A類が急増するという(網田 1994a, 1994b)。以上からするとSX03から出土した遺物は、ほとんどが9世紀前葉の範囲内におさまるようである。一方で9世紀後半頃とされる黒色土器A類も僅かだが存在する。黒色土

器は、B3・C3・D3区で出土しており、その他図化していない黒色土器小片も、ほぼ同じ地点から出土している。その中には、D3グリッドのⅡ層、C3グリッドⅡ層の註記があるものもみられる。SX03検出前に出土した遺物であると思われる、9世紀後半とされる黒色土器は、SX03の埋土でも上層からの出土、或いは流れ込みの可能性がある。また土層の堆積状況からは、SX01のような地盤改良を目的として人為的に一挙に埋め戻しされた可能性は低いので、ある時期大量に土器類が廃棄された後も、完全に埋まっていなかった可能性も考えられる。

このSX03以外は、遺物量が少ないが、SX03出土遺物と形態に大きな違いは特にないようなので、ほぼ同じ時期の遺構と考えられる。一方12次1区の溝SX02の黒色土器などは、9世紀後半頃の時期に比定出来る。

今回の調査では、多くの墨書土器が出土している。熊本市周辺の傾向として、墨書による文字は、8世紀代までは、底部に書かれる文字数が4文字程度で、当然一文字の大きさはそれ程大きくない。これが9世紀代になると、文字の大きさに変化が現れるという。底部に書かれる文字数が少なくなり、それに伴い1文字の大きさが大きくなるようである。今回の出土遺物の多くは9世紀前葉の時期に比定されるが、墨書の文字を見ると、4文字のものも比較的多く存在する。文字の大きさを見れば、小さいものもある反面、4文字でも比較的大きいものもあるなど、過度期の様相を示しているのかもしれない。

また「宅代乙公」の文字が頻繁に登場する。「宅代乙公」の他、「宅代」「乙公」「主乙公」の組合せがある。人名の可能性が高く、「ヤカシロ・オツノキミ」と読める。「宅代」も「乙公」も姓のようにも思える。その他、掲載番号65・121に「模様1」としたものがある。現在までに陳山廃寺第3次調査、神水29次、47次調査で計5点出土している。いずれも近接した地点であり、5点とも全く同じ模様であり、もともとは文字だったものが略された可能性がある。

### 第3節 まとめ

今回の調査区の旧字名は「西堀馬屋」といい、国府に属する馬屋があったと想定する説もある。そうであるなら、この周囲には当時の道路があったはずであるし、築地があっても不思議ではない。事実県の10次調査区の北には、熊本市教育委員会が実施した10次調査区があり、大規模掘立柱建物等が検出されている。またさらに北に位置する陣山遺跡では、8世紀から9世紀にかけての集落が検出されている。このように8世紀半ば以降の主要施設が集中する箇所である。特に熊本市の第10次調査区では大型掘立柱建物の他、門・築地塀・溝などが検出されており、官衛跡と想定できるような遺跡である。9世紀後半には廃棄され、一帯は墓域へ転じているようである。今回の遺跡の時期とも重なり、特に12次1区の溝SX02の廃棄時期は、熊本市10次調査区の遺跡が廃棄された時期と一致する。

今回の調査で検出された遺構も、北東側の調査区では、道路状遺構やピットが、南西側の調査区では、溝(12次SX02)が検出されている。残念ながら調査区が狭いため、全体的な溝の形状や道路の続き具合は不明で、復元するまでには至っていない。これらの遺構については、これまでの調査実績と照らし合わせ、具体的に道路や溝がどのように走っているかを復元する作業が必要になってくるだろう。また掘込地業の可能性が指摘されていた10次調査SX01、12次調査SX04については、第1節で述べたとおり、掘込地業とは確定することが出来なかった。とは言え、埋土の状況を見ると明らかに人為的なもので、何らかの目的をもって埋め戻されたものである。何らかの工作物があった可能性もあり、今後周辺の調査により明らかになることを期待したい。

(謝辞)

墨書土器については、坂上康俊九州大学大学院人文科学研究院教授に見て頂き、墨書の読み方をはじめ貴

重なお意見を頂いた。また、その仲介を図って頂いたのは熊本市文化振興課の網田氏、金田氏であり、また土師器の年代観や熊本市における墨書土器の様相について教示していただいた。記して感謝を申し上げる。

引用・参考文献

- 網田龍生 1994a 「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究 熊本大学文学部考古学研究室創設 20 周年記念論文集』龍田考古会
- 網田龍生 1994b 「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究 回転台土師器の諸様相』日本中世土器研究会
- 網田龍生編 2009 『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書－平成 20 年度－』熊本市教育委員会
- 金田一精編 2010 『国分寺跡 1』国分寺跡第 19 次調査区発掘調査報告書 熊本市教育委員会
- 熊本市教育委員会 1999 『熊本市埋蔵文化財調査年報第 2 号』
- 新熊本市史編纂委員会編 1998 『新熊本市史 通史編 第一巻 自然 原始・古代』
- 中島恒次郎 1992 「太宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究 中世土器基本資料の再検討』日本中世土器研究会
- 中村幸弘編 2011 『神水遺跡 3』熊本県文化財調査報告第 258 集 熊本県教育委員会
- 東 和幸 2004 「溝状遺構の一性格」『縄文の森から』第 2 号 鹿児島県立埋蔵文化財研究紀要
- 平岡勝昭他 1982 『肥後国分僧寺跡 1』熊本県文化財調査報告第 56 集 熊本県教育委員会
- 松本雅明 1975 「肥後国国分尼寺」『熊本市南部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- 松村真紀子編 1996 『陳山廃寺』陳山廃寺第 3 次調査区発掘調査報告書 熊本市教育委員会
- 丸山伸治・川俣恵編 1996 『陣山遺跡』熊本県文化財調査報告第 155 集 熊本県教育委員会
- 山下宗親・林田和人編 2013 「神水遺跡 13」熊本市の文化財第 29 集 熊本市教育委員会

表2 遺物観察表

(土器)

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)は復元数値		焼成	調整		色調		胎土	備考
				口径	器高		底径	内面	外面	内面		
1	9次I区 4層P9	土師器	坏	15.0	(2.9)	良好	回転ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	砂粒、褐色粒	全体に赤色顔料塗布	
2	9次I区 4層	土師器	碗		(3.7)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	白色粒、黒色粒、角閃石	全体に赤色顔料塗布	
3	9次I区 P8	須恵器	坏	(11.4)	3.2	(6.2)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	砂粒、石英、長石	
5	9次II区 4層	土師器	碗	(14.0)	4.9	(9.0)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	褐色粒、長石	
8	10次SX01 G2	須恵器	甕		(13.1)	良好	タタキ	灰オリーブ(5Y5/2)	黄灰(2.5YR5/1)	長石、黒色粒		
9	10次SX01 F2	土師器	甕		(2.7)	良好	回転ナデ	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	砂粒、褐色粒、黒色粒		
10	10次SX01 F3	須恵器	碗		(1.6)	(8.6)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	砂粒、褐色粒、黒色粒	
11	10次SX02 R1	土師器	坏	13.6	3.1	10.0	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	明赤褐(2.5YR5/6) にぶい赤褐(2.5YR4/3) にぶい黄橙(10YR6/4)	明赤褐(2.5YR5/6) にぶい赤褐(2.5YR4/3) にぶい黄橙(10YR6/4)	0.5mm以下の白色粒と雲母を少量含む 黒書土器(又上) 赤色顔料塗布	
12	10次SX02	土師器	坏		2.3	(7.9)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	灰オリーブ(5Y6/2)	オリーブ黄(5Y6/3)	砂粒、褐色粒、黒色粒	
13	10次SX02	土師器	甕		(6.7)		良好	回転ナデ ヘラケズリ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	残存部に赤色化石	
14	10次SX03 D4 D3	土師器	蓋	17.0	2.8		良好	回転ナデ	明褐(7.5YR5/6)	明褐(7.5YR5/6)	全体に赤色顔料塗布 黒書土器(又上)	
15	10次SX03 D4	土師器	蓋	(16.4)	3.3		良好	回転ナデ ヘラ切り	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	全体に赤色顔料塗布	
16	10次SX03 D3	土師器	蓋	(19.0)	3.6		良好	回転ナデ ヘラケズリ	明赤褐(5YR5/8)	明赤褐(5YR5/8)	全体に赤み有 全体に赤色顔料塗布	
17	10次SX03 D3	土師器	坏	(12.0)	2.5	(6.2)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	雲母、白色粒含む	
18	10次SX03 C3	土師器	坏	13.0	2.6	9.4	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/6) にぶい橙(7.5YR6/4)	明赤褐(5YR5/6) にぶい橙(7.5YR6/4)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む 黒書土器(又代) 赤色顔料塗布	
19	10次SX03 D3	土師器	坏	13.2	2.5	9.9	良好	回転ナデ ラケズリ後ナデ	明褐(7.5YR5/8)	明褐(7.5YR5/8)	長石、雲母、角閃石、白色粒、黒色粒含む 外側全体と見込み、一部分に赤色顔料塗布	
20	10次SX03 D3	土師器	坏	(12.7)	3.1	(6.8)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	橙(5YR6/6)	赤褐(5YR4/6)	雲母、角閃石、白色粒含む	

遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)のほばばばば			口径	器高	底径	状態	調整		色調		胎土	備考
				口径	器高	底径					内面	外面	内面	外面		
21	10次SX03 R1	土師器	環	12.7	2.8	8.2	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の長石	全体に赤色顔料塗布
22	10次SX03 埋I B3	土師器	環	13.4	2.9	10.2	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器(宅代乙公) 赤色顔料塗布
23	10次SX03 D4	土師器	環	13.3	3.2	9.3	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	砂粒を多く含む、褐色粒、黒色粒	内外面に黒ずみ有 赤色顔料塗布 底部が丸みを帯び、やや座りが悪い
24	10次SX03 C3	土師器	環	(12.9)	3.2	8.9	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	石英、長石、雲母、角閃石、白色粒 赤色粒、黒色粒	赤色顔料が部分(内)に見られる
25	10次SX03 D3	土師器	環	(13.4)	3.3	(8.6)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	2mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器(宅代乙公) 赤色顔料塗布
26	10次SX03 D4	土師器	環	13.7	3.0	9.0	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	砂粒、褐色粒	赤色顔料塗布
27	10次SX03 D3 E3	土師器	環	13.5	3.2	9.6	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	雲母、白色粒、赤褐色粒	全体に赤色顔料塗布 内側の口縁部、外側の胴部、底部中央に黒付着
28	10次SX03 D3	土師器	環	13.1	2.8	7.6	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	砂粒、褐色粒	全体的に赤色化している
29	10次SX03 B3	土師器	環	(13.6)	1.5	(9.9)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	0.5mm以下の白色粒と雲母を少量含む	黒書土器(宅代?) 赤色顔料塗布
30	10次SX03 B3	土師器	環	(13.2)	2.7	9.0	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器(今床) 底面に黒付着
31	10次SX03 D4	土師器	環	13.6	2.8	9.6	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器(乙公宅代) 口縁部、外面底部に黒、油煙付着
32	10次SX03 D3	土師器	環	13.1	3.2	9.7	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	砂粒、褐色粒	赤色顔料塗布
33	10次SX03 E3	土師器	環	13.4	3.1	8.8	良好	同転ナデ ラ切り	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り	同転ナデ ラ切り	同転ナデ ラ切り	同転ナデ ラ切り	同転ナデ ラ切り	褐色粒、黒色粒	胴部に黒斑(黒ずみ)有
34	10次SX03 D3	土師器	環	(13.4)	2.5	(9.2)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器(乙公) 赤色顔料塗布
35	10次SX03 D4	土師器	環	(13.8)	2.7	(9.0)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	0.5mm以下の白色粒、雲母、茶褐色粒を少量含む	黒書土器(宅代乙公) 赤色顔料塗布
36	10次SX03 D4	土師器	環	(13.4)	2.9	(9.0)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器?(宅代) 赤色顔料塗布
37	10次SX03 D3	土師器	環	(13.2)	3.0	(9.0)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ ラ切り後ナデ	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒書土器(同) 全体に赤色顔料塗布

遺物番号	山土地点	精別	器種	法量(cm)のは復元数値	口径	器高	底径	焼成	調整		色調		胎上	備考
									内面	外面	内面	外面		
38	10次SX03 E3 E4 野井	土師器	環	(13.4)	2.9	(9.4)	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ 板状打痕	明赤褐(5YR5/6) にぶい褐(7.5YR5/4)	明赤褐(5YR5/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(宅代乙公) 赤色顔料塗布	
39	10次SX03 E3	土師器	環	13.2	3.1	11.3	良好	同転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(宅代乙公) 赤色顔料塗布	
40	10次SX03 D3	土師器	環	13.6	2.9	8.7	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ	明褐(7.5YR5/6)	明褐(7.5YR5/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(乙公宅代) 赤色顔料塗布	
41	10次SX03 B2	土師器	環	13.4	2.9	8.7	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/8) 粒(7.5YR6/6)	明赤褐(5YR5/8) 粒(7.5YR6/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(大家) 赤色顔料塗布	
42	10次SX03 D4	土師器	環	(13.2)	2.6	9.2	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	赤褐(5YR4/8)	明赤褐(5YR5/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(大家) 赤色顔料塗布	
43	10次SX03 D3	土師器	環	(14.4)	2.8	9.2	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	にぶい褐(7.5YR6/4) にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい褐(7.5YR6/4) にぶい黄褐(10YR7/4)	0.5mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む	黒青土器(乙公または宅乙公) 赤色顔料塗布	
44	10次SX03 D4	土師器	環	(14.2)	2.4	(10.0)	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り	粒(5YR6/6) 粒(7.5YR6/6)	粒(5YR6/6) 粒(7.5YR6/6)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(乙公) 赤色顔料塗布	
45	10次SX03 D3	土師器	環	13.6	3.9	10.0	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/6) 粒(5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6) 粒(5YR6/6)	3mm以下の白色、茶色粒を多く、5mm程度の礫をやや多く含む	黒青土器(乙公) 全体に赤色顔料塗布	
46	10次SX03 D4	土師器	環	13.8	3.1	8.8	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(10YR7/4)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(乙公) 全体に赤色顔料塗布	
47	10次SX03 C3	土師器	環	(14.0)	2.8	(9.1)	やや良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	明赤褐(5YR5/6) 粒(5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6) 粒(5YR6/6)	0.5mm以下の白色粒と雲母を少量含む	黒青土器(乙公) 全体に赤色顔料塗布	
48	10次SX03 D3	土師器	環	(15.0)	3.0	(10.8)	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	明赤褐(2.5YR5/6) にぶい黄褐(10YR7/3)	明赤褐(2.5YR5/6) にぶい黄褐(10YR7/3)	4mm大の礫、1.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む	黒青土器(乙公) 全体に赤色顔料塗布	
49	10次SX03 D4	土師器	環	15.8	3.6	10.7	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	粒(5YR6/6)	明赤褐(5YR5/6)	1mm以下の白色粒、角閃石、雲母を少量含む	黒青土器(乙公) 赤色顔料塗布	
50	10次SX03 D4	土師器	環	15.3	3.1	9.5	良好	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	粒(5YR6/6)	粒(5YR6/6)	砂粒、黒色粒、白色粒	全体に赤色顔料塗布	
51	10次SX03 D3	土師器	環	14.2	3.6	7.4	良好	ヘラミガキ	同転ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	0.5mm以下の白色粒と雲母を少量含む	黒青土器(乙公) 赤色顔料塗布	
52	10次SX03 D4	土師器	環	(16.6)	3.9	(7.4)	良好	同転ナデ後ヘラミガキ	同転ナデ後ヘラミガキ	粒(7.5YR6/6)	粒(7.5YR6/6)	2mm以下の白色粒、雲母をやや多く含む	黒青土器(乙公?)	
53	10次SX03 B3 5T	土師器	環	17.7	5.7	7.0	良好	ヘラミガキ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	黒(2.5YR2/1)	にぶい黄褐(10YR7/4)	石英、長石、雲母、白色粒、黒色粒、4mm以下の茶色粒を含む	口縁部、底部に煤付着 黒色土器(内黒)	
54	10次SX03 D4	土師器	環	14.8	4.9	9.4	良好	ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後ナデ	にぶい褐(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR6/4)	石英、長石、雲母、角閃石、黒色粒、白色粒を含む	底部に黒線有	
55	10次SX03 D3	土師器	環	13.0	4.2	7.1	良	同転ナデ	同転ナデ 底部:同転へ ラ切り後板状ナデ	にぶい褐(7.5YR7/4)	明赤褐(5YR5/6)	砂粒、褐色粒	内面:緑部赤色化 外面全体に赤色顔料塗布	

遺物 番号	出土 地点	種別	器種	口径(cm)		器高	底径	焼成	調整		色調		断土	備考
				口徑	器高				内面	外面	内面	外面		
56	103CSX03 S3 D3	土師器	鉢	23.3	12.9	12.4	良好	底面:回転ヘラ切り後ナ デ	回転ナデ	内面 にぶい肌(7.5YR7/4) 底面(7.5YR6/1) 明赤帯(2.5YR5/8) 明赤帯(7.5YR7/1)	外面 にぶい肌(7.5YR7/4) 赤(10R5/6) 明赤帯(7.5YR7/1)	3.5mm以下の茶色粒含む 内外面に赤色顔料塗布 外面に黒帯(宅乙公)		
57	103CSX03 D3	土師器	杯	(9.0)	4.3	5.0	良好	回転ナデ後ヘラミガキ	回転ナデ後ヘラミガキ	明赤帯(5YR5/6) 明赤帯(5YR5/8)	明赤帯(5YR5/6) 明赤帯(5YR5/8)	1mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む 黒帯土器(宅乙公?) 赤色顔料塗布		
58	103CSX03 3T C3	土師器	杯	9.0	4.0	5.8	良好	回転ナデ	回転ナデ	明赤帯(5YR5/8)	明赤帯(5YR5/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む 黒帯土器(宅乙公) 口縁部に黒付着		
59	103CSX03 E4	土師器	杯	(9.2)	4.5	(6.4)	良好	回転ナデ	回転ナデ	明赤帯(2.5YR5/6)	明赤帯(2.5YR5/6)	0.5mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む 黒帯土器		
60	103CSX03 77% E4	土師器	皿	(15.0)	1.4	(13.0)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(5YR6/6) にぶい肌(7.5YR6/4)	黒(5YR6/6) にぶい肌(7.5YR6/4)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む、角閃石を微量含む 黒帯土器		
61	103CSX03 77% D3 E4	土師器	杯		(0.9)	7.1	良好	回転ナデ	回転ナデ	にぶい肌(7.5YR5/4)	にぶい肌(7.5YR5/4)	白色粒含む		
62	103CSX03 D4	土師器	杯	(1.4)	9.4	9.4	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(7.5YR6/6)	黒(7.5YR6/6)	1mm以下の白色粒を少量含む 黒帯土器(宅代乙公) 全体に赤色顔料塗布		
63	103CSX03 D3	土師器	杯	(1.2)	8.6	8.6	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(5YR6/6)	黒(5YR6/6)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む 黒帯土器(宅乙公) 全体に赤色顔料塗布		
64	103CSX03 D3	土師器	杯	1.8	9.3	9.3	良好	回転ナデ	回転ナデ	明赤帯(5YR5/6) にぶい肌(7.5YR7/4)	明赤帯(5YR5/6) にぶい肌(7.5YR7/4)	0.5mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む 黒帯土器(宅乙公) 赤色顔料塗布		
65	103CSX03 E3	土師器	杯	(1.7)	(8.4)	(8.4)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(7.5YR6/6)	黒(7.5YR6/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む 黒帯土器(取上+模倣1)		
66	103CSX03 D4	土師器	杯	(2.3)	8.1	8.1	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(5YR6/6)	明赤帯(5YR5/6)	1mm以下の白色粒を少量含む 黒帯土器(宅代) 赤色顔料塗布		
67	103CSX03 E3	土師器	杯	(1.5)	(9.9)	(9.9)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(5YR6/6)	黒(5YR6/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む 黒帯土器(宅代乙)		
68	103CSX03 D3	土師器	杯	(1.1)	(9.2)	(9.2)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(5YR6/6) 黒(7.5YR6/6)	黒(5YR6/6) 黒(7.5YR6/6)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む 黒帯土器(宅乙公?) 赤色顔料塗布		
69	103CSX03 C3	土師器	碗	(12.0)	5.1	(6.0)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(N2/0)	黒(N2/0)	簡潔な白色粒、雲母、角閃石を少量含む 黒色土器(内面)		
70	103CSX03 3T	土師器	碗	(12.8)	4.7	(6.2)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(N2/0)	黒(N2/0)	簡潔な白色粒、雲母を少量含む 黒色土器(内面)		
71	103CSX03 E3	土師器	碗	(13.6)	6.2	(8.7)	良好	回転ナデ	回転ナデ	明赤帯(5YR5/6) 黒(5YR6/6)	明赤帯(5YR5/6) 黒(5YR6/6)	1.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む、角閃石を微量含む 黒色土器(内面)		
72	103CSX03 3T B2	土師器	碗	12.6	5.6	6.6	良好	回転ナデ	回転ナデ	明赤帯(5YR5/8)	明赤帯(5YR5/6)	石英、長石、雲母、茶色粒、白色粒、黒色粒含む 全体に赤色顔料塗布		
73	103CSX03 D3 D4	土師器	碗	(15.7)	6.8	9.8	良好	回転ナデ	回転ナデ	黒(7.5Y7/6) 明赤帯(5YR7/8)	黒(7.5Y7/6) 明赤帯(5YR7/8)	石英、長石、雲母、茶色粒含む 全体に赤色顔料塗布		

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)		焼成	調整		色調		胎上	備考
				口径	器高		底径	底高	内面	外面		
74	10次SX03 D4 D3 C3	土師器	碗	(16.7)	8.3	9.3	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 橙(5YR6/6) 明赤褐(2.5YR5/6)	外面 にぶい橙(5YR7/4) 明赤褐(2.5YR5/6)	全体に赤色顔料塗布
75	10次SX03 D3	土師器	碗	16.5	7.4	9.2	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(2.5YR5/6) 橙(5YR6/6)	外面 橙(2.5YR6/6) 橙(5YR6/6)	全体に赤色顔料塗布
76	10次SX03 D3	土師器	碗	17.4	7.6	10.5	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) にぶい黄橙(10YR7/4) 明赤褐(2.5YR5/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) にぶい橙(7.5YR7/3) 明赤褐(2.5YR5/6)	縁付着 赤色顔料塗布
77	10次SX03 D3 B3	土師器	碗	(18.0)	(8.0)	(9.0)	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/8) 浅黄橙(7.5YR8/6)	外面 橙(5YR6/6) 浅黄橙(7.5YR8/6)	全体に赤色顔料塗布
78	10次SX03 D3 D4	土師器	碗	(17.4)	8.6	8.9	良	回転ナデ	回転ナデ	内面 橙(5YR6/6)	外面 橙(5YR6/6)	全体に赤色顔料塗布
79	10次SX03 D3 E3	土師器	碗	19.7	4.0	12.2	良	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR5/6)	外面 橙(5YR6/6) 明赤褐(5YR5/6)	白色粒 1.5mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む
80	10次SX03 4T	土師器	碗		2.7	(13.2)	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 橙(5YR6/6) 明赤褐(5YR5/6)	赤色顔料塗布
81	10次SX03 D3	土師器	碗		4.5	(17.8)	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 橙(5YR6/6) 明赤褐(5YR5/6)	赤色顔料塗布
82	10次SX03 C3	土師器	碗		1.3	(9.0)	良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 橙(5YR6/6) 明赤褐(5YR5/6)	赤色顔料塗布
83	10次SX03 D3	土師器	鉢		(2.2)		良	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
84	10次SX03 7/1 D4 E4	土師器	鉢	(12.6)	(10.3)		良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
85	10次SX03 D3 D4	土師器	甑	(13.4)	14.5		やや良	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
86	10次SX03 D3	土師器	鉢	(22.4)	(7.8)		良	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
87	10次SX03 C3	土師器	鉢	(25.7)	(7.9)		良	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
88	10次SX03 D3 D4	土師器	甑	(25.7)	(12.0)		良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
89	10次SX03 D3	土師器	鉢	(32.4)	(8.6)		良好	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布
90	10次SX03 C3	土師器	甑				良	回転ナデ	回転ナデ	内面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/6)	外面 明赤褐(5YR5/6) 明赤褐(5YR6/4)	赤色顔料塗布

遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)は復元数値		焼成	調整			色調		胎上	備考
				口径(幅)	器高		底径(厚さ)	内面	外面	内面	外面		
91	10米SX03 D3	土師器	甗	5.4	5.7	2.1	ナデ	指頭圧痕	にぶい黄緑(10YR7/4)	にぶい黄緑(10YR7/4)	褐色粒、角閃石	把手一部に麻付着	
92	10米SX03 C3	土師器	甗				ヘラケズリ後ナデ	指頭圧痕	にぶい黄緑(7.5YR7/4)	にぶい黄緑(7.5YR7/4)	石英、角閃石、2mm以下の茶色粒含む		
93	10米SX03 4T B3	須恵器	蓋	(19.6)	2.9		同転ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	灰(N5/0)	灰(N5/0)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む		
94	10米SX03 E3	須恵器	蓋	(11.6)	2.0		同転ナデ	同転ヘラケズリ	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	1mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む	雲母有	
95	10米SX03 D4	須恵器	蓋	15.8	3.2		同転ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	白灰(5B5/1)	暗青灰(5B4/1)	3mm以下の白色粒を少量含む	全体に雲母有	
96	10米SX03 D3	須恵器	蓋	(17.8)	3.2		同転ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	灰H(2.5Y7/1)	灰H(2.5Y7/1)	1mm以下の白色粒を少量含む		
97	10米SX03 D4	須恵器	蓋	17.3	3.1		同転ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	3mm以下の白色粒を少量含む		
98	10米SX03 E3	須恵器	蓋	(15.4)	2.0		同転ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	黄灰(2.5Y4/1)	灰(7.5Y6/1)	1mm以下の白色粒、雲母を少量含む		
99	10米SX03 D3	須恵器	蓋	(16.6)	2.2		同転ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	灰(7.5Y5/1)	灰(7.5Y5/1)	2mm以下の白色粒、茶色粒を少量含む		
100	10米SX03 弁丸 E3 E4	須恵器	蓋		2.3		ナデ	同転ヘラケズリ後ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3)	灰黄(2.5Y6/3)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む		
101	10米SX03 D4	須恵器	蓋	19.2	1.6		同転ナデ	同転ヘラケズリ	灰(N5/0)	灰(N5/0)	4mm以下の黄を若干、0.5mm以下の白色粒と雲母を少量含む	口縁部に雲母有 外縁部の一部に自然釉がかかる	
102	10米SX03 C3 2T 弁丸	須恵器	蓋		1.9		ナデ	同転ナデ	にぶい黄緑(10YR6/3)	にぶい黄緑(10YR6/3)	0.5mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む	蓋の上器(近代乙)	
103	10米SX03 D3	須恵器	蓋	(13.9)	5.0		同転ナデ	同転ナデ	灰(N6/0)	暗灰(N3/0)	1.5mm以下の白色粒、黒色粒、雲母をやや多めに含む	つまみと天井部に自然釉がかかる	
104	10米SX03 D3	須恵器	蓋		(3.6)		調整不明	同転ナデ	黒(7.5YR2/1)	灰口(2.5Y7/1)	1mm以下の白色粒を少量含む	全体に雲母が大きい 内外面に自然釉がかかる 内面に焼成時の付着物が多い	
105	10米SX03 P2 D4	須恵器	環	12.2	3.7	8.1	同転ナデ	同転ナデ	灰口(10YR8/1)	灰口(10YR8/1)	長石、白色粒、黒色粒を含む	口縁直下2mm~1.7cmの範囲で灰色に変色 重ね焼き痕	
106	10米SX03 D3	須恵器	環	12.1	4.1	7.0	同転ナデ	同転ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(7.5Y6/1)	角閃石、白色粒を含む	口縁一部に麻付着、不明に使用か?	
107	10米SX03 D4	須恵器	環	(12.0)	3.8	(7.8)	同転ナデ	同転ナデ	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	石英、長石、白色粒、黒色粒を含む		
108	10米SX03 C4	須恵器	環	(12.0)	4.1	(7.2)	同転ナデ後ナデ	同転ナデ後ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3)	灰黄(2.5Y6/3)	長石、角閃石、白色粒、黒色粒を含む	内外面の底部に麻付着	

遺物番号	山土地点	種別	器種	法量(cm)は復元数値		焼成	調整		色調		胎上	備考		
				口径	器高		底径	内面	外面	内面			外面	
109	10%SX03 D3	須恵器	坏	(12.4)	4.0	8.1	良	回転ナデ ラ切り後ナデ	内面 同転ナデ	外面 同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	浅黄(10YR8/3) 灰黄(2.5Y7/2)	淡黄(2.5Y8/4) 浅黄(2.5Y7/3)	長石、白色粒、黒色粒、2mm以下の砂粒	
110	10%SX03 B2 3T 破片	須恵器	坏	(11.9)	3.7	(7.6)	良好	回転ナデ 後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:へラ切り後ナデ	灰(7.5Y6/1) 暗灰黄(2.5Y5/2)	白色粒、黒色粒含む		
111	10%SX03 C3	須恵器	坏	(12.1)	3.8	8.4	不良	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	1mm以下の白色粒、雲母をやや多く含む	墨書土器(一)
112	10%SX03 D3 C3	須恵器	坏	(12.0)	3.7	7.2	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	1mm以下の白色粒を少量含む	墨書土器(板上)
113	10%SX03 C3 D3	須恵器	坏	(12.1)	3.5	(6.2)	良好	回転ナデ ラケズリ後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラケズリ後ナデ	灰(N5/0) 灰(N4/0)	灰(N5/0) 灰(N4/0)	長石、白色粒、黒色粒含む	
114	10%SX03 C3	須恵器	坏	(12.2)	3.8	(7.1)	良	回転ナデ 後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	長石、角閃石含む	
115	10%SX03 D3	須恵器	坏		(2.0)	(7.4)	良	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	角閃石、白色粒含む	
116	10%SX03 D3	須恵器	坏		(1.5)	7.8	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(10YR7/1)	石英、長石、角閃石、白色粒、黒色粒含む	
117	10%SX03 D3	須恵器	坏		(1.8)	8.0	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒、石英、長石、白色粒、黒色粒含む	
118	10%SX03 D3	須恵器	皿	14.9	2.2	12.1	良	回転ナデ ラケズリ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラケズリ	灰(15Y7/1) 淡黄(2.5Y8/3)	灰(15Y7/2) 灰(15Y7/1) 灰(5Y6/1)	黒色粒、褐色粒、白色粒	
119	10%SX03 D3	須恵器	皿	(16.0)	1.9	13.2	良	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1) 黄灰(2.5Y5/1) 灰黄(2.5Y7/2)	2mm以下の白色粒と黒色粒、雲母を少量含む	呑み行
120	10%SX03 C3	須恵器	椀	(13.4)	5.7	(8.0)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む	墨書土器(公道)
121	10%SX03 D3	須恵器	椀	(14.6)	5.8	8.8	良好	回転ナデ 後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	0.5mm以下の白色粒、雲母を少量含む	墨書土器(模倣1)
122	10%SX03 D4	須恵器	椀	(15.4)	6.7	(8.7)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	雲母、白色粒、黒色粒含む	口縁、高台に呑み行
123	10%SX03 D3	須恵器	椀	16.2	5.2	8.6	良好	回転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	灰(N5/0) 灰(N4/0)	灰(N5/0) 灰(N4/0)	1mm以下の白色粒を少量含む	口縁部呑み行
124	10%SX03 D3	須恵器	椀	(16.0)	6.6	8.4	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3)	灰黄(2.5Y6/2)	2mm以下の白色粒を多く含む	内面全体に黒付着
125	10%SX03 D3 D4	須恵器	椀	(15.1)	6.9	(7.6)	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/1) 灰(10Y5/1)	白色粒、黒色粒含む	
126	10%SX03 1T	須恵器	椀	(14.2)	8.8	8.2	良好	回転ナデ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	長石、角閃石、黒色粒含む	
127	10%SX03 D3	須恵器	椀	19.0	9.0	9.8	良好	回転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	同転ナデ	同転ナデ 底面:同転へ ラ切り後ナデ	にぶい黄(10YR6/4)	黄灰(2.5Y6/1)	1mm以下の白色粒、雲母、角閃石を少量含む	

遺物観察表

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)は復元数値		焼成	調整		色調		胎上	備考
				口径	器高		底径	内面	外面	内面		
128	10次SX03 D3	須恵器	碗		(2.5)	良好	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	雲母、黒色粒、白色粒含む	
129	10次SX03 C3	須恵器	碗		(1.2)	良好	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰(N5/0)	灰(N5/0)	白色粒含む	
130	10次SX03 D3	須恵器	碗		(4.3)	不良	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	白色粒、黒色粒含む	
131	10次SX03 D3	須恵器	碗		(1.2)	良好	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(5Y7/1)	角閃石、白色粒含む	
132	10次SX03 D5	須恵器	碗		(1.4)	良	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(N5/0)	雲母、角閃石、3mm以下の黒曜石、白色粒、黒色粒含む	
133	10次SX03 D3	須恵器	碗?	(21.2)	(3.9)	良	回転ナデ	回転ナデ	灰(5Y6/1)	灰(5Y6/1)	雲母、白色粒、黒色粒含む	
134	10次SX03 C3 D3 D4	須恵器	碗?	(17.2)	(5.9)	良好	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄褐(10YR5/3) にぶい黄褐(10YR4/3)	褐灰(10YR5/1) 褐灰(10YR4/1) 灰白(5Y8/1)	角閃石、白色粒、茶色粒含む 外面に自然剥がかる	
135	10次SX03 C3	須恵器	碗		(3.8)	良	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	白色粒、黒色粒含む	
136	10次SX03 D4	須恵器	碗		(3.8)	不良	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	石英、白色粒、黒色粒含む	
137	10次SX03 D3	須恵器	碗		(1.9)	不良	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラ切り後ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	石英、長石、雲母、角閃石、白色粒、黒色粒含む	
138	10次SX03 E3	須恵器	鉢	17.5	17.6	良	タタキ後ナデ消し	回転ナデ タタキ後ナデ 指頭直	橙(2.5YR6/6)	黒(7.5YR2/1) にぶい、褐(7.5YR6/3)	3mm以下の茶色粒、白色粒含む	
139	10次SX03 D4	須恵器	鉢?		(4.6)	良好	回転ナデ	回転ナデ	灰(N4/0)	暗灰(N3/0)	角閃石、白色粒、黒色粒含む	
140	10次SX03 D4	須恵器	鉢?		(2.7)	良好	回転ナデ ナデ	回転ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄褐(10YR5/3)	角閃石、白色粒、黒色粒含む	
141	10次SX03 D4	須恵器	壺?		(6.7)	良好	ヨコナデ タタキ 上只 痕	回転ナデ タタキ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	長石、角閃石、白色粒、黒色粒含む	
142	10次SX03 B3	須恵器	壺?	(37.0)	(4.9)	良好	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3) 褐灰(10YR5/1)	黒褐(7.5YR2/1) 褐(7.5YR4/3) 灰(5Y5/1)	長石、白色粒、黒色粒含む	
143	10次SX03 D3 D4	須恵器	壺?		(6.6)	良	回転ナデ	回転ナデ 底部:回転へ ラケズリ後ナデ	灰黄(5YR5/2) 褐灰(7.5YR6/1)	灰(N5/0) 灰赤(2.5YR6/2) にぶい赤褐(5YR5/4) 灰褐(7.5YR4/2) 灰(N4/0)	長石、雲母、黒色粒、白色粒、2mm以下の茶色粒と白色粒含む 内外面に煤付着	
144	10次SX03 D4 2層	須恵器	壺		(3.7)	良好	回転ナデ	回転ナデ	黄灰(2.5YR5/1)	灰(N5/0) 暗灰(N3/0)	3mm以下の長石、白色粒、黒色粒含む	

遺物番号	出土地点	種別	器種	法量(cm)〇は復元数値		焼成	調整		色調		胎上	備考	
				口径	器高		底径	内面	外面	内面			外面
157	10次SX05 B4	土師器	甕	(26.0)	(8.3)		内面 ヨコナデ	外面 回転ナデ	回転ナデ	ハケメ	粒(7.5YR7/6)	粒(7.5YR6/6)	内外面に黒ずみ有
158	12次1区 SX02 下層	土師器	杯	(12.2)	(2.7)		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ		明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	内面残存部は赤色化している
159	12次1区 SX02 下層	土師器	椀		(2.3)	(6.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ハラミガキ	黒(N1.5/0)	粒(7.5YR6/6)	黒色土器(内黒) 外面高台付近から底部に煤付着か？
164	12次2区 SX04 下層	土師器	甕		2.8		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ		にぶい黄粒(10YR6/4)	にぶい黄粒(10YR6/3)	外面に煤付着
165	12次2区 SX04 下層	須恵器	椀		(2.5)	(7.9)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黄(5Y6/3)	オリーブ黄(5Y6/3)	
167	12次2区 SX05	土師器	甕		(4.9)		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ		粒(5YR6/6)	粒(5YR6/6)	全体的に黒ずんでい 煤付着
168	12次2区 SX05	土師器	甕		(2.8)		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	ヨコナデ	にぶい黄粒(10YR6/4)	にぶい黄粒(10YR6/4)	
169	12次2区 SX05	須恵器	椀		2.7		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	底部:回転ナ ラ切り後ナデ	浅黄(2.5YR7/3)	浅黄(2.5YR7/3)	

(土製品)

遺物 番号	出土 地点	器種	法量(cm) ( )は現在数値		焼成	調整		色調		胎土	備考
			長さ	幅		凹面	凸面	凹面	凸面		
4	9次2区 4層	平瓦	(9.1)	(10.8)	良	布目痕 ナデ	凸面 タタキ	凹面 にぶい黄(2.5Y6/3)	凸面 にぶい黄(2.5Y6/3)		
6	9次3区 4層	丸瓦	(7.0)	(4.5)	不良	布目痕	凸面 タタキ	凹面 橙(2.5YR6/8) にぶい褐(7.5YR5/4)	凸面 橙(2.5YR6/8) にぶい褐(7.5YR5/4)	砂粒	
7	9次4区	土鏡	(4.6)		良			凹面 外面叫擾(7.5YR5/6)		砂粒	重量6.1g
145	10次SX03 D3	軒丸瓦	(3.8)	(8.8)	やや良好			凹面 にぶい橙(7.5YR7/4)	凸面 にぶい橙(7.5YR7/4)	3mm以下の白色粒、茶色粒を少量含む	
146	10次SX03 一括	軒平瓦	(6.2)	(8.2)	良好			凹面 にぶい黄橙(10YR7/2)	凸面 明褐(7.5YR5/6)	2mm以下の赤色粒、白色粒と5mm程度の礫を少量含む	
147	10次SX03	軒平瓦	(2.1)	(5.5)	良好			凹面 明褐(7.5YR5/6)	凸面 明褐(7.5YR5/6)	1mm以下の白色粒を少量含む	
148	10次SX03 E3	軒平瓦	(3.8)	(4.3)	良好			凹面 にぶい黄橙(10YR7/3)	凸面 にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の茶色、白色粒を少量含む	
149	10次SX03 D3	丸瓦	(22.5)	(16.7)	良好	布目痕	凸面 細目タタキ	凹面 にぶい黄橙(10YR7/4)	凸面 にぶい黄橙(10YR7/4) 橙(7.5YR6/6)	3mm以下の茶色粒、白色粒を少量含む	
150	10次SX03 D4	丸瓦	(15.5)	(9.3)	良好	布目痕 ナデ	凸面 ナデ	凹面 にぶい橙(7.5YR7/4)	凸面 にぶい黄橙(10YR7/3) にぶい黄橙(10YR7/4)	8~15mmの礫、2mm以下の灰色粒を少量含む	
151	10次SX03 D3	丸瓦	(25.2)	(7.4)	良好	布目痕	凸面 細目タタキ ナデ	凹面 灰白(2.5Y7/1) 灰黄(2.5Y6/2)	凸面 にぶい黄橙(10YR5/3) にぶい黄橙(10YR6/3)	5mm大の礫、2mm以下の灰色粒、白色粒を少量含む	
152	10次SX03 E3	平瓦	(12.7)	(12.6)	良好	布目痕	凸面 細目タタキ	凹面 にぶい黄橙(10YR6/4) 灰黄橙(10YR4/2)	凸面 にぶい黄橙(10YR6/4) 灰黄橙(10YR5/2)	1mm以下の白色粒を少量含む	
153	10次SX03 D3 E3	平瓦	(26.3)	(20.8)	良好	布目痕	凸面 細目タタキ後ナデ	凹面 明赤褐(5YR5/8)	凸面 明赤褐(5YR5/8) 橙(7.5YR6/6)	3mm以下の白色粒、茶色粒をやや多く含む	
154	10次SX03 D4	平瓦	(16.1)	(14.0)	良好	布目痕 糸切り痕	凸面 細目タタキ	凹面 黄灰(2.5Y6/1)	凸面 灰黄(2.5Y7/2) 黄灰(2.5Y6/1) 黒褐(2.5Y3/1)	3mm以下の白色粒を少量含む	
155	10次2層 D4	平瓦	(16.4)	(12.4)	良好	布目痕	凸面 格子目タタキ	凹面 黄灰(2.5Y4/1)	凸面 黒褐(2.5Y3/1)	1mm以下の白色粒と5mm程度の礫をやや多く含む	
156	10次SX03 一括	平瓦	(19.2)	(13.7)	良好	布目痕	凸面 格子目タタキ	凹面 灰白(5Y7/1)	凸面 灰白(5Y7/1)	2mm以下の白色粒を少量含む	
160	12次1区 SX02 上層	平瓦	(10.9)	(9.8)	良	布目痕	凸面 細目タタキ	凹面 黄灰(2.5Y6/2)	凸面 黄灰(2.5Y6/2)		

遺物番号	出上地点	器種	法量(cm) ( )は現存数値		焼成	調整		色調		胎土	備考
			長さ	幅		厚さ	凹面	凸面	凹面		
161	12次1区 SX02 下層	丸瓦	(4.6)	(10.8)	良	布目痕	へラケズリ	黄灰(2.5Y6/1)	灰黄(2.5Y7/2)	砂粒、小石を含む	
162	12次1区 SX02 下層	丸瓦	(8.1)	(8.7)	良	布目痕	細目タタキ	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	長石、砂粒を含む	
163	12次1区 表土	軒平瓦	4.8	(3.3)	良			にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)		
166	12次2区 SX04 上層	平瓦	(12.3)	(5.9)	良	布目痕	細目タタキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石、黒色粒、褐色粒	
170	12次3区 SX07	平瓦	(9.6)	(14.8)	良	へラケズリ	布目痕	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	褐色粒、長石	

# 写 真 图 版



9次1区全景



9次2区SX01



9次3区調査状況



9次4区SX03・SX04完掘状況



9次5区全景



10次調査区全景



10次調査区東壁基本土層



10次SX01検出状況



10次SX01完掘状況



10次SX01  
予備調査トレンチ（古井戸周辺）  
遺物出土状況



10次SX01西壁土層①



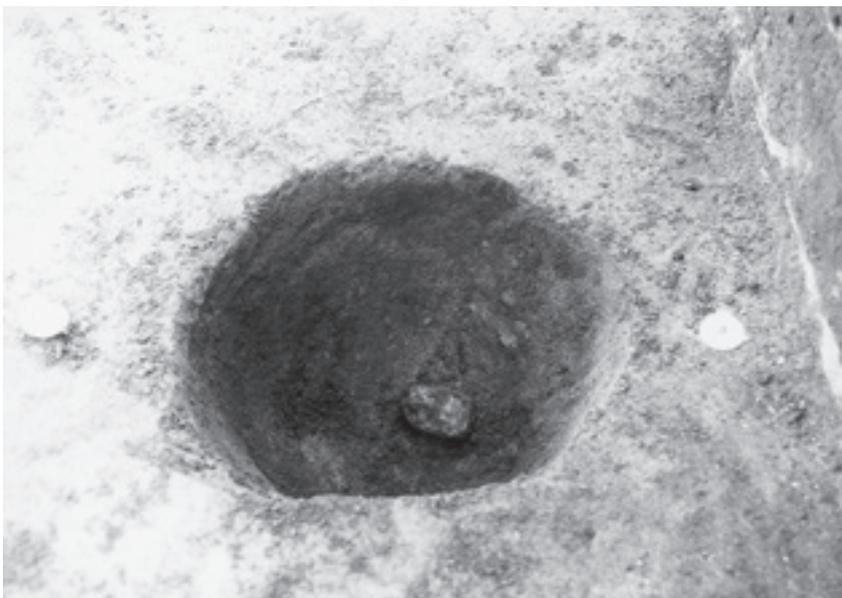
10次SX01西壁土層②



10次SX01西壁土層③



10次SX01  
(手前) 2トレンチ北壁土層  
(奥) 1トレンチ北壁土層



10次ピット1完掘状況



10次SX02遺物出土状況



10次SX03検出状況



10次SX03完掘状況



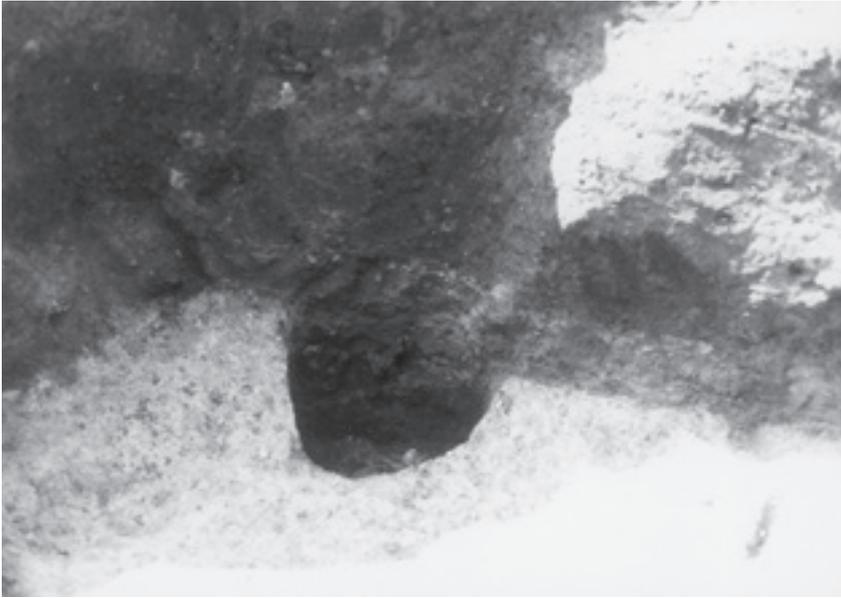
10次SX03西壁土層



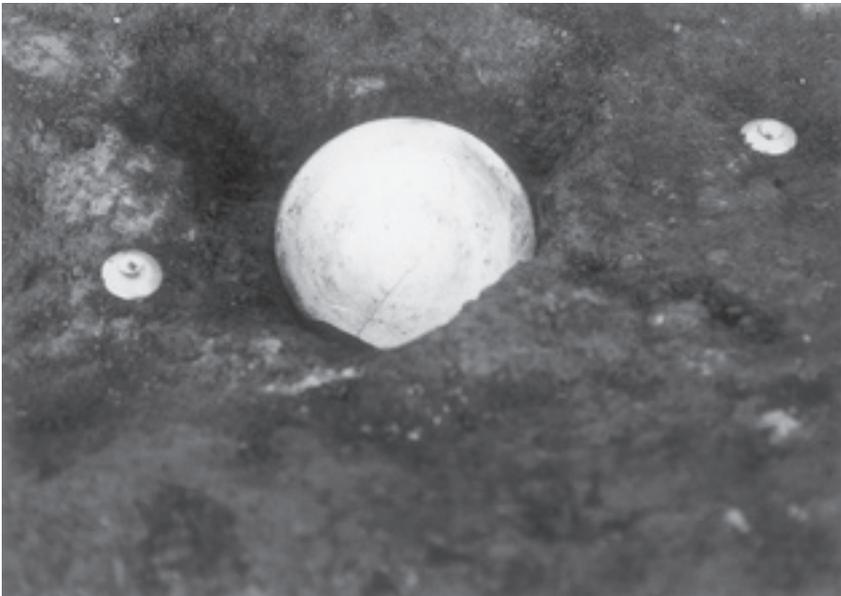
10次SX03トレンチ北壁土層



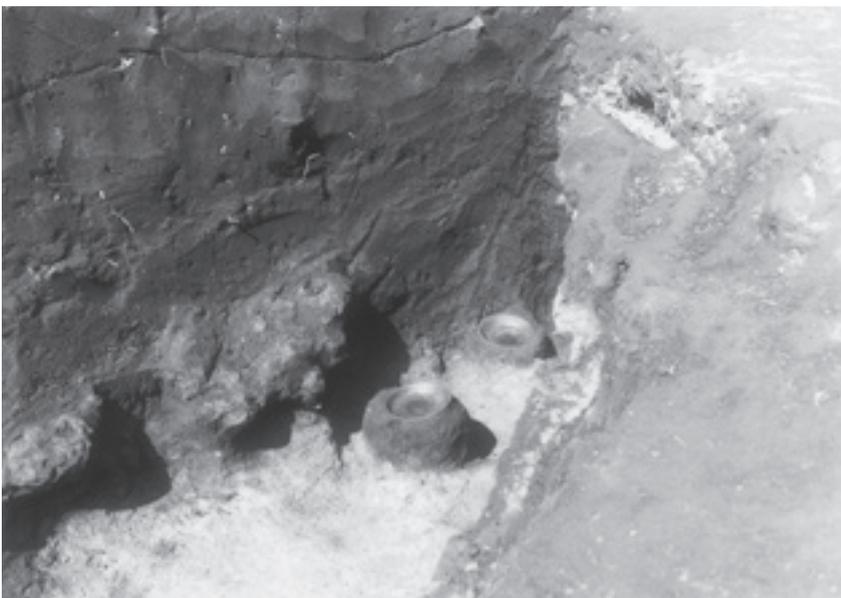
10次SX03内ピット2完掘状況



10次SX03内ピット3完掘状況



10次SX03遺物出土状況①  
(遺物番号 21)



10次SX03遺物出土状況②  
(遺物番号 22・23)



10次SX04・SX05検出状況



10次SX04・SX05完掘状況



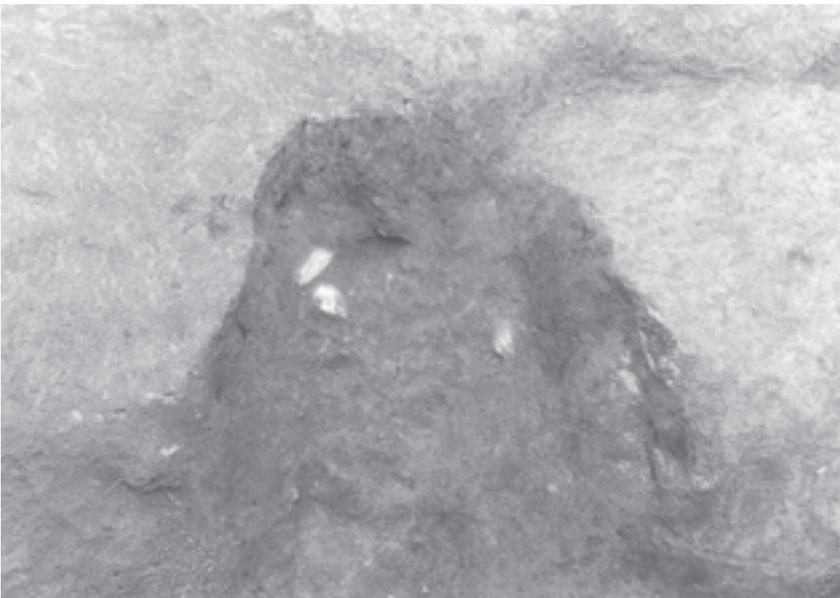
12次1区調査区全景



1 2 次 1 区 S X 0 2 土層



1 2 次 1 区 S X 0 2 遺物出土狀況



1 2 次 1 区 S X 0 3 完掘狀況



1 2 次 2 区 SX 0 4 ・ SX 0 5  
完掘状況



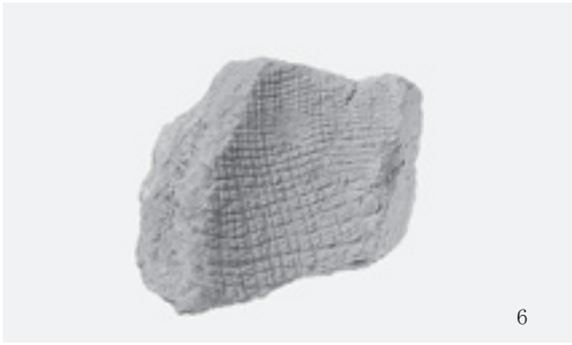
1 2 次 2 区 SX 0 4 ・ SX 0 5 土層



1 2 次 3 区 遺構 検出 状況



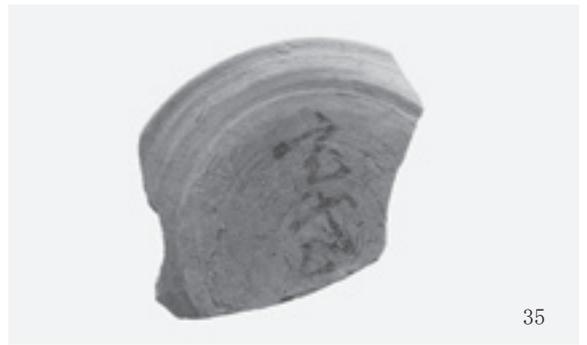
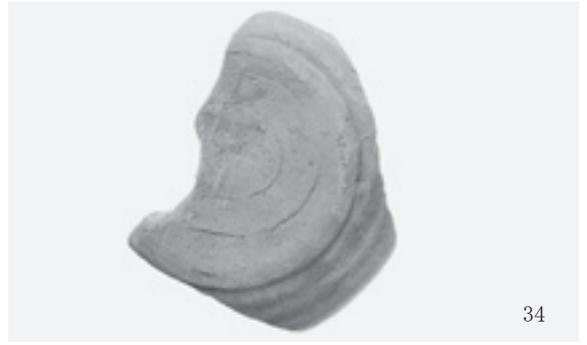
1 2 次 3 区遺構完掘状況



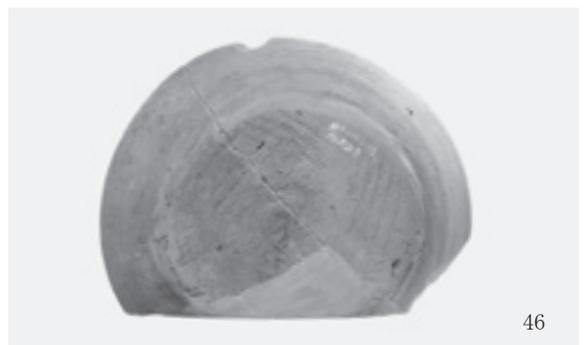
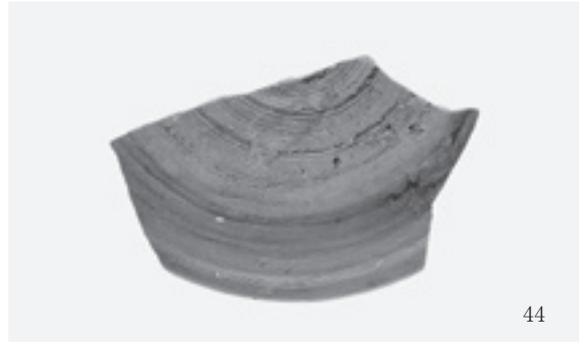
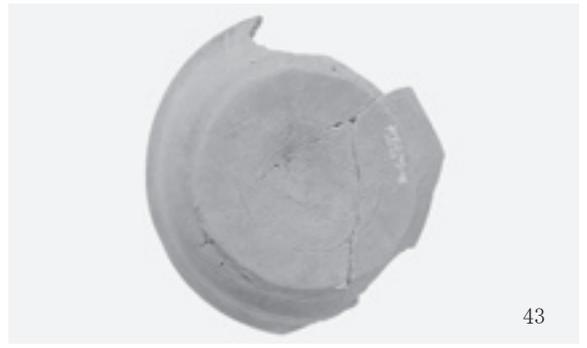


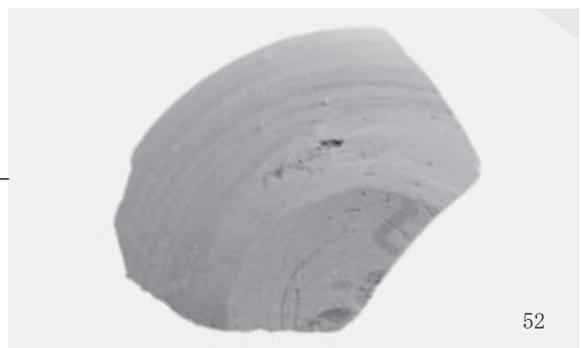
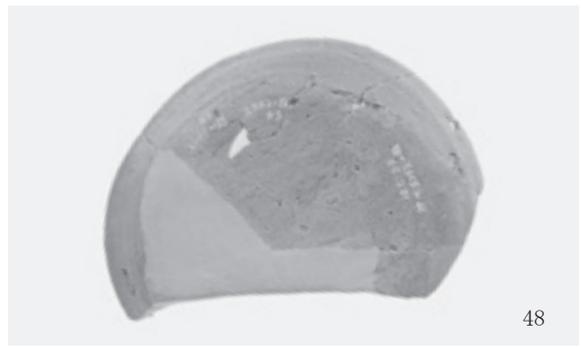


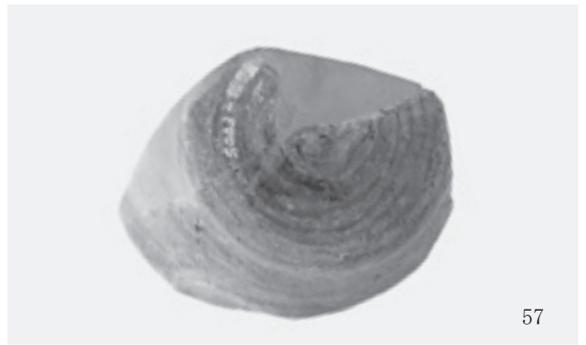


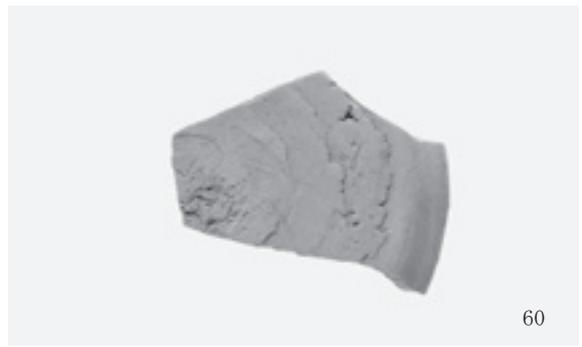


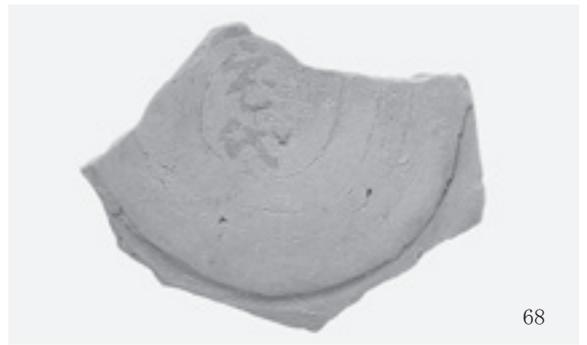
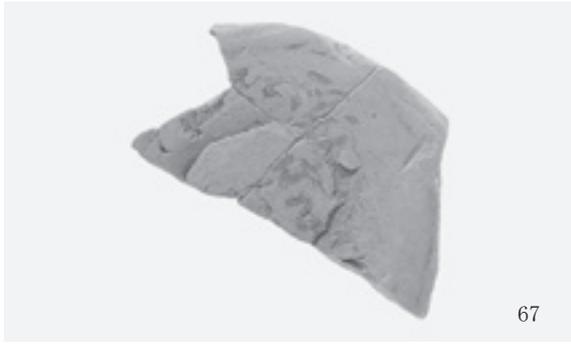
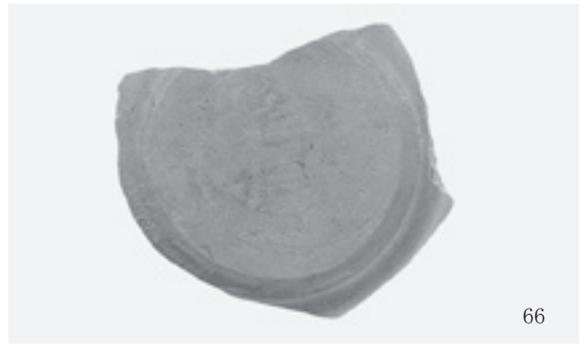












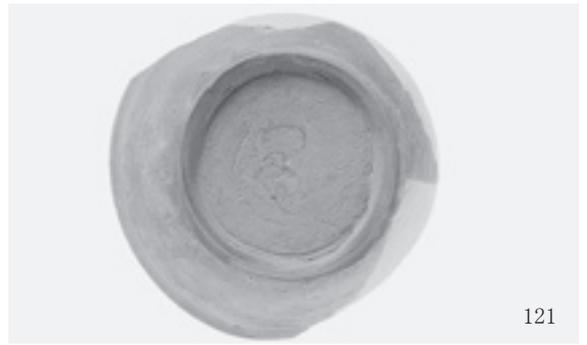
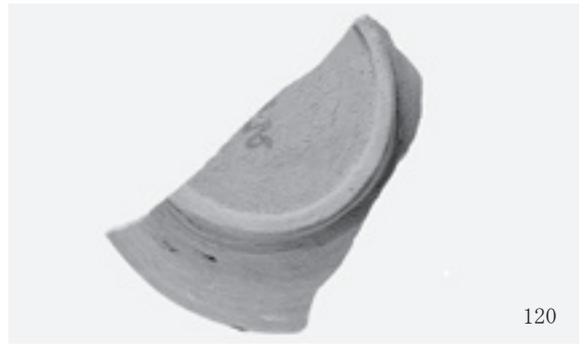












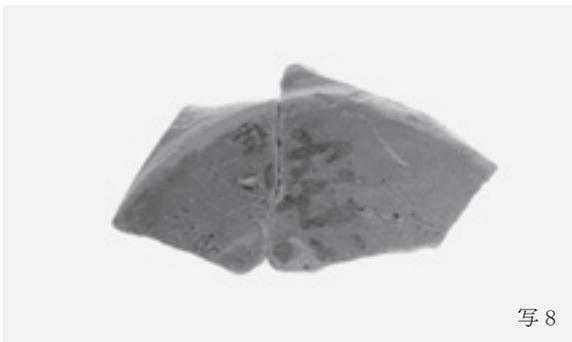
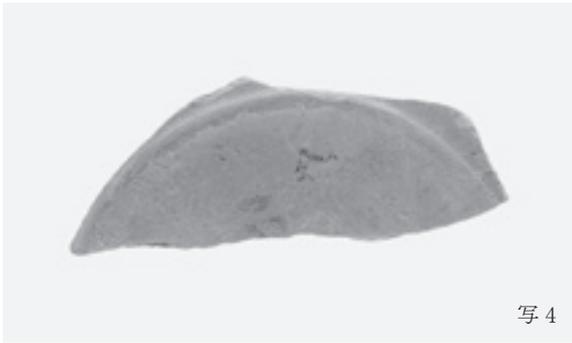


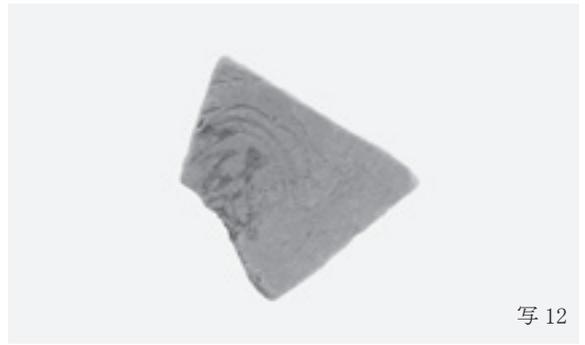


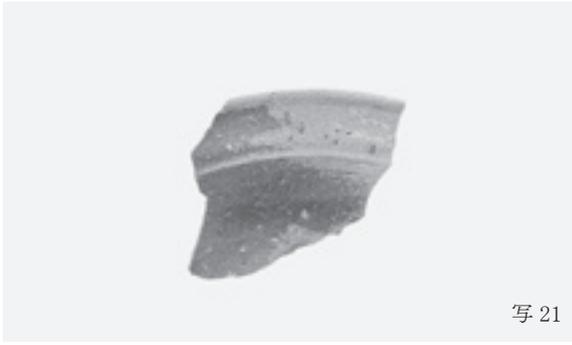












ふりがな	くわみずいせき 4							
書名	神水遺跡 4							
副書名								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第295集							
編著者	古城 史雄							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-8609 熊本市中央区水前寺六丁目18-1							
発行年月日	平成26年3月20日							
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺構番号					
くわみずいせき 神水遺跡	熊本市中央区 水前寺六丁目	43201	335	32度 47分 04秒	130度 44分 25秒	平成17年度 ～ 平成23年度	693㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神水遺跡	包蔵地	古代	道路状遺構 ピット 溝状遺構 地業	土師器 須恵器 瓦	10次調査SX03とした溝状遺構から、「宅代乙公」と墨書された土器など墨書土器が多量に出上している。

要約	<p>今回の発掘調査は、県道戸島熊本線整備事業に伴い実施された。神水遺跡は、阿蘇外輪山麓から熊本平野に向かって西になだらかに傾斜する肥後台地の一つ、託麻原台地の南端に位置する。陳山廃寺推定地（国分尼寺跡）の近接地であり、馬屋等の存在が想定されている地でもある。</p> <p>具体的な用途は不明だが、地盤改良を目的とした地業遺構（10次SX01、12次SX04）や4m程の深さと推定される溝（12次SX02）や墨書土器が多量に廃棄された溝（10次SX03）が主な遺構で、9世紀前半代に比定される。</p>
----	--

---

熊本県文化財調査報告 第295集

## 神水遺跡4

平成26年3月20日

編集 熊本県教育委員会

発行 〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷 シモダ印刷株式会社

〒862-0951 熊本市中央区上水前寺2丁目16-16

TEL 096-383-5512

---

発 行 者：熊本県  
所 属　　：教育庁教育総務局文化課  
発行年度　：平成 25 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 295 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 神水遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日